

転生して普通に生活したら
斬撃皇帝ってマジ
で？！

悪事

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

いきなり転生すると説明されるという、テンプレに遭遇した主人公。

しかし彼が選んでしまった特典はまたトンでもなく使い勝手が悪いもので、しかも彼の周りは彼の行動をねじまがった形で受け取ってしまう、

主人公は紆余曲折の果てに幽閉されてしまうが、

それも周りは勘違いしてしまい、混乱しきった世界に待つものとは？

そして主人公、勘違いされてるのに気付け〜！〜！！

これは英雄の物語ではなく、ただの喜劇に他ならない。

目次

プロローグ	1	舞台裏と決闘祭序盤	149
アルマニアの1日	13	業火絢爛なお祭り騒ぎ	
人の噂は七十五日、では斬撃皇帝の噂	40	真打ち登場！	180
は？	40	トリックスター乱入、交錯する意	202
学園に巻き起こる祭の予感、呑気な引きこもり	60	思と願い	225
決闘祭に向けて！	98	乙女たちの戦い	251
もしれない）斬撃皇帝	98	蒼き瞳の死生観	277
決闘祭		斬撃皇帝	302
学校行事の校長の話は、並大抵の長さ	128	宗教争乱	
じゃない	128	かくて賽は投げられた	343

信じるということ

—

373

鞆当て、もしくは小手調べ

—

393

まともではない人間の相手をまともに

することはない

—

417

プロローグ

目がチカチカする、光が目には痛い俺はどうしたんだろう。

「ここ、どこ？」目を開くとそこには白い空間で脳内に疑問がいくつも浮かぶ、すると遠くに離れたところに椅子とテーブルがあった。テーブルの上には壊れかけのラジオ。

そこに吸い込まれるように歩いていく。

「なに、これ？」

全く訳のわからない状況にパニックになるより、先に呆然としてみると、ラジオがイヤな音を出す。

ガガ、ガピーーピーギヤアーアーギイアーアー

「ちよ、ちよっと、どうしたのき、これ！」

予期せぬ事態に多少テンパってしまう、

あわててラジオのボタンを適当に押していると、
声らしきものが聞こえてくる。

「もーしーもしーもしー聞こえーえますかー聞こえますか」

「何を言ってるんだ？」

ラジオを苛立ちから思い切りぶっ叩くと、

「もしもし、聞こえますかー」

「うわっ！」突然、この白い空間に響く大きな声に驚く、
声からしてそれは女性のもと予想できる。

「聞こえてますよ！ここはどこなんですか!？」

「あつ、よかった 聞こえてるんですね

「ここは死後の世界ですよ」

「はっ！死後って何、ドツキリ？どういうこと？」

「そんなことはありませんよ、あなたは今生をまっとうされました」

「へーってそんなこと信じられるわけないよ！」

「じゃあ、はい、こちらをどうぞ」　ブン　空中をモニターにとある映像が浮かぶ。
そこには自分の死体の映像が浮かんでいた。

腹のそこから吐き気が込み上げる、吐き気に忠実に従い胃袋の中身がひっくり返って
中身が出てくる。

無様に地べたに這いつくばって、胃の中身を撒き散らす。

「信じていただけましたか？あなたが死んでしまった理由には様々な事情が
絡まりあって、説明するのにもいろんな壁があり

事情の説明どころか、さっきの映像だけでも

グレーグリーグリーだったので、これ以上の情報開示ができないんです」

「…いや、さっきの見たら、そういうの全部どうでもよくなったんで」

「そうですか？じゃあ、そろそろ本題に入りたいんですけど、よろしいでしょうか」

「……………はい、まあよろしいですけど本題って？」

「はい、あなたの死はこちらとしても予想外で、

あなたにはもう少し生きてもらわないと困るんです

それにこれから生きていた分の生と今からの生を足して

やっとな帳尻がつくんですよね」

「……………今の話からすると、あなたって神様の類い？」

「まあ、そう呼ばれているモノではありませんね」

あなたがそう認識できるのならそう呼んでくれると、

「こちらこそちらに干渉しやすくなるんですけど」

「ありがちな転生モノみたいだな、これ
まさかこんなことになるなんて」

「はい、それとこれからあなたの生きることになる世界って

異能が使える世界なんです、でもあなたが今まで生きてきた世界は

それが無い世界で、そのまま送ってしまうとすぐに死んでしまうんです

そうすると、またこちらでこの工程をしなければいけないので、

あなたには何か要望どおりのチカラを与えることになりました」

「これまた、それっていわゆる特典ってやつ？」

いきなり言われても何を選べばいいか、迷うなあ。

あと異能が使える世界って、どんな世界？

やっぱりなんか他の作品とか」

「いえ、そもそもこれから行く世界は、他のマンガ、小説とは

縁もゆかりもない世界です」

そうなるとなががいいのか、本格的に混乱する。

頭のなかで、確実に生き残れるモノか、強いチカラを使えるモノか、面白いチカラか、敵などいなくなるレベルのチカラか、悩んでいると、頭にあるものが思い当たる。

「斬撃皇帝ってイケるんですか、ほら型月のまだ、出てない作品で鋼の大地って言うのがあつて、それから使うことでできますか？」

「はあ、でも型月というならもつとありがちなチカラを、望まないんですか、王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）とか、無限の剣製（アンリミテッドブレイドワークス）とか」

「いや、そーゆうのって使い古し感があつて、それならなんか面白そうなモノを、選んでみようかなつて」

「そうですか、でもこれから行く世界にジンと呼ばれるモノはないので、これから行く世界に存在するモノに変えてしまいますが、それでもよろしいですか？」

「いいですけど、能力は変わらないですよね？」

「そこはきつちり、……じゃあ、能力も決まったところで、さつそく逝きますか。それでは良い生を」

「はっ?」

その瞬間に意識が消える、神様とやらの名前も聞いてないが、新たな世界ってどんな世界なんだろうか？

————転生してから、十七年と少し。俺は幽閉されていた。

何でこんなことに—————!?!?

アルマニア国騎士記録

この国いや世界でも類を見ず、もつとも恐ろしいツルギを持つ騎士を、

この国は産み出してしまった、あれは世界を滅ぼし切り裂くモノである。

そのあまりの危険さに現アルマニア女王リリーシャ・アルマニア・ブリエスタは彼を永劫縛鎖の禁断牢獄に、封印凍結することを決定。

しかしその後、史上初のSSS級のブレイドが現れ、

彼は封印凍結から脱出、その後にたった一太刀で世界を三度滅ぼす怪物を撃破する。

SSS級ブレイドの撃破を聞き付け、彼の身柄を剣神教が要求するも、王族はそれを却下。それ以後剣神教はアド・エデムの身柄をいまだに諦めず、騎士アド・エデムを永劫牢獄からの解放することを要求している。

一方、真逆の意見として大地母神教は、アド・エデムの即時処刑を要求している。大地母神教は「彼のツルギは自然界や人、動物、ブレイドに悪影響を及ぼす。ブレイドの対する武力はこちらがいくらでも貸し出す、ゆえに、かの騎士を急ぎ葬ってくれ」との

要請があつた。

周辺国の反応は、彼のツルギは危険すぎる故に一騎士ではなく、連合国の刃騎士団預かりにすることを要請し続けている。

アルマニア国内では、何も知らない国民は彼を英雄として崇拜しており、現状の扱いなどに文句をつけている。

一部で彼のツルギの間接被害を受けた国民は彼に対して憎悪を向けている。貴族では彼の幼馴染みである、ミコト・ブレイズ・ヴォルカニアは、彼の即刻解放と、婚約を嘆願書として提出した。

他の貴族は彼を自身の派閥、陣営に組み込もうと画策している。

王族では、第二王女アリスタ・アルマニア・ブリエスタは、彼に好意を抱いているらしく、禁断牢獄の最下層に足しげく通っている。

姉のリリーシャ陛下も同じような状態で現在は彼のため、待遇改善を続けている。彼の実家であるエデム家は対応を保留としている。

(下手に貴族位を剥奪して、彼の怒りを買いたくないという、臆病な者たちが放置しつづけている。)

結論としてかの騎士に対する明確な扱いは検討中である。我が国でも、あの騎士をどうするかで、王族派閥と貴族派閥は対立をさらに深めており、このままでは外の脅威はおろか、我が国の内部分裂によって、この国は終焉を迎えるだろう。早急に対処法を検討しなければならない。

この異常ともいえる状況にも、かの騎士は耐え続けている。

その精神はまさに化け物とも言えよう。

様々な陣営に多様な評価をされている彼だが、この書類を見て頂ければ、その規格外さは十分に理解できただろう。最後になるが、かの騎士の名前を記してひとまず区切りをいれることとする。

かの騎士の名は、アド・エデム。

世界最強のツルギと呼ばれる男である。

騎士記録 No. 000 アド・エデム

ツルギ名 斬撃皇帝 能力 強化

謎の多いツルギで現在でもその効果、チカラの一端しか、
理解しきれていない、ただわかるのはあれは、

人々（我々）のため、世界を滅ぼすという我々の在り方を

完璧に体現したツルギであることだけである。

これは英雄の物語ではない、周りが騒ぎたてようと

世界が彼をもてはやそうと、国家が畏れようと、宗教でどのように語られようと、人々
にどのように怨み憎しまれようと関係ない。

これは、ただの周りと主人公のすれ違いによって生まれる物語であつて、ただの引き
こもりの墮落しきつた喜劇にすぎない。

注意 たまに働くよ。

勘違いしていつてね

アルマニアの1日

アルマニア国それは生物の自由を信じて建国された国である。

アルマニアは周辺国家には存在すらない宗教の自由や、学門を貴族、平民の区別なく学べるといった特殊な法律が存在する。人間種が建国の主な参加者のため、獣人やエルフなどに、多少の差別が存在するが法律で差別行動は禁じられているため、表立った差別はない。

しかし宗教の自由により異種族が国内に入ってきて来て、国家の乗っ取りを画策する者などがいるせいで他種族の待遇が悪くなり、それに反発するなど、国家に対する反感が増加するという悪循環が起きてしまっている。

王宮にて

「……………陛下に起きましては本日もその尊顔を—————」

荘厳な王宮の謁見室にいるのは膝をついて、にこやかな笑顔で笑いかける整った顔立

ちの青年と、侍女が一人、そして王座に深く座っている女性がいる。髪の毛は光輝く金色、スタイルはまさに傾国というべき素晴らしき。その眼には、サファイアを埋め込んだような深い蒼、大人の女性というにはまだ早く、少女と言いきるには凜としすぎている。

しかしそこには王者の風格が存在する。

だが今はうんざりした格好で、正面の男のおべっかを聞き流している。

「要約するなら永劫牢獄から、騎士アド・エデムを解放し、そちらで保護をしたいということですか？」

この王座にいる女性こそが、現アルマニア女王リリーシャ・アルマニア・ブリエスタであり、その前に座っているのは剣神教団の教祖であるソードス・レイピア・エイル。今回はかの名高き斬撃皇帝を、牢獄から解放するか否かで、対談をしていたのだ。

「はい、女王陛下。騎士エデムは無実の罪によって囚われており、彼の幽閉は不当なものであつて彼を解放し、私どもの教団で保護をしたいと、愚考する次第、どうか寛大な処置を」

「なりません、騎士エデムは確かに封印凍結していますが、こちらが強制しているのではなく、彼たつての要請で封印しているのです。彼を解放するのは、彼がそれを所望してからです」

「……………ならばせめて騎士エデムに面会することをお願い致します」

「ソードス、あなたが面会を希望しようと永劫牢獄に面会の許可がおりるのは、王族やその血筋を継ぐ者のみ、あなたが面会できることはありません」

「どうしても許可はいただけないのですね。」

まあ、彼もツルギの使徒、いずれ我々の元に来てくれる事でしょう。

…では女王陛下、そして騎士エデムに、劍神の加護あらんことを」

再三に騎士エデムを引き取る旨を却下され続けているにも関わらず、それでも彼を解放しようとするふりをし続ける。

彼が最初に牢獄に送られる原因を作ったのは劍神教にも関わらず、

今度はエデムのため行動しているとは、何とも滑稽なものだ。

剣神教の教祖であるソードスが謁見室内から出ると、

緊張していた空気がわずかに弛緩する。

王座の隣にいた侍女がリリースャに声をかける。

「お疲れさまでした、女王陛下下」

「これで何度目の嘆願かしら、彼らがアドを解放しろって

言ってくるのは？」

「5回目でしょうか、いい加減彼らも理解してはいただけなのでしょう？アド・エデムは王族派閥の一員にあると」

「仕方ないわ、公にはしていないのだし、

彼が王族派閥に加わるのはリターンもあるけどリスクも大きい、

王族派閥の一員にするには壁が多すぎる。

ほらアドって民の大半からは英雄視されているけど、彼がツルギを使った場所に住んでいた民からすれば、彼は悪鬼羅刹の類いにみえているのでしようから」

ちなみにアド・エデムが王族派閥にいるというのは、

彼女たちの勘違いであって、彼は派閥のことなんて欠片も知らないのである。公にしているという事は、彼も気づいていないということ、別に王族に大した思い入れがあるわけではないのだ。

勘違いに気がつかぬまま、エデムが王族派閥であるという想定で話は進む。

「アド・エデムのツルギというと、斬撃皇帝でしょうか？

名高き星喰らい、人類の体現、真の災厄と呼ばれる」

「そうね、彼のツルギは大地を浸食し二度と草木の生えない不毛の荒野に

変貌させる、……でもあれは彼が優しすぎるため、

全ての存在を救うためのそんな彼のツルギが他ならぬ犠牲を強いるなんて、皮肉にしてもいいところ。」

「心中、お察しいたします。 女王陛下」

「そういうのなら私達しかいない時くらい、

名前でよんでくれない？ マキナ」

「リリーシヤ様、そのようなこと宰相様にお聞かれてもすれば、小言の嵐がやって来ますよ」

リリーシヤを軽くたしなめるのは、メイド服をまとった美しい少女、胸元はメイド服を押し上げるほどに大きな胸部装甲を確認できる。端的に言うなら巨乳ということだ。他に深い緑色、つまり深緑の髪の毛を持ち、エメラルドを流し込んだような緑の瞳を持つている神秘的な女性。彼女の名はマキナ・ジーン・デウスエクス。アルマニア国立学園次席卒業者にして、王族を守るために選抜された珍しい女性のツルギ使いである。

「硬いことを言わないで、はあ、アドのところに行きたいわ。」

たぶん、アリスタは彼のところに今日も行つたのでしょうか？」

「はい、アリス様は本日も禁断牢獄へ向かいました。まあ仕方ないのでは？アリス様がアド・エデムに好意を持っておいでなのは、リリーシャ様もお分かりでしょう」

「私だって、今すぐにも行つてアドと話をしたいのに。まったく、こういうときに立場って面倒よね」

「……………女王であるリリーシャ様がアリス様のように、アド・エデムのところに面会でもしようものなら、剣神教や大地母神教、貴族派閥は喜んで噂を捏造するでしょうね」

「ぐっ！こんな時に地位が邪魔をするなんて」

「ふっ」

「何、笑ってるの〜それって不敬罪よ〜」

冗談を言つて、この場の空気を緩ませていると、マキナが笑いの理由を話す。今、ここにいるのは女王と侍女ではなく、二人の少女だった。

「ああ、申し訳ありませんリリーシヤ様。

しかし今思うと不思議ではありませんか？

学園では、役立たずと罵られていた彼が、

今では世界の混乱の中心にいる」

「……………それもそうね、アドに始めて会った時にあいつ。いきなり、

寝始めたのよ、普通王族が来たら媚びにお世辞でもするでしょ？」

「しかしリリーシヤ様はそんな彼のことが入ったものでは？」

彼はなんとというか野生の動物か、空気のような感じですから」

「……………確かに！あいつはいつでもあいつだった。

王族として生まれ、王族として終わるだけの私に、

自分なりに生きることを見せてくれた。

あいつには借りを返さない」と

リリーシャはアドの想いを胸に秘め、国のために今日も様々な問題に取り掛かる。リリーシャは本心ではわかっていた、自身がアド・エデムと結ばれることが不可能に近いと。マキナはそんな主の未来に幸あれと願う。……彼女は自覚していないが、主のことを切実に願うマキナもアド・エデムに惹かれているのだった。アド・エデムはそんなことを察することなく、幽閉生活を満喫しているのだが、彼女らは知るよしもない。

視点は変わって教祖側では、

「教祖様、かの騎士エデムはどうでしたか」

「……進展はありません、依然として王族達は騎士エデムを捕らえたままにしておくそうです」

「なんて傲慢な！ いったい騎士をなんだと行って」

「そこまでです、どこに王族の耳があるかもわかりません。

……しかし今にしてみれば、大変惜しいことをしました。

ただ周りの大地を枯らせ、大きくなるだけのツルギかと思えば

SSS級のブレイドを一蹴するほどのツルギだったとは、

まったく、私も見る目がない」

「それは仕方ありません、教祖様の責ではなくかのツルギの本質に、気づけなかった我々の咎でもあります。ですが現状あのように強力なツルギが我々の手にないというのはおかしな話です。我々は劍神からツルギの管理を任された者達。

俗世を生きる王族に騎士エデムはいささか手に余る」

「しかし、だが我々は騎士エデムを永劫牢獄に封印するきつかけを、作り出してしまった。アド・エデムの劍神教の心証は良くないでしょう。となると彼を我々、劍神教に納刀するには、どういった行動をとるべきか」

ちなみに納刀とは、劍神教に入ること指していて、

ツルギ使いの半分が剣神教に属している。

「しかし彼もツルギ使い、いずれ我々の考えに賛同するようになるでしょう。賛同せずとも彼を剣神教に納刀させていれば、我々はアルマニアどころか連合国や大地母神教の奴らに対し、強大な発言権を手にすることが……………」

「……………いざとなれば彼の家族をこちらで、保護、します。

それなら彼もこちらにつくでしょう、王族が見捨てたとしても、

王族と彼の関係にひび割れを狙えます。

文句を言われることはないでしょう、我々はただ彼の家族を、保護、しているだけなのだから」

「……………ただ家族を手に入れようにも、王宮内のどこかにいるとか、どこか辺境にいるとか、情報が錯綜していて、詳しいことがわかっていません。それに見つけたとしても王族の息のかかった騎士が警備をしているかと」

「ええ、だからご家族を保護する計画は居場所が判明してからで

それよりいつそ彼にハニートラップでも仕掛けてみましようか？

「……………いや永劫牢獄に封印されていて会話もままならない、
ん、確か今年納刀した者の中に彼と同期のツルギ使いが、
私ではダメでも、そういった人間なら」

「ああ、同級生で仲のいい者ですか、わかりました

「急ぎ騎士エデムと仲のよかったツルギ使いを探します。」

「はい、お願いします……………」

「……………騎士エデム、あれほど強いツルギ使いが

王族という者に従わされるなど言語道断。

正しきツルギとは全て我々劍神教にいななければならない。

返してもらいますよ、女王陛下。

我々が劍神様から賜りしツルギを……………」

教祖はただ静かに策謀を張り巡らして、

史上最強にして最大のツルギを手にしようと暗躍する。

宗教にしてブレイドと積極的な戦闘を行う剣神教。

他の宗教を異端とし、ツルギによって弾圧する剣神教。

果たして彼らはアド・エデムを、手にいれることができるのか。

———永劫縛鎖の禁断牢獄———

暗い、ただただ暗く、射し込む光はほんの僅か。

この牢獄内は国に対し恐ろしい罪を犯した者を、閉じ込める牢獄。それこそが永劫縛鎖の禁断牢獄。作られてから数えることができるほど使用頻度が低く、一時期は壊して新しい建物を作ろう等の声があった。

だが、今、現在この牢獄の最下層にはある騎士が自ら収監されている。

壁はAAA級ブレイドの突進にも耐え、騎士のツルギにも耐え抜ける強度で、それでも十分なのに、拘束を得意とする騎士を常に監視させている。

そんな嚴重というのも過剰な空間にいるのは、斬撃皇帝の担い手、最強にして最凶のツルギの持ち主である騎士アド・エデム。

その外見は中肉中背でそこそこに整ってはいるが、騎士に求められるような精悍さは微塵もなく、ただぼんやりした顔の青年である。

背は180の後半でそこそこ高いが探せばまだ上がいるくらい、

髪の毛の色は黒で、瞳も同様に黒、珍しいがそこまで希少というわけではなく、街にいけば騎士に見えないだろう。

そんな彼にアームの鎖で、がんじがらめになっているのは

銀髪のポニーテールに翡翠の瞳を持つジェイル・ロック・シルドヴァとチェーン・ロック・シルドヴァの双子の騎士。

「お姉ちゃん、アドがまた寝てるよ」

「わかってるわ、チェーン。それでも気を緩めちゃダメよ」

「はーい、……………それにしてもアドが脱獄するなんてないと思うんだけど。お姉ちゃん、これって本当に必要なことなの？」

「必要なことなの、アドにはかわいいそうだけど、

こうしておかないと貴族、王族はアドをこわがるから」

「アドは怖くないのにね〜」 「そうね〜」

気の抜けるような会話だが、この二人は建国以来、

騎士の罪人を捕らえるのを専門とするシルドヴァ家の、次代の少女たちなのだ。先祖代々、鎖のアームを発現して騎士の捕縛や制圧を主にしており、特にこの二人は歴代最強と呼ばれ鎖は相手を行動不能にするどころか、敵対者を絞め殺すことも可能なレベルである。

その二人が一瞬も気をぬかないで鎖を行使している。

どのような騎士であろうと身動きどころか、呼吸すら困難な状況で拘束されている騎士はなんとこのんきに眠りこけている。

すーすーすー、と規則正しい寝息が牢獄に響く。

すると彼は目を開けた。

「……おはよう、ジェイルにチェーン……ちよつと質問なんだけど、もう朝なのかな？」

「おはよう、アド。まだ朝ではないわ」

「そうなんだ、いや〜こうやってジツとしてたら、いろいろ混乱しちゃって」

「おはよう、アド。今は夕方で朝じゃないよ。アドって本当にぼんやりしてるね〜」

「む〜仕方ないだろう、暗くて朝も昼もわかんないだから」

「「そうだね〜」」

穏やかな会話が牢獄で交わされていると、

突然、金髪のロングヘアーに蒼の瞳を光なき牢獄内で煌めかせ、まだ少女といった子供が最下層の牢獄に現れる。

現れたのは第二王位の保持者であるアリスタ様だ。

「アド、起きてる？……私、来たよ」

「……ああ……アリスタちゃん、おはよう。丁度、起きたところなんだ」

「それよりアリスタ様、またここに来て大丈夫？リリーシャ陛下に、しかられちゃいますよ」

「……大丈夫……そもそもアドがここにいることだって不自然なことなんだから」

「アリスタちゃん、別に俺はこのままでいいんだよ」

「どうして？……こんな寂しい牢獄に閉じ込められて……それでも我慢し続けるの？」

そうアド・エデムはいつも笑っている。

こんな理不尽にも負けないで、この闇にも負けないような明るい笑顔を見せてくれる。この笑顔に私は助けられたのだ。王族として期待されていない私にも、できることがあると教えてくれた。だから今度こそ私が彼を助ける。そう、心に誓いをたてた。

「アド……………学園ではいつもあなたに助けられた、……………だから今度は私が助ける番」

「別に気にすることないのに、偶然だつて偶然。」

「……………ウソばかり……………あんなにタイミングよくいつも来るなんて、ありえないよ……………アドは本当に優しいね」

彼は王族である自分を助けながらも、その恩を決して誇ろうとはしなかった。妾の子の私に優しくしてくれただけでなく、姉との仲を改善してくれた。

「アド、必ず私があなただけを助けるね。だから待ってて、そしてまた一緒に学園に行こう」
「うーん、まあゆっくり待ってるよ」

「アリスト様、そろそろ時間だよ」

双子が自分に声をかける、王族である自分であろうと彼と面会できるのは、最大でも5分といったところ。そんな短い会話なのに今の私には力が心から湧いてくる。さしあたって姉と彼を助ける計画を進めていこう、リリーシャ姉さまはアドと話をしたこと伝えたら、羨ましがるかかと、とりとめもないことを考え牢獄をあとにした。

SIDEアド・エDEM

さて転生してから俺は父、母、妹のいる貴族の家に生まれた。

貴族として必要な勉強を詰め込まれるだけの平々凡々な生活を過ごしていると、自分にツルギという不思議な力の才能があるとかで国立の学園に行くことがいつの間にか決定していた。

学園で、いざツルギをだそうとしてみたら、斬撃皇帝は最初ただの種子形態で、そのことから役立たず扱いされ、婚約者からも嫌われてボツチ学園生活。しかしブレイドとの実戦でヤバい状況になり斬撃皇帝を使ったら、結構強いブレイドを撃退したのだ。………まあ斬撃皇帝の能力で地面がものすごい枯れてしまって、そのせいで剣神教やら大地母神教とかに危険物扱いされて幽閉コースを一直線に突っ込んでいった次第。でも幽閉されてみたら、看守である双子のジエイルとチエーンは、ものすごく優しく、そのうち自然と仲良くなって、学園時代よりも癒される人間環境でのんびり幽閉されてたら、SSS級のブレイドが出たとかで　もうおしまいだーとか国中が言っていて、その時にちよつと牢獄から出て、さらつとやつついたら、また幽閉されるという状況になった。

もう自分でも何言ってるか訳わかんない。

まあ現状に不満はなく、強いて言うなら牢獄が殺風景すぎるから、もうちよつとどうにかしてほしいと、それくらいだ。

眠る、眠る、まるで冬眠する熊のごとく毎日を眠りで潰していく。基本的にツルギやアームを使う者に成長はあれど、老化は存在しない。食事をする必要だが、それも普通に比べると少ないほどだ。

自分は眠ろうとすればいくらでも眠ってられるし、暇潰しなら双子と王都のニュースを教えてもらいなんとかなる。

眠りから目覚めて最初にするのは双子に時間を聞くこと。

その理由は朝か夜なら双子に食事を食べさせてもらえるからである。実際、牢獄の暇な状況では食事、それにジェイル、チエーン、アリスちゃんとの会話以外には娯楽がないため。

(双子に食べさせてもらえるのは、アドの身体が、感じがらめで手を動かさないため)

「おはよう、ジェイルにチエーン…ちょっと質問なんだけど、もう朝なのかな？」

「おはよう、アド。まだ朝ではないわ」

こちらは姉のジェイル、牢獄の自分によくお菓子の差し入れをしてくれる看守だ。

「そうなんだ、いや〜こうやってジツとしてたら

いろいろ混乱しちやつて」

「おはよう、アド　今は夕方で朝じゃないよ

アドつて本当にぼんやりしてるね〜」

もう一方はチェーン、姉とそっくりな子なんだが、

いかんせん料理の腕が壊滅的で、彼女の差し入れは三途の川まで、ぶっ飛んでいるくらいレベルである。というか調理で人を超越した騎士の命を狙える女性を自分は彼女以外、知らない。

そんな牢獄の内部にコツンコツンと階段を歩く音が牢獄に響く。暗い牢獄に光る金髪、その持ち主を自分はよく知っている。それは、うちの国の王族の一人、アリストアチャ

んである。………なんとか彼女もボツチの気があつて、そこに親近感を覚えて、先輩として学園ではよく面倒を見ていた少女だ。

「アド、起きてる？………アリスタ、来たよ」

「ああ、アリスタちゃん。おはよう。今、起きたところなんだ」

アリスタちゃんは基本、静かで無口な子なのだが、

実は俺にとっても懐いているクーデレ系の美少女なのだ。

いやー本当に癒される。

「それよりアリスタ様。またここに来てリリースャ陛下に、しかられちゃいますよ」

「……大丈夫、そもそもアドがここにいることだって、不自然なことなんだから」

「アリスタちゃん、別に俺はこのままでいいんだよ」

そうこれは偽らざる俺の本音だ。

学園にいてもなんか周りの人は俺をおかしな目で見るし、婚約者にいたっては、最初は俺を騎士失格だとか、役立たずとか好き勝手言っつて、SSS級を倒した時にチラツと会ったが、すぐに目を逸らされたのだ。幽閉されているのなら、いつそ彼女との婚約もチャラになるかもしれない。そんなネガティブなことを考え、幽閉生活を満喫している。あとしばらくは、ここでのんびりしていたい。

「どうしても?こんな寂しい牢獄に閉じ込められて、

それでも我慢し続けるの?」

我慢しているのではなく、単純にこの生活を満喫しているのだ。

元々引きこもりというわけではないのだが、引きこもり生活に耐えられないというわけではない。学生生活ではろくな目にあわなかったのだから、のんびり幽閉生活を楽しんでいても、バチは当たらないだろう。

「アド、学園ではいつもあなたに助けられた、だから今度は私が助ける番」

「別に気にすることないのに、偶然だつて偶然。」

「ウソばかり……………あんなにタイミングよくいつも来るなんて……………ありえないよ……………アドは本当に優しいね」

そうは言っても、本当に偶然なのだが、まあいいか。

いちいち訂正すんのもメンドーだし。ボツチな自分が誰も来ないようなスポットに行くのと、毎度毎度アリスたちやんが、嫌がらせをされていたのだ。校内の人が来ない場所を網羅してる俺はたびたびアリスたちやんがいじめられている現場に鉢合わせ、成り行きで助けてると、アリスたちやんにすごい懐かれたというわけだ。

「アド、必ず私があなただけを助けるね」

だから待ってて、そしてまた一緒に学園に行こう」

「うーん、まあゆつくり待ってるよ」

別に学園に行きたい訳でもなし。

このまま幽閉されていてても文句はないのだが、
妹分にお願ひされては仕方ない。

しばらくしたらここを出たいと言ってみるか、

……………覚えてたら。

「アリスト様、そろそろ時間だよ」

そう妹分に会える時間は非常に短い、その短い会話は俺の癒しだ。

……アリストちゃんがここから出ていくと、俺はもう一度眠ることにした。

貴族生活では他の貴族の顔を覚えたり、マナーや他の国の言語の勉強で、

ろくに眠っていないなかったのだ、ここにいる間くらいはゆつくりと眠っていることにしよう。

……おやすみ……

こうして斬撃皇帝とその周りを取り巻く者たちの話はいったんおしまい。

はたして斬撃皇帝にどのような未来が待つのか。

それはまだ誰も知るよしもない。

人の噂は七十五日、では斬撃皇帝の噂は？

ブレイド、それは人類の怨敵、多くのかけがえないモノを奪っていった怪物、

どこから来てなぜ他の生物に危害を与えるのか、様々な議論、調査を続けてはいるが、現状では何もわかっていないに等しい。

ブレイドが出現し世界は恐怖と混乱の渦に落とされた。

人類はもうこのまま絶滅するのを、ただただ待っているしかないのか、

絶望の中で人類はブレイドに対抗するためのチカラ、

奪われた全てを取り戻し、ヤツラに逆襲するためのチカラ、

ツルギを手に入れた。

そのチカラは強大なモノで現存する兵器のことごとくが、

無価値、脆弱に思えるほどのチカラだった。

時は流れてツルギを持つ者は、騎士と呼ばれるようになった。

騎士にはいくつかの種類というものがある。

国に仕えて国々の争いで活躍する者、宗教に仕えて自分を神の使徒と自称して人を救

おうとする者、ギルド組織に入って手柄をたて貴族になろうとしたり、ブレイドによって奪われた地域にいつて、かつての人間の残した遺跡を発掘したりする者などと様々な者がいる。

ギルドそれは騎士の情報交換の場所だったのだが、いまや騎士のブレイド討伐依頼を斡旋する場所になっている。

ギルドは基本的に騎士を1〜3級に分けている。

それはブレイドに対してどれ程の対応ができるかで分けられ、年に一回、昇格試験が存在する。

3級が最も多い騎士、それから2級、1級と数が少なくなる。

ギルドは国にひとつは必ず存在する機関であつて、その全てが同じ組織なのだ。

ギルド内

「……………A A級のブレイド出現！手の空いている騎士のパーティーは、
いませんかー」

ギルドの制服を着ている女性が大きな声をだして、
騎士たちの集まっているギルドの酒場を駆け回る。
すると酒場のカウンターで時間を潰していた男の二人組が話をする。

「A A級ブレイドだって、おい俺達で行かねーか」

「ばっか、おまえB級、A級とは訳が違うんだぜ」

A級までは2級の騎士でも対処できるが、A A級からは1級の騎士でないと話にな
りやしねーんだよ」

「マジで！てか、なんでんなことを知っているんだよ」

「おまえ、学園に行ってた？」 「貴族様じゃねーんだ、んな金ねーよ」

「ああ、うちは両親が商人で金払えてたけど、

おまえんところは、そうじゃねーんだな」

「うるせーな、学園にいかなくても騎士は強ければいいんだ。

学園に行ってお勉強してるよりブレイドの糞野郎どもを、

ぶった斬ってたほうが、ましだろーが」

「学園では、国の対人を経験した騎士がいるし、

強いブレイドの映像がいくつかあって、

すげーのがいくつもそろってんだSS級のブレイドと騎士の戦いとか、

連合国の刃騎士団の戦いとかもな」

「……………おお、なんつーかすげーな それ。」

「だろ、アルマニアの学者連中がコツコツ集めたやつで、

見てるだけでも、勉強になるやつさ」

「すげー以外の言葉が見つかりやしねー……………」

……………なあ、それじゃあれはあんのか？」

「あれってなんだよ、主語いれろや」

少年はおそるおそる質問をする。

小さな声だが、それは酒場にまるで鐘のごとく響いた。

「……………斬撃皇帝のSSS級討伐」

「……………」 「……………」 「……………」

酒場の歴戦の騎士たちが声を失う。

「ばか！テメー何をいつてんだ！

斬撃皇帝なんてどっかの酔っぱらいの妄言だろーが」

「……………」

「ぐつ、でもよ　あの『最悪の災厄事件』はどういうことなんだよ」

「……………1級騎士の人間が大量にくたばった話だろ。」

でもそれはSSSS級と相討ちになったからで、

SSS級のブレイドを一撃で倒した騎士がいるなんてことあるわけねーよ。つじつまを合わせられるとすれば、SSS級と戦って最後に生き残ってた連中をまとめて斬撃皇帝って呼んだんじゃねーの？」

「そっか、だよなーSSS級がいるってだけでも信じらんないってのに」

それを一撃で始末できるヤツがいるなんてなあ、

もし、そんなヤツがいるなら、どこにいるってんだよ」

そうした会話をよそに酒場の隅にいた女性たちが席を立って、ギルドの職員に声をかける。

「A A級のブレイドの依頼、私たちが引き受けよう」

ブレイド討伐に立候補したには、

美しい女性、エメラルド色の瞳、青い髪をして、

そのスタイルは起伏がすくないが、

豹のようになめらかで力強さを感じさせる体つきだった。

彼女はアルマニアでの女性最強騎士。

エル・フォレスト・グリーン。

「ええ、ウィーンは、礼拝の準備はあるんだけど」

「仕方ないわ、騎士としての責務よ」

でも夕方の礼拝に間に合うようにしてくれる？」

続いて話をする少女たちは、黒髪と銀髪の女性、

黒髪の女性はウィーン・アルバ・ハウリング、

もう一方の銀髪の女性はマユ・ネット・スリング

彼女たちはギルドでも有名な女性パーティー、ホーン・オブ・ユニコーン。

彼女たちはギルドに所属しながらも、

剣神教の一派である女剣派（によけんは）の修道女なのだ。

なぜ彼女たちがギルドにいるのかというと、

それは彼女たちが女剣派の騎士であることに関係する。

剣神教はブレイドを倒し、他の宗教を自分たちと同じにしようとしている、女剣派もだいたい同じ教えなのだが、

彼女たちは、ツルギを使うのは女であるべきだとし、

男という凶暴な存在にツルギを使わせるには危険という考えをもっている。

女のメンバーが多く女性騎士が多く所属する。

しかし剣神教は、女剣派を認めず彼女たちを無視している、

女剣派は剣神教の教会を使うことを禁じられて、

町の外れの誰もいない屋敷で礼拝を行っている。

剣神教は騎士に1ヶ月にブレイドを倒すことを、推奨しているのだが、

彼女たちは無視されているがため、ブレイドがどこにいるのか、

何級のブレイドなのか情報を回してもらえない、ゆえにギルドに属することでブレイドを狩っているのだ。

「おおーすげえ美人さんたちだな、なあ声をかけてみねえ」

「おまえ、あの女たちは声をかけちゃいけねえんだよ」

「なんでだよ、べつに噛みついて来るわけでもないだろ」

「それより酷い目にあうんだよ、

あいつら男の騎士を嫌っていて目の敵にしてるんだ。

男の騎士に話かければ、ツルギを使うことをやめるとかいいやがる」

「そいつはひでえ、むちゃくちゃじゃねーかよ

ツルギを使うのをやめれば俺達は飯をどうすりゃいいんだ」

「なんでも生きてくには苦労しない程度に恵んでくださるそうで、

……………あいつら男を見下してやがる。

ユニコーンのエルに勝てる騎士なんて、剣神教の教祖様か、

「王族近衛騎士団の団長くらいだからな」

「あれ？女王様は？」 「女の騎士だからパス、でもあの人は騎士の性別問題に対策をとってるらしいけど」

「でもさ、ようするに俺達が強くなればいいんだろ」

「……………まあ簡単にいえばそうだな、強けりや面倒なことにならないし

なんでもできる、俺達が貴族なんてこともあるかも、

……………じゃあブレイドの討伐依頼、テキトーな見繕ってくるわ」

SIDEエル、マユ、ウイーン

とある森の中で疾風のごとく走る異形の怪物、

それを追いかけるのは勇ましき女戦士たち、

木から木へ跳びうつって、獲物（ブレイド）を冷徹なハンターのごとく追う。

「ねえ、誰が最後に仕留めるか、競争しない？」

「ウィーン、あなた不真面目じゃない？」

もつと緊張感を持って行動しないと死ぬわよ」

「マユの言う通り、ブレイドは人に仇なす怪物だ。

慈悲も容赦もいらん、迅速に仕留める。」

「了解!!」

彼女たちが追いかけているのはA A級のブレイド。

姿はまるで狼だが背中から頭にかけて、刺々しい突起物が存在する。

ブレイドは体の突起物を用いて、生物を殺すのだ。

食べる訳でもなく、怖いからというわけでもなく、

ただただそこにいるから殺す、これを怪物と言わず何と言う。

追いかけて、崖の方に追い込むそこには逃げ場など存在しない。

そこで覚悟を決めたのか、ブレイドはこちらを向く。

その時、マユが自身のツルギを振るう、するとブレイドが動きを止める。

常人いや騎士でも視認することが難しいほどに、

細い糸で縛っているのだ、これが彼女のツルギである。

形状は小型のナイフのような外見で、持ち手のところから糸を放出する。

その名も『アリアドネ』糸を蜘蛛のように張って相手を絞め殺せる代物で、

その糸はS級のブレイドを最大三日間拘束できる。

噂では、王宮にいる捕縛・拘束を専門とする騎士に、

肩を並べる使い手だと言われている。

「止まった！いまよ、さっさと仕留めなさい！」

その刹那を狙い済ましたかのように片手剣を持ったウィーンが、

ブレイドに剣を当てる、するとリイン、リインと、

まるで何かが歌を歌うかのような音が森に木霊する。

次の瞬間、ブレイドの腹が内側から爆発でもあったように、臓物をぶちまけて破裂したのだ。

「よっし！仕留めたー！ー！」

だがブレイドは臓器を失っても行動をやめない。

ウィーンの頭上にブレイドの最期の悪あがきである一撃がくる。

しかしウィーンは慌てもしない、まるで当たることはあり得ないというかのように、無防備なまま避けようとしめない。

彼女の頭が道に落ちて飛び散ったザク口のようになるまで、およそ二秒弱。

ヒュ、風が吹いた音といっても信じてしまうほど静かな音。

それだけで、ブレイドの上半身と下半身が分かたれていた。

「ふん、油断するなといった矢先にこれか？

それほどに私を怒らせたいのか？」

「うわっ、エル待つてよ、油断してたけどなんとかなつたし」

「愚か者が！その緩みが死を招くのだぞ！」

「はーい、ごめんなさい　　ウイーン、謝るよ。」

……………でもやっぱりエルのツルギはすごいね、

もうアルマニアで勝てるのって片手で数えられるでしょ」

エル・フォレスト・グリーンは一角獣の角を、

芸術的にこしらえたようなレイピアで、

一見すると今にも折れてしまう脆そうな印象だが、

その本質は大気を自在に操ることのできる風のツルギである。

風を支配する女性最強の騎士、それがエル・フォレスト・グリーンである。

「ああ、女王陛下のことね、……………あと近衛の騎士団長と、

剣神教の腹黒教祖ね」

「……………あと一人いることには、いる」

「へっ、エルに並ぶ人が？」

「他にどんな人がいるの？ウィーン、気になるな、教えて〜」

自分たちのリーダーが言うことに、
好奇心を刺激されて質問を投げかける。

「斬撃皇帝」

……………

「は？エル　それってただの噂では？」

「それは違うぞ、マユ　斬撃皇帝は確かにいる」

「いくらエルの言うことでも、さすがに信じらんないよ〜」

そういくらなんでもSSS級を一撃で葬った騎士がいるとは、自身の今まで培ってきた常識ではあり得ないのだ。

「嘘を言ってるように、聞こえるのも仕方ないが、

真実だ、ヤツは存在する。

ヤツにあったのは一回だけだが忘れるなんてできない。

見掛けは黒眼、黒髪の地味な男だったが、

そのツルギは覚えている、私はヤツを恐れているんだ。

ヤツがツルギを使った瞬間、大地や川、空さえ枯れていった。

それだけでも恐ろしかったのに、ヤツはニヤリと笑ったんだ。

私は悔しいんだ、ブレイドには私の師匠が殺されて、

師匠の敵をあんなバケモノに奪われて、何よりヤツを倒せない私を。

斬撃皇帝はSSS級を倒せる騎士だ、それはつまりSSS級を越えるバケモノという

ことを指している、ヤツはいずれ人類の害になる。

そんな予感がしてならないんだ」

エルの師匠、それは先代の女剣派の教祖にして、

女性騎士最強の名を欲しいままにした女騎士だった。

彼女はSSS級のブレイドの討伐作戦に参加していたのだが、

そこで彼女は行方不明となっているのだ。

そこで討伐作戦から生還したエルが次期教祖に太鼓判をおされて、

エルはアルマニア女性最強の騎士という称号を受け継いだのだ。

「……………エルは勝てる？」

「……………勝てなくとも負けはしないさ」

「さつさとギルドでブレイド討伐報告して、礼拝をしに行こー」

暗くなった雰囲気を払拭するように、ウィーンが声を張る。

するとエルとマユの二人はわずかに笑って王都へ帰っていった。

だがエルは考える、自分はあの時王族に捕まった斬撃皇帝を、

なぜ仕留めようとしなかったのか、やろうと思えば可能だったはずだ。

それなのにそれをしなかったということは、

いったいぜんたいどういうことだ、

もしかすると自分は斬撃皇帝に憧れを持ったというのか、

あの人類の敵になるかもしれない男の騎士に？

自問自答を繰り返したが、その答えはついに出なかった。

SIDEアド・エデム

曖昧な意識、それはまるで闇の中に叩き込まれたようだ。

だがそうした闇の中であるものが見える。

なんだろうと眼を凝らして見てみると、

こいつはこの間さくつと真つ二つにしたSSS級のブレイド。

それでこれは夢と確信する。だってこないだ、俺が倒したばっかだし、

俺は今、牢獄で美人双子にしっかり拘束されてるもん。

せつかくだ、この前のSSS級ブレイド討伐事件を思い出すことにしよう、最初にあつたことは、外が騒がしくなつてアリスタちゃんと、ジェイル、チエーンに何があつたか、質問したのだ。

彼女たちの話によるとでっかい人の怪物で、国が終わるうんぬん言われて、ちよつと空気を吸いたいから、

外出するついでに倒すつていつたら、

リリーシャちゃんとアリスタちゃんにジェイルとチエーンが、

泣きだして俺が行こうとするのを止めようとして、

なんとか二人とメイドさんたちに双子、近衛騎士団長と騎士団のみんなを撒いてひさびさのシャバの空気を楽しんだのだ。

巨人がいる場所に笑顔で行くと、

なんか騎士の人たちがみんなぶつ倒れていて、

斬撃皇帝を使って巨人を斬つたら、王族のみんなが来て、

誉められたりして、喜んでいたら双子ちゃんに捕まつてもう一回幽閉されました。

そりやそーだ、だつて脱走したようなもんだからね。

巨人退治より、そのあとの王族姉妹と双子ちゃんが泣いてしまつて、それを泣き止ませる方が百倍疲れたくらいだ。

うつ、思い出したら疲れてきた。

既に眠っているのに、この表現を使うのはおかしなことだが、ちよつと疲れが取れるまで、一眠りするとしよう。
では、おやすみなさい。

巨人へ女の子

学園に巻き起こる祭の予感、呑気な引きこもり

雲ひとつない澄みきった青い空、そんな空から日光が、

美しい街並みを照らしている。

ここはアルマニア国の首都、アルマニア。

総人口はおよそ三百万人という大きな都市で、商人の店やギルド会館に剣神教、大地母神教の教会などがある区画に、小さな学校や学生寮の密集した区画などがある、そして多種多様な種族が住んでいるゆえに、いろいろな文化交流のできる街。その繁栄は多くの国家に注目されており、特に技術方面での発達は目を見張るものがある。アルマニアは円形の都市であり、周りは国民の生活圏である外円部、その中央の中心部には貴族、王族の住むエリアが存在している。その近くにはアルマニア国立学園という騎士や、それをサポートする従者と呼ばれる者を育成する大陸でも類を見ない巨大な学校が威風堂々とそびえたっていた。

アルマニア国立学園、学問の盛んなアルマニア随一の学校。

多くは貴族の子供が騎士の才能に目覚め入学する学園。

他国の留学生も多く、最新鋭の技術を学びに来たりする。それは王族でも例外なく、

自国の王族や他国の王族がアルマニア国立学園の門を叩く。

学園内では他国の力を見せる代理戦争のような状態が頻発していて、ただの口論なら可愛いものだが、

時にはツルギを出した決闘騒ぎが起こり、

身分の高すぎる王族がそれに参戦すると、ことはややこしいことになる。

ケガをしても困るし、闘いを退いてくれとは、

相手のメンツのために言葉にできない。

しかも王族は大抵が強力なツルギを所有する事例が多い。

またサポート型のツルギを持つ王族の場合は、

より厄介なチームを作った決闘が行われる。

それに庶民学生を貴族の学生は馬鹿にすることが多い。

他国の学生ならそれはより顕著になる。

「あら、庶民のような汚らわしい者を学園に入れて、

この国の未来は大丈夫なのかしら」

なんてシラフでいえるような人間が集まっているのだ。

今回はその学園を見てみるとしよう。

「ブレイドの生体調査は依然として進展はなく、

ブレイドを倒せるツルギ使いはそのチカラを正しいことに」

キンコーン、カンコーン

「本日はここまで」教師である初老の男性が教室から出ると、

教室は緊張が抜ける、緊張が抜けるといっても隙を見せないように、

彼らはある意味国の代表であって隙、無様を見せるのは、

国益の悪化に直結する。

しかし古今東西、あらゆる場合に例外というには

いつ、どのような場所でも存在する。

「ふうー授業が終わったー」

「おい、貴族たるものもつと優雅にできないのか」

「んな堅いこと言いつこなしだぜ、エゼル」

「王族たるものがこんな調子でどうするシャキツとしろ！」

ここで口論しているには連合国の王族である

デクリトル・レギラ・レギオン第二王子である。

そこで口を酸っぱくたしなめるにはお付きの騎士の、

エゼル・ウォール・ゴヒユル。

なぜこのような態度が周りの者に文句を言われないのか？

それは至極単純で彼の実力が確かだからだ。

自国にいたころAA級のブレイドを単身で撃退したなどの逸話が、

まことしやかに語られるくらいで、その実力は折り紙つきだ。

ちなみにこの世界の王族は政治的な面でも重要だが、

誰より強いツルギを持ち戦力の面で重要視されるのだ。

「ちゃんとした所ならシヤキツともジャキツともするさ」

「はあ、こんな男が王族だとは嘆かわしい」

「なあ、もう今日は寮に帰って寝てもいいの？」

「おい、今日は決闘祭の打ち合わせがあるのを忘れたか」

「決闘祭？ああ、んなめんどろなのあるのあつたっけ」

「そうだ、思い出したならさっさと行くぞ、デル」

「あいよ、わかったから引つ張んなって」

この教室は連合国の民や貴族が集中しており、男女混合のクラスである。

そして平民だろうと国の代理戦争の参加者であって、

実力は種類があるにせよ、確かな者ばかりだ。

連合国は王族が他にも二人ほど在学していて、この学園でも自国のチカラを主張している。

一方、アルマニアのクラスでは学年別の決闘祭の対策を練るため、他のクラスと会議の場を作っていた。

アルマニアクラスの代表は、

国の大貴族にして学園でも屈指の実力者。

学園の第二年生、その名をミコト・ブレイズ・ヴォルカニア。
焔の大剣と呼ばれる女生徒だ。

「それでは決闘祭の対策で何かあるものは挙手してくれ」

「じゃあ、会議は終わりにしてみんなで眠るってのは？」

「ふざけているのか？」 「マジメなハナシさ」

「なお悪い！王族としての誇りはないのか！」

「おいおい、ひでーな」

こっちは王族の責務でブレイドを狩ってきたいわゆる先輩だぜ」

「グツッ」そうアルマニアの貴族騎士は基本的に国どうしの戦いに、

参戦することが多く強力なブレイドとの戦いを経験していないのだ。

ブレイドとの実戦を多く経験していること、

それは学園内では一種のステータスである。

「まあ、安心しろって俺も負けんのは、嫌だしさ」

「……………上級生にはあなたの兄上がいるのだ、

本気で闘うと確約できるのか？」

「ああ、兄さんは俺も気に入らんし

ぶっ倒せる機会は学園の決闘祭しかねーしな」

「……………わかった、この闘いではあなたを信じるとしよう」

「…でも作戦っていつでも特にねーさ」

俺もあんたらに合わせることもなんざできねーし

あんたらだつてそうだろう?」

「……………それもそうだな。」

「だろっ!　じゃあうちはもう帰るからっつと。」

「ん、仕方ない。それでも最低限協力してもらおうぞ」

「はいはい、ミコト殿

……………そういやあんたのあのずるっこい婚約者どうしたんだ」

「……………あいつは今、休学中で決闘祭には参加できない」

「ふーん、あいつ逃げたり引き分けんのだけはうまかったから、決闘祭では活躍できるかもって言うつもりだったんだけど」

「あいつは弱くない、ただ誰も理解していないのだ」

「はっ？」教室中がシンと凍ったように静かになる。

「どうしたんだよ、婚約者に一番文句を言ったのはあんだだったのにさ」

「……………私もあいつのことを知らなかったのさ

……………それ以上詮索しないでくれ」

「まあ、いっか、あんたらが仲良しだろうと
そうでなかりうと俺は関係ねーし」

微妙な雰囲気の中で本日の会合は終わりとなった。

しかし参加者の多くはミコト嬢の反応が気になっていたのであった。

ミコトは基本的に模範的なツルギ使い、騎士である。

だからか、ツルギで剣の形状でないアームを軽視することがあった。

そして自分の婚約者が剣の形状ではなく、

武器ですらない種子のようなツルギを発現してると、

知った時に彼女は彼を極端に馬鹿にするようになった。

しかもなまじ逃げたり、引き分けたりと駆け引きの才能があつたことで、

アド・エデムを嫌悪するようになってしまったのである。

そうした中で彼女の今日の態度は以前のそれと明確に異なっていた。

これには娯楽に飢えた貴族たちを盛り上げるには、効果靨面だったのだ。

しかし真相を知るのは彼女のメイド、

主の赤い目、髪とは正反対の青目、青い髪の少女。

クリア・ランス・アグアリアだけだった。

そして二人、ミコトとクリアが居るのは、

水のせせらぎが心地よい学園の中庭でめつたに人の来ない場所である。

これはアドがよく来ていた場所でもあった。

なぜアド・エデムが来る場所を彼女たちが知っているのかと言うと、訓練と称して彼とツルギを使った戦闘をしていて、

アド・エデムはそれから逃げたりして、

彼女たちはそれを追いかけることをしていたことがあったのだ。

つまり彼女たちは彼が逃げる場所をいくつか知っているとということだ。

(まあそれでも全てではないのだが)

「ここに来ると思いだすよ、アドが訓練を逃げて眠りこけていたのを」

「アド・エデムは逃げる、引き分けるのがうまかったですから」

「ああ、しかしアイツをただの軟弱者と見下していた過去の自分を、

今となつては戒めたいよ、アイツは腰抜け、臆病者ではなかった。

自分のツルギが相手を滅しかねないことを、

誰より理解していたんだ、……………もう一度アイツに会いたい。

アイツに今までの無礼を謝罪したい。

ただアイツともう一度、婚約者になりたいんだ。
ムシのいい話かもしれないがね」

いつも腑抜けたような雰囲気を持ち主で、

緊張感なんてものは母の腹に忘れてきたような男だった。

ぼんやりとして、とにかく周りに合わせない、そんな男。

そんなアイツが嫌いだったのは、

何よりも自分が嫌いだったからではないのか。

家の命じるままに婚約者をあてがわれ、

家の意向で学園に入学したという自分と、何もかも自分の意志や、思考で行動するア

イツに憧れて、嫌いになって、

そんなことをしてる間にアイツは封印凍結されてしまった。

アイツがいない学園は日が落ちたような感覚だった。

アイツはブレイドから私達を助けた、

しかしそのせいでヤツのツルギが危険だと、

剣神教、大地母神教が認定して、王族がヤツを封印するときも、

私はその流れに乗ってアイツの封印凍結に賛成をした。

そんな自分の愚かさを過ぎてしまった、いまではどうすることもできない。

「……お嬢さま……」 「ところでクリア、アリスタさまにお手紙を持っていつてくれたいかい？」

「はい、滞りなく万全です」

「そうか、ではアリスタさまにアドのことを頼んでみるとしよう。」

あの方はアドに助けられていた、おそらく、アリスタさまはアドの幽閉の事実を知らないだろう、王族だがアリスタさまは妾の子だ。アドの情報を何一つ知らされていない、アドに恩がある彼女ならアドの解放に尽力してくれる。

そうすればアドと私は婚約者に戻れるんだ」

「アリスタさままで大丈夫なのでしょうか？」

「心配は要らない、

妾の子といえど王族の一員。その一声は強力で、彼女が味方になれば、ことはすぐに済むだろう」

「……………しかし、王宮に何度もアド・エデムの解放とお嬢さまの婚約を嘆願書として出しているのに、なぜ返答書類がこないのでしょうか？」

「王族派閥の者はアドを貴族派閥に渡したくないんだろう、

アイツはそんな俗な者ではないというに、

父上もアドを『必ずや手に入れろ』と言つて、滑稽なハナシだ。

アドはそんなことしなくても私の味方だと言うのに」

「はい、アド・エデムはお嬢さまの好意を持ち続けておいでです。

お嬢さまのお命を助けたことからして、彼はお嬢さまを愛しているのでしょう。

そんな愛する二人を離すことが王族であろうと、

できるわけがありません」

ここでアド・エデムが彼女たちを助けたという話だが、

単純な話、助けられるから助けただけであつて、

特別な感情はそこに含まれていない。

その時に斬撃皇帝を使って幽閉されることになるのだが、

彼女が自分の幽閉に賛成したことを、彼はどうでもいいと思つている。

婚約者など元現代日本人の彼からすればおかしな話で、

自分にあまり好意を抱いていないことに、彼女が王宮に婚約破棄を要求していることを知つて彼女に、あまり関わる気が無くなつてゐるのだ。

(ちなみに貴族間の婚約者は親が決める場合と、王族が決める場合の二通りが存在する、前者は身分が低い貴族が、後者は身分が高い貴族に多い)

「ああ、だが封印凍結は貴族では手も足もでない。

もしかするとアドは王族派閥に私の手紙がきていないともしくは私が別の婚約者といふなどと根も葉もない嘘で騙されているかもしれない」

「……………お嬢さま、疑問に思つたのですが、なぜアド・エデムは牢獄から出ようとしなないのでですか？ 看守の双子が所有する鎖のアームは非常に強力ですが、アド・エデムの斬撃

皇帝ならば一蹴できるのでは？」

「当然だ、アド・エデムの斬撃皇帝ならば双子の鎖、程度の拘束など気にしないさ。あの永劫縛鎖の禁断牢獄ですらアドの障害にはならんだろう」

「では、何故に？」

「奴らは王家直轄の騎士だ。奴らの拘束から逃れることは国の反逆者になることなのだ。そうでもなければ、アドが獄卒ふぜいの拘束に大人しくしているわけがない」

ミコトたちは勘違いしているが、アド・エデムはそんなアクティブな人ではない。その本質は何でも受容するがゆえ、懐が広そうに見える引きこもり。結果として異端も、異常も、特殊も、特別も受け入れる大物に見えるのだ。そんな男が牢獄であろうと、美人のいる牢獄から脱獄するはずもない。それを知らない彼女らは勘違いをますます深めていくのだった。

「なるほど、つまり本日のアリスタさまを説得することが、

アド・エデムの解放への鍵になるのですね」

「ああ、そろそろ彼女の授業の終わる時間だ。

お茶を用意しておいてくれ」

「はい、お嬢さま」

コポコポ、小さな音を立てティーポットからカップに紅茶が注がれる。

その紅茶は香りからして高級な物とわかるほどの代物。

しかし紅茶をうまく淹れる技術も、そこにはあるとわかる者なら理解することができ
る。メイドの少女もなかなかハイレベルなようだ。

しばらくして、この誰も気づかなくなつた学園の中庭で一人の少女が現れた。

そう現れた少女こそこの国の第二王女のアリスタである。

しかし、その表情は普段の感情の乏しい彼女には珍しく、怒りという感情を見てとることが容易くできた。

ミコトは彼女がなぜ怒りに震えているかわからなかったが、とりあえず挨拶から会話に入ることにした。

「アリスタさま、ご足労願ひ実に申し訳ない」

「うつつとうしい挨拶などする気はない。

さっさと本題に入つて、でないと帰る」

「……………それはまた、お茶を頂くことくらい良いでしょう」

「いいから話、あとここはアドのお気に入りの場所、

なんで、あなたがこの場所を知っているの」

「私とアイツは婚約者です、これくらいのこととはわかりますので」

その言葉に反応するように、アリスタさまの眉が危険な角度になり始めた。

ミコトはアリスタにお茶をしながら会話中に、アド・エデムのことを切り出していくつもりだったが、アリスタさまが機嫌が悪いことからこれ以上無駄な話をすれば彼女が帰ると直感的に理解した。

「それでは本題を、本日アリスタさまをお呼びしたのは

騎士アド・エデムのことです。失礼ながらアリスタさまはSSS級ブレイド撃破後のアドのことをご存知ですか？」

そう彼女の予想ではアリスタ王女は妾の子であって、こういった重要な情報は知らないということが前提条件なのだ。

ミコトはそう思っていたしそれは学園の生徒全員がそう思っていた。

「ええ、知っている……………」 「知らないのも無理は……………って……………えー！」

だからか、彼女がこう言うのは予想外だった。

ミコトは彼女がアド・エデムのことを知らないということだ、

話を進めようとしていたが、その出鼻をくじかれた。

しかし、それで動揺しては貴族というのは務まらない。気を取り直して、話を進めようとする。

「……………そうですね、なら話を進めやすい。

話とは騎士アド・エデムの解放と私との婚約をアリスタさまから、リリーシャ陛下にお話し頂きたいのです。

お願いできますか？」

「……………」

アリスタは語らない、無言でしばらくミコトを見つめる。

その静寂はミコトに不安を見せた。

「アリスタさま、どうかなさいましたか？」

「どうかなさいましたか、じゃない。

あなたはそれを本気で言ってるの？」

「本気とは？彼が幽閉されているのなら、

助けたいというには、当然ではないですか？」

「当然？あなたは彼が幽閉されるときに幽閉に賛同した。

それなのに、今さら彼の解放？婚約？……………ふざけるな」

それを別に声を張り上げた訳ではない、

しかしその声には恐ろしい迫力が込められていた。

学園でも三指に入る実力者のミコトが口ごもる程に、

その言葉には憤怒と憎悪が刻まれていた。

「そもそも、あなたに力を貸す気なんてない。

学園の誰にも貸す気はない、教師も他の生徒も私を馬鹿にした。

でもアドだけは私を助けてくれた、

そんなアドを裏切ったあなたを許すつもりはない」

「っ！そうです、私はアイツを裏切った！」

「だけど今度こそアイツと寄り添いたいです。」

「アリスさま！お力添えをお願いします！」

「……………知ったことか」　アリスはそう呟き、踵を返す。

普段、寡黙で様々な世間話、流言に興味を示さないアリスさまが、人形姫が、ここまで声を荒げるとは。

この主従はそれを黙って見ることに出来なかった。

「……………大事な物は失ってからでないと気づかないのだな」

「だが、私とアド・エデムの何を理解しているつもりなんだ。」

「アリスさまは！」

メイドのクリアは主であるミコトを気づかうように声をかける。

しかし、それは貴族派閥から王宮派閥への反感を込めたモノだった。

「……………確かに、これは婚約者同士の問題であって、

王族といえど余計なお世話というモノ、

しかも妾の子の分際で上級貴族のお嬢さまに、

あのような言い方、不愉快です」

メイドの発言によって熱されていた頭が冷える。

冷えるるとこの会話を続けて、誰かに聞かれる不利益を考えて、

メイドを静かにたしなめる。

「……………クリア、私を思っただけの発言はありがたいが

そういった事は気づかれないようにしてくれ」

「あつ！申し訳ございません！

……………それでお願いします、アリスさまの協力を得られなかった以上、

アド・エデムの件はどうするのですか？」

「……………決闘祭……………あれに勝つことが出来れば、
王女陛下に謁見し、望みの褒美を求めることができる。
狙うならばそこしかない。」

勝つぞ、絶対に！……………クリア、君の力を貸してもらおう」

「承りました、お嬢さまの仰せのままに。」

今、ここで、この主従は決闘祭の必勝を決意された。

連合国のクラスとの連携をしないチームワークに、疑問ありだが、

第二学年の筆頭、ミコト・ブレイズ・ヴォルカニアは決闘祭に挑む。

その時、アリスタ・アルマニア・ブリエスタは

先程の会話に激怒していた。

アド・エデムを裏切ったミコトがいけしやあしやあと、

あつかましくも、王宮にアド・エデム解放、婚約を願い出ていることに怒りを感じていたのに、今日の発言でそれは頂点に達した。

自分を妾の子供として、情報がおりてこないと思っていたことに対してもそうだが、何よりアドのお気に入りの場所をあのお女が使うことに頭が沸騰した。

その感情に利益はない、むしろ怒りから冷静さを失って妙な言質を取られれば、王宮派閥、いや姉の脚を引っ張りかねない。

頭を冷やす、考えるのは決闘祭のこと、

決闘祭は学年別に別れて学園を戦場とする大規模戦闘訓練であり、

それに勝利した学年の代表は王宮から、

叶えるのが可能な（よつぼどな願いでなければ）願いは聞き届けてもらえるのだ。おそらく、いや必ずミコトはそこで要求してくる気だ。

この願いはアドのツルギのことを考慮すれば、

ハードルは高いが、叶えられないという訳でもない。

この願いを軽々しく却下すれば、王宮派閥の威厳、メンツに関わる。

となれば自分が勝利する他ない、アドの解放を要求したいところではあるが

アドはそれを望んでいない。自分なりに考えぬいた結果、アドはそれをすればアルマ

ニア国の派閥争いが激化すると予測しているのだろう。

彼の自己犠牲によって国は助かっているのだ。

そうなると彼を解放は出来ない、

出来ないが環境の改善くらいならできなくもない。

アルマニア最凶の騎士専用牢獄である永劫縛鎖の禁断牢獄、

そこからだして別のところにして移すだけでもアドの助けになることだ。

しかし、何はともあれ決闘祭に勝利しないことには、

取らぬ皮算用というやつだ、自分は王族という立場から第一学年筆頭選ばれた。

筆頭を倒せばその学年は敗退する当然、筆頭に立候補するのは、実力が確かな者、指

揮能力に長ける者、その役目を押し付けられた者などだ。

自分は三番目、第一学年はツルギを実戦で扱った者の少ない学年だ。経験値の少なさ

はぬぐいようのないハンデとなる。

自分のツルギはお世辞にも戦闘向けとはいえない。

だが、指揮に戦略面で言えばこのツルギ（能力）は多大な力を発揮する。

しかし、打てる手は全て打っておきたい。

自分は学園のとある部屋に向かう、着いたそこはがらくたの積もりに積もったごみ捨て場のような部屋、いや汚部屋？

「シス？いるの？」王族が入るには相応しからぬ部屋だが、アリスタは顔をしかめることなく部屋に突入する。

「あいなくそんな声はアリスタちゃんやな

いったいどないしたんくあてに用事でもあるん？」

「シス、あなた、また何も食べない、眠りもしてないの？」

「しゃーないやろ、ちよつと研究しててな。

メシやら、眠るやらしてる暇なんてなかったんよ」

この霧のようにとらえどころのないグレーの髪に、猫のような叡智の光を宿す金色の虹彩。

優しげな顔立ち、狸の耳という人間らしからぬ特徴。

そして白衣に学生服を着ている少女こそ、

アリスタの親友、第一学年一番の変人学者、獣人の国のお姫様。
その名前をシステム・テクノ・ロツジという。

「色々と言いたいこともあるけど、今日はお願いで来た」

言葉の端から感じたものから、

それが重要なものであると理解し、

システムは眠たげな顔を知性あふれる顔に表情を替える。

「ほーまたそれは？話からしてメンドーな要件なんやろ。」

よっしゃ、それ話してくれや」

アリスタはそれに珍しく驚きという感情をあらわにする。

「いいの？まだ内容すら言っ「言っていないのは問題やあらへん、むしろ頼らん方が問題や、あてはアリスタの親友や頼ってなんぼやろ」

獸人の国の姫であるシステムは、

表だつては差別をしないこの国に留学してきた。

しかし獸人の差別には根強いものがある、裏では獸人でありながらすさまじい結果を出す彼女を学園生徒は陰口を叩いてきた。

アルマニア以外の国から来た留学生にいたつては、

陰口を隠そうともしなかった。

アリストは王族でありながら、妾の子供として侮蔑を受けてきた。

システムは獸人の国の代表である姫で差別を受けた。

そして二人はアドによって助けられて、引き合わせられた。

二人はこうして親友となった。

アリストは親友の心遣いに感謝し本題に入る。

「今度の決闘祭に勝利したい」

「へえ、それはまた随分な難題やな」

「うん、うちの学年は戦闘経験が乏しい、何よりも一騎当千の実力者が少ない」

「戦力で今、実力者って、胸はって言えるんは他学年に二、三人や

三年にや、連合の王子さん、それに王宮勤めの牢獄番のジェイル、チエーンはんがあるさかい、あと二年はA A級ブレイド最年少討伐実績（レコード）を持つ連合の第二王子と炎熱系統最強の一族ヴォルカニアの姫さんが、んでうちら一年にはアリストアにうちと、回復系統の名家のお嬢様、キュアがおるだけや」

「戦闘能力者の実力が平均として低い」

「せや、先輩たちによ逆立ちしても現状勝てん。

ただ現状は、や。

確率が、のーなった訳でもなし」

「勝てる方法思いついたの？」

「ああ、とりあえずな。

でもそれには一年生全クラスの協力をもらわなあかん。
まあそれはなんとでもなるやろ。

ところでいっちゃん大切なこと聞いておらんかったな。

勝って名声がほしいんでもなく、まわりの連中見返したい訳もなし。
アリストア、あんた何で勝ちたいん？」

長い沈黙の果てにアリストアは真相を語る。

「……………アドのため」

「あんちゃんの!!……………アリストアがやる気だすんは、

それが理由か、なるほどわかったわ」

「うん、今まで言えなくてごめんなさい。

でもこの決闘祭は勝たないといけないの。

私たちが勝てなくても最低、二年を勝たせてはいけない」

「ああ、ミコトはんか。学園でも噂なつとるアドのあんちゃんを裏切ったくせして、凶々しく婚約者気取りつてな。あても気に入らんかったとこや」

「この戦いに負けはあつてはならない」

「あいな、あんちゃんのために勝つたろうやないの」

ここで少女たちは決闘祭に向けて作戦を練り始めた。

この少女たちはダークホースとなるのか？

それは神のみぞ知り得る真実である。

S i d e アド・エデム

「はい、アド………あ〜ん」

「あ〜ん」

時間がわからない、閉ざされた監獄の中で、

時間の感覚というやつが役に立たなくなってしまった。

だが夜の食事の時間ということから、

今の時間は夜だと予測する、時間を騙しても意味ないだろうし。

それよりこの状況を一瞬でも楽しめ。

「アド、美味しい？今日は私が作ったんだ」

「うん、ジェイルのゴハン美味しいね」

「お姉ちゃん、ずるい〜」

美少女の手ずからあ〜んを喜ばない男がないわけない、

違うとすればそいつは男じゃない。

「チェーンのゴハンも食べたいなく《その後には死にかけるけど》」

「ん、わかったよ　アドのために腕によりをかけて、

ゴハンを作つてあげるね」

チェーンにフォローをしたのだが、

それをきつかけに自分の逝去の瞬間に一直線。

料理の下手な人間が腕によりをかけてと言うのは、

死への片道切符に近い。

「……………ねえ、アド、チェーンのゴハン食べて大丈夫？」

「大丈夫、たぶんね？」

そんなわけでゴハンを食べさせてもらうという俺の癒しの時間は過ぎていったのだった、食事が終わると双子の二人に最近の面白いことはないか、疑問をすると二人は決闘祭のことを引き合いにだしてきた。

ああ、そういえばもうそんな時期なのか。

決闘祭それは王族のご褒美で生徒たちのやる気を出させる、

いわゆる学校内部で行う疑似戦争である。

そんな決闘祭で去年、一昨年俺は逃げ回ってただけなんだけど、周りは何だかすごいとか言っていた。

学園で他に感慨深いことといえば、後輩でアリスちゃんその他にシスちゃんという狸耳の獣人美少女、キュアちゃんという吸血美少女に大層懐いてもらったくらい。

うん、考え出したら久しぶりに会いたくなってしまうた。

……………そういうえばチェーンとジェルに遭遇した(出会った)のも、決闘祭だったっけ。

S i d e ジェイル&チェーン

私たちがアドに出会ったのは、決闘祭の二日目のことだ。

最初は逃げ回っていて、捕縛、拘束を得意とする家系の私たちだ、学生といえ一度捕

まったら逃げるなどできるはずないと思っていた。

しかし、捕まえたはずのアドは何事もなかったかのように、スルリと束縛から抜けた。

「うわつと、あぶない」

「……………おわー、ねえ、君、今どうやって拘束から逃げたの？」

「そうだよ、私たちのツルギから抜けるなんて」

単純に何か逃亡系統のツルギを持っているのかと思っていた。

しかし、彼はそんなことをしなかった。

「うくん、簡単な話でツルギの弱いところを、

なんとかナイフで広げてそこから抜けたんだよ」

「は？ ツルギを使ってない？」 「ただのナイフで？」

二人は知らないだろうが、この時のアドの斬撃皇帝は、種子形態のもので、武器に使うのは出来なかったのだ。

ツルギを使わないで技術だけで自分たちの拘束を破った、

そんな少年、普段からボーツとしてる彼に気づけば、

私たちはアド・エデムに惹かれていったんだ。

この優しすぎる少年が大罪を背負っている。

私たちは彼を自由にしてあげたい、

だが同時に彼を私たち二人で永久、永劫、永遠に

閉じ込め、縛っていたいという相反する感情を抱きながらも、

私たちは束縛を行う、それがいつか終わるものということに、

目を背けて、私たちはアドの両隣に寄り添う。

これにアド・エデムが気づけば、Nice Boat 《ヤンデレ》とでも言うだろうが、

そんなことを露も知らない彼は呑気に食事を食べさせてもらっていた。

斬撃皇帝アド・エデムは今日も外、周りの勘違いに気づかず、

幽閉され続ける、一方で周りは変わり続ける。

決闘祭とよばれる新たな舞台で騎士たちは踊る。
その果てに斬撃皇帝は何を見るのか。

決闘祭に向けて！

帝

動き出す（かもしれない）斬撃皇

深く深く生い茂る木々の中を走る走る、駆ける駆ける。

次の瞬間、二つの影が刹那でお互いの距離を詰めて衝突する。

「ハアアアア」「ヤアアアア」ガキン、キン、カン、

鋭い金属音が森に響き、剣がぶつかり火花をあげる、

しかして今、交えているのは剣であって剣ではない。

それはツルギと呼ばれる尋常ならざる規格外の武装、

ブレイドと呼ばれる怪物を相手にすることを目的とした兵器。

騎士と呼ばれる人類最強の存在が持つ最強の武器である。

「甘い！燃えされ！」刀の先から炎が放たれる。

だが相対する相手も規格外の騎士、それに対処する方法がある。

「まだです！」スカートの中から大きな瓶を出す少女。

その瓶に入っていたのはただの水。

その水が意思を持っているかのように動いて水の壁になる。

ジュウウ水が火とぶつかり、水が蒸発する。

一方の赤い瞳と髪を持つ少女は、今ので仕留められなかったことに、内心歯噛みして、刀で切りつける。

それは銀色の軌跡を描いてメイドの少女に翔ぶ。

メイドの少女もただ斬られる訳にはいかない、

薙刀の形をしたツルギで、手首の回転を使って刀を受け流す。

そう己の主の攻撃を真っ向から防御できるとは、

現時点では不可能に近い。刀の斬撃を回避して、

距離をとって森の中を駆け抜ける。

まるで何かを探すかのように、炎のような少女は、

それをやらせまいと追撃を行うが、

自分と彼女の機動力は同等であって、中々追い付くことができない。

お互いが相手の取る行動を熟知している故に、

攻めきることができないでいた。

（スカートの中の瓶はあと二、三個、そこらでしようか、

お嬢様の攻撃を確実に防ぐには瓶、一つ丸々使つてどうにかなるか）

森で主から逃げる、これは戦況をひっくり返すための作戦。

この広大な森の中から水の流れる川を見つけなければ、今の自分には勝機は存在しない。

（攻めきれない、だとしてもこのまま攻撃していけば、

水が無くなるはず、最悪のケースは水場で逆転されること

だとすれば早く終わらせないとな）

自分のツルギに炎を纏わせて炎を圧縮する。

攻撃力をあげて撃ちぬく、ここで仕留めよう。

背後から離れているにも関わらず、すさまじい熱を感じる。

おそらくお嬢様が勝負を決めようとしたんだろう。

ここまでかと足を止めようとしたとき、サワサワと冷たい風が、頬をなでる、川の水で風が冷やされているのだろう。

とうとう見つけた川、ここで決着をつけなければ。

川から膨大な水が動く、その水は盾のごとく、

水がメイドの少女の、周りをベールののように、幕のように浮かぶ。

他に水が一塊に滞空し、炎との決戦に備える。

赤の少女も覚悟を決め、圧縮させた炎を撃ちだす。

それはまるで太陽の欠片が飛んでくるような、

ただの水なら一瞬で消し飛ぶだろうが、

それにぶつかっていく水もただの、常識の水ではない。

それは物理法則を無視して世界に爪痕を刻んでいく。

炎が、水が激突する、正反対のツルギは拮抗する。

時間にして十秒弱、体感時間にして永遠とも言える拮抗。そして突如ズドーンと、爆音を出して森を崩壊させたのだった。煙が森の現状を隠す、そこで赤の少女は声をあげる。

「ゲホツ、クリア、無事か？」

「はい、大事ありません……………」

それにしても訓練でここまですることもなかったのでは？」

「決闘祭では上級学年と戦うんだから、

やり過ぎても、むしろ足りないくらいよ」

「そうでしたか、お嬢様、すいません。

私の想定が甘いようでした」

「うん、上級学年には授業でブレイドとの戦闘を経験してもものもいる、名前の上がついていない生徒でも中には強いものがまぎれている。」

決闘祭での油断は敗北に直結すると心しなさい」

「はい、ところでお嬢様、一年生はどうなさいますか」

「一年の場合は私やクリアが出るまでもないさ。

二年や三年生に最初に潰される。恒例で、洗礼というやつだ

何せ、私も悔しき、自身の無様、周りの無能さにうち震えだし、

決闘祭の目的の一つに一年の目標、質の底上げがあるのだから」

「了解しました、となると上級学年で倒さねばならないのは、

連合の第一王子カイル様ですね」

「ええ、といつても彼のツルギを攻略しないかぎり勝利はない、

となると必要になってくるのは付け焼き刃ではない、戦闘経験のみ。

これから決闘祭まで戦闘訓練、付き合ってもらおう」

「御意に、お嬢様。それと問題は勝利したあとですね。」

王族はアドの解放、お嬢様との婚約を認めるでしょうか？」

「認めるだろうさ、王族のメンツを守るために要求は通る。

姫殿下はアドを解放させないようになっているが、

王族派閥の他の人間が要求を通す、姫が無理に却下すれば、

王族派閥は総崩れ、アドは自然と解放される」

「なるほど、つまり障害となるのは決闘祭だけだと、

了解しました、決闘祭の勝利をお嬢様に！」

「ありがとう。クリア、心強いよ」

そう問題は決闘祭のみである、しかし今の自分には一つの疑問がある。

自分はアドのことを力が強いとわかったから婚約者に戻ろうとして、

いや、私はそんなことをする訳が、するなんて、

……………絶対になんかというのか、自分はそんな薄汚い願望でアイツに、

私はこのことを自分の意思で考えて決めたのか？

これは本当に自分の意思で決めたことなのか？

私はいままで自分で選択したことがない、選択を誤るのが恐ろしいから、間違えて周りが消えるのが、怖かったから？

アイツは自由というものを私に教えてくれた。

アイツが自分にはない自由をその背中で体現してくれたから、

私はその恩を返そうと、牢獄から解放して謝罪をしようと、そこでとある可能性がそびえ立つ、それはアドを解放して、

自分は自由を演じようとしているのではないのか。

ただアイツがいれば自由になった気がするから、

アイツを傍に置いて、自由ごっこに興じようとしているのか？

そう考えた瞬間、頭が真っ白になる。

今まで考えていたことが全て無くなるように「じよ……さま……お嬢様！」

「はっ！何だい、騒々しい」

「いえ、お嬢様がボーツとしていたようで、

どうかなさいましたか？お顔色が悪いですよ。

汗で体が冷えたんですか? 早く汗を拭かないと」

「ああ、いや心配してくれたのか、ありがとう。」

今日はこのあたりにしておこうか」

「はい、訓練のあとはしっかりと休息をとらねば、

訓練で得たモノが無駄になりかねません」

「うん、わかった。じゃあ戻るとするか」

先ほどまでの疑問点、自己矛盾を頭から外して、

学園の訓練施設をあとにする。

だが自分の中の葛藤を柵にあげるのは、いいことなのか?

例え辛くてもその問題にはいずれぶつかる。

どんな回り道をしようといずれは挑まねばならない。

忘れたふりで見ないふりをすることに意味があるのか?

決闘祭本番前、二年生筆頭は困惑の海をこぎ始めたのだった。

三年生校舎、訓練施設の一室では混戦が起きていた。たった一人の周りを取り囲むのは二十人弱の人相悪い男たちである。だが囲まれているにも関わらず、その男は不敵な笑みを崩さない。

「「テアアアアア」」 渾身の力で男たちが斬りかかる。

だが青年の余裕は崩せない。

その青年の名前はカイル・レギラ・レギオン王子、

連合国の第一王子にして次期王位継承者である青年。

そのツルギの形状は片刃のロングソードで、(刀のような反りはない) その能力は知覚能力の大幅な強化である、

それは他のツルギに比べれば破壊力の面では脆弱なものだろう。

しかしその能力は擬似的な未来予知を可能とする。

本人は未来予知ではなく、事象計算といった方が正しいと言っていた。

例えば手でリングゴを上投げるとしよう、

そのリングゴは手を動かさないかぎり手のひらに落ちてくる。

それは予測であつて確実な計算に基づいたものである。

前提条件に狂いがなにかぎり、この事象計算に死角はない。

全方位からくる斬撃の雨あられを紙一重といった所で回避する。いや回避するだけではなく、全員の首筋に刃のついてない方で、一撃を与えている、剣撃の雨が止んだときには全員が気絶する。

「ふう、この程度か」

まるで傘をさして雨の町中を散歩でもしたかのように、

威風堂々と自らの王のオーラを撒き散らしながら、そこに佇む。

汗、一滴流しておらず、余裕綽々といった風情でツルギの実体化をとく。

「この調子では決闘祭に使いモノになるヤツはおるまい」

カイルは連合の次期王位継承者であり、その実力は連合最強の騎士団、刃騎士団の第八席に現時点で拮抗した闘いができるほどだ。

男は自分以外の倒れ伏した実力者たちを横目で見ながら、

連合を直に束ねる王の才を持った青年は、

周囲を見下すがごとく睥睨（へいげい）する。

「まさか一撃も撃ち込める者がいないとは、

もしや俺の身分を気にして加減しているのなら、

不愉快だ、今すぐにやめろ。貴様ら立てえい！」

その怒りと失望をはらんだ大口上は部屋中に響き揺らした。

「カイル様、彼らの実力がその程度なのでしょう。」

「ご無理を言っではいけません」

「そうつすよー、てか、ローザちゃん、毒を吐くのやめたげてくださいよ」

「毒? 何が?」 「駄目だ、天然は何言っても通じやしねえ」

そこにいるのは二人の青年、いや男物の制服を着ているが、

髪の毛の長さに艶やかさ、胸元の膨らみ、声の高さから

よっぽど感の悪い者でないかぎり、女性だと理解するだろう。

「むっ、そうだったのか。」

しかし、こんな脆い者が、ブレイドとの闘いに役立つのか?」

「刃騎士団 (ウチ) と一緒にするのは可愛そうっす

せめてもうちよいハードル下げたげましょう」

「さすが、負け犬 (ルーザードック)

敗者の思考を熟知しているだけはあるわね」

「…お褒めに預かり光栄っすよー

勝っただけしか脳ミソのない筋肉馬鹿より、ましてでもんでしょ」

「貴様、粉微塵になりたいか？なら消え去れよ」

「待て！貴様ら人さまの迷惑を考えろ！」

この二人の少女、なりは男装した女性だが、

その実、王族の護衛を賜った刃騎士団の十、十一位のツルギ使い。

ローザ・グレート・ハイルに、ザヴェド・ベルトチカ・ハエルカイン
どちらも王族を守る実力者である。

余談だが、刃騎士団の階級（コード）は戦闘向きのツルギを、
持っていればいるほどに、高いものとなる。

二人は戦闘向きとはいえないが警護、防衛戦のスペシャリスト。

そんな鉄壁を体現したような二人が傍についているのだ、
カイルの悩みは彼女たちの仲の悪さ、険悪さ、だけである。

この二人は決闘祭に参加できない、参加しないのではなく、できない。
何故なら、この兩名は学生ではないため決闘祭の参加はできないのだ。

「今回の決闘祭での目的を忘れたのか？」

我々はそれのためにここにいるのだ」

「忘れてなどいませんとも」

「私達の目的は二つ、決闘祭での勝利によって斬撃皇帝を確保、

そして最年少で刃騎士団に入団し、勝手に消えた七位。

エゼル・ウォール・ゴヒュルを引きずってでも連れてくること」

「一時期は七位という高位に立ちながら、

第二王子なんて、阿呆に尻尾をふって喜んでるアイツを、

持って帰ればいいんですよね」

「七位はできればであって、本命は斬撃皇帝だ。

アルマニアの王族はあのようなツルギ使いを保有している、

過ぎた力は不幸を呼ぶ、だが我々なら話は別だ」

「つても、SSS級のブレイド討伐なんて眉唾もんですけどねー」

「期待しすぎない方がいいですよ、

SSS級を倒したのではなく最後に仕留めたなんて話が、

ねじまがつて伝わっただけかもしれないし、よくて八位くらいでは？」

「……………SSS級は我々も討伐した、だが多大な犠牲も出た。

この国の騎士は王宮付きの者の練度が低い。

ギルドの騎士のほうがブレイドとの闘いに慣れ、かつ理解している。

SSS級が弱っていたとしてもそれに止めをさせる者だ、

期待しすぎることはしないが、ある程度は役に立つだろう」

第三学年代表、カイルは学生のことなど目もくれず、

ただ王族の勤めと刃騎士団の任務にのみ集中する。

自分たちが勝利することしか、想定していないのは、

傲慢なのか、はたまた計算高さによるものなのか。

こうして研ぎ澄まされた戦意と技術を武器に決闘祭に挑む。

その果てにあるのは、単純明快、至極単純、自国の繁栄のみ。彼らはただ愚直、安直に王道を突き進む。

そこはいわゆる生徒通しの交流を深めるために学園が造った部屋、懇談室といったところだ。しかし、この学園は国の威信やメンツ争いの場。仲良しになろうなんて考える人間が少ないために忘れ去られていた部屋、そんな埃まみれの忘れられた部屋を掃除し、家具類の持ち込み、改造を行い、絶好のだらけ場所にした人物こそ、何を隠そうアド・エデムである。

そしてこの部屋に集まった少女たちは全員、アド・エデムと関係する者、過去にもアド・エデムの誘いでお茶会………というと、上品に聞こえるから言い換えるところでしょう、ひっそりと宴会を行なったメンバーたちである。

「いや、しかしこのメンツで集まったんは、久しぶりやなかるか」

「確かに久しい」 「うん、僕たちが集まるなんて懐かしいな」

「この場所が残つとるんも驚いたわ」

「……………アドが帰ってきてもいいように」

「アドには色々とお世話になったからね」

「キュアもあんちゃんに世話になったクチやからね」

自身を僕というのはキュアと呼ばれる少女で、

本名はキュア・クロス・シルバー。

銀髪に、血液のような赤の瞳、彼女は吸血種の魔人で、

他者を癒すツルギを持っている、そのせいであらゆる国の男性に、女性に、友人、恋人、様々なアプローチをされて、

人間不信になってしまっていたのだ。

「アドは私たちを助けてくれた」

「ああ、僕たちがここでお茶してるのもアドにいが居たからだ」

「まあ、あんちゃんは助けた気はないんやろがな」

「アドはいつも助けたっけなんてしらばっくれてた」

「あはは、謙虚って言っただけだよ」

「謙虚、遠慮されすぎたら、逆に気を使ううちゅーねん」

少女たちは、ここにいた、そして現在はいない男を話の種に盛り上げる。だが、アリスタが真面目な顔をした瞬間、二人は気を引き締めてアリスタを見つめる。

「じゃあ、作戦会議をたて始めよう」

「あいな、現時点では他のクラスに協力を申し込んだよ、

もう全クラスが合意してもらった」

「相変わらず、そういう裏工作が得意だね」

「まあ、この闘いはどないしても勝ちを狙っていききたいからな」

「では作戦の確認をしよう、今回の作戦に必要なのは、

私達と他クラスの協力があってこそ、

私のツルギの“遊戯盤の駒”（チエスボード）を使って

他のクラスの人を、いろんなところに配置する」

アリスタのツルギは特殊なもので、

その力は名前を知っていて、承諾したのなら、

十キロ圏内で自在に空間移動、配置をできるのだ。

「僕の治癒のツルギ、聖女の輝き（ラ・ピュセル）が、

怪我をした人を治していく」

「んでうちのツルギの千里眼で戦況を確認していく」

戦闘能力を持つ者の戦闘力の平均は低い、とても先輩たちには、勝ち目がない、しかし一年は特殊な一点特化の能力を持っているのだ。

「じゃあ、作戦は立て終わった。

首尾よくいけば勝利は確実、……………僕たちがうまくやれば」

「それはなるようにしかならんやろ、

それよりアリスト、勝利したときの褒美は頼んだで」

「褒美？僕は聞いてないんだけど？」

「ゴメン、表だつて言えないから」

「わかった、この件はキャラにする。

その代わり褒美の内容を、教えてくれないか？」

「それはアド・エデムのこと」

「アドにいの？でもそれは国に良い影響を与えないんだから。

アドには幽閉されているんじゃないの？」

「うん、牢から解放するのはアドの意思を無駄にってしまう」

「じゃあどうするって」「ちよいまち、最後まで聞いたれや」

「うん、私達が願うのは牢獄への面会許可。

アルマニア王族しか面会許可がでないけど、

決闘祭の褒美はある程度の願いは叶えられる。

シスにキュアの面会許可を手に入れるなら余裕、簡単」

「なるほどねえ」「おもしろいやんけ」

二人はやる気に満ちあふれて目を輝かせるアリストは他の学年から、勝利をかつさらうために勝負に挑む。

他の学年からノーマークの第一学年は、

力による勝利ではなく、智謀によって勝利を勝ち取ろうとする。

しかして心せよ、相手は自身より格上だらけ。

一回でもハマをやらかせば、それが命取りとなる。

さあ、決闘祭に大判狂わせを見せてやろう。

冷たい空気のコもった黒の世界。

何も知らない者が踏み込んだなら、

帰り道も行く道もわからずに永久に迷ってしまうだろう。

そこで先に、真つ直ぐ前に進み続ける。

行き止まりにたどり着くとは鎖に繋がれた男がいる、

そしてそこには顔だちのそっくりな二人の美少女が鎖を握る。

ここは、こここそが永劫縛鎖の禁断牢獄の最下層、

人によつては、マカハドマ、又は、ニブルヘイム、
様々な理由から多種多様な名称が存在する場所。

「ねえ、アド、聞いて、聞いて！」

もうすぐ決闘祭なの、私たちはここでアドといたほうが良いんだけど
なんか、皆、皆、すっごくやる気なんだよ」

「チェーンのいうとおり、ここでアドといたんだけど、
決闘祭の日はこれなの、ゴメンね」

「いや、というよりこんな何もないとこより、
決闘祭のほうが楽しいかも知れない」

「そんなことない!!」

「っ！そなの?」

「アドを縛っていたほうがいいの」「そうなの」

アドはそのうち彼女たちが鞭を持ってきたら、

彼女たちを全力で説得しようと、ここに誓いを立てた。

「ん?でも二人がいなかったら誰が封印してるの?」

誰か、別の人もくるの?」

「……………アド、つまらないよ、その冗談。

私たち以外の他の誰かがそんなことをする?

そんなのできないし、認めないし、許さないし、赦さない」

「そうだよ、もしそんなことする人がいたら、

……………絞め殺しちゃうよ……………ねえアドも私達以外になんて嫌だよ、嫌っていつてよそんなのできっこないやらせない認めない」

「うん、そう、はい、肯定、わかったから、

二人とも目のハイライトを戻して「—————」

何かわからないが、二人が怒りに震え始めた。

怒りはしばらくすると消えて、本当におさまってよかった、俺の癒し系、牢獄の清涼剤が遠くに行くかと思ひ、ひやひやしたのだ。

「私達がいなくても鎖に込められた力が消えるまで、

十八時間、余裕で帰ってこられるから、

良い子で待っててね」

「うん、じゃあ、今日は帰っちゃうけど寂しがらないでね」

双子は牢獄から外の王宮の外れに到着する。

二人は笑いながら、言葉を形にする。

「じゃあ、決闘祭はさっさと終わらせよう、チェーン」

「うん、ジェイル、でもアドと離れるのって寂しいね」

「まあ、さつき、あなたがアドに寂しがらないでって言ったのに」

「仕方ないよ、だってアドと少しとはいえ別れるなんて、

寂しいんだよ」

「うん、皆、皆、倒してしまおう。」

早くアドのところに戻るために始末しよう」

「フフ、殺しちゃダメだよ。そんなことしたら私達も捕まっちゃう」

「それはいやーね。……………あ！でもアドと一緒になら良いかもなあ」

フフフフフフフ、静かな夜に笑い声が響く、

それは愛する人に笑いかけるように、愛に狂ってしまったかのように、厳かな笑い声をあげ、そうして双子は夜の闇に紛れていった。

「私達がいなくても鎖に込められた力が消えるまで、十八時間。

余裕で帰ってこられるから、良い子で待っててね」

「うん、じゃあ、今日は帰っちゃうけど寂しがらないでね」

二人が牢獄から出るのを確認する。

今日の二人はいつにもまして、テンションが突き抜けていたが、決闘祭が近いから気分が上がりすぎているのだろう。

「二人が直接、鎖を握って縛るのと離れて縛るのでは、

強度に明確な違いが出るからな」

決闘祭、出るときは気分が重かったが外から見るのなら、

行ってみようかな、とやる気をだす。

自分はこんなに野次馬根性あったかと考えるがそんなのどうでもいい。

牢獄生活が暇すぎたのが悪いんだ。

だが、これは脱獄というやつだ、前回はSSS級討伐という言い訳ができたが、今回はそういつたものが何も無い。

懸念するものは他にもある。

脱獄後にリリースャ、アリストア、ジェル、チエーンに、

泣かれでもしたらどうしようかと、学園のことはどうでもいい。

学園で心残りがあるとすれば、後輩たちに会いたいということだ。

そんな後輩たちはすごく良い意味で個性的で、

ケモミミ、ドラキュラっ娘、なんか知らんけどすごい俺に懐いてくれた。

考えてたら会いたくなってしまった。

「じゃあ、いっちょ脱獄ってみますか」

引きこもりが変なやる気を出した時、

それは大抵ろくなことにならないって相場が決まっているものだ。

さて斬撃皇帝は決闘祭で、どんな影響を及ぼすのか。
波乱と愛と打算に満ちた決闘祭が始まろうとしていた。

決闘祭

学校行事の校長の話は、並大抵の長さじゃない

決闘祭、それはアルマニア国の騎士育成訓練を、

そつくり、そのまま学園行事とした戦闘訓練行事である。

と言つても、ただの訓練ではなく校舎全域を使った大規模なもので、

毎年、王族に他国の重鎮、学生の親族が見物する祭である。

それゆえ、決闘祭をギャンブルのネタにする不届きものが多く、

その警備に騎士を導入するほどで、ようするに国の一大イベントだ。

その開幕セレモニーも一段と凄まじいモノがある。

「諸君たち、騎士を目指さんと志す者に必要不可欠なモノとは、

よき学友と、よき好敵手であつて、そうした者と出会い、高めていける、本学の素晴らしさを胸にし自国の素晴らしさを他国の者に伝えることも重要であるからにして、学徒たる者は崇高な理念を持って日々を……」

この学校の支援補助をしてくれる人間は、ざっと二十といったところだ。

そんな人間は、ここで他国の重鎮に自分をアピールするのが恒例となっており、その結果として、とてつもなく長い話が展開されるのだ。

決闘祭を早く見たい者や、学生からすればたまったモノではない。

だが、こういった支援者の長話が終わりを迎えると真打ちが出るのが、この世の常といったモノであろう。

それこそアルマニア現女王リリーシャ・アルマニア・ブリエスタ、その人だ。女王が決闘祭を観戦するのは非常に珍しいことであり、アルマニア貴族も動揺を隠しきれないのを見てとれた。

そんな動揺を気にも止めずにリリーシャは開幕を告げる宣誓を行う。

「それでは、これより決闘祭の開幕を宣言いたします！」

割れんばかりの歓声と拍手が鳴り響く、

そんな中で学生たちは歓声、拍手もあげず、ただ眼を閉じて集中する。

彼らは女王の続く言葉を待っていたのだ。

女王もそれを理解して、決闘祭における報奨を言い放った。

「此度の決闘祭の勝利学年には、一学年全体の要望に、筆頭の要望を叶えることをここに宣言しましょう」

これはかつて、決闘祭で素晴らしい戦いを見せた学生に、

その時の王が褒美を与えたことを端に発する伝統だ。

学生たちはそれを求めて勝利を狙う。

蛇足だが、この国益に繋がる報奨を学園の食堂に使った強者がいた位で、ある程度の願いならば王族の威信にかけて叶えられる。

開幕の儀も終わりを迎えて、学生たちはそれぞれの校舎に向かった。それほど
の学年も共通の絶対原則である。

それぞれが気合いの入った面持ちの中で眼を奪うのは、

やはり三年生だろう、彼らからは歴戦の猛者のような威圧感を漂わしている。特に連
合王子のカイルは、凄まじいオーラを放って周りを戦慄させる。

次に続くのは第二学年の生徒たち、学生の大半は上級生の威圧感に吞まれているが筆

頭のミコトを主とした彼女のメイド、連合の第二王子デクリトル、彼のお側つきのエゼルたちは上級生に負けず劣らずの実力派だ。

最後に一年生だが、全体的に脆弱な雰囲気を漂わせる。これから時間をかければそれなりに頭角を見せそうな者もない訳ではない。しかしこれから先輩たちと戦い勝利することができると言われれば、それは不可能と言わざるを得ない。それにも関わらず彼らの眼には光があつた。勝利の可能性をもぎ取ろうと、諦めまいとする者の眼に関心が向いている。

ドゥーン、開戦を告げる銅鑼の音色が学園内に轟いた。

ここで、決闘祭の詳しいルール説明をしよう。

決闘祭、そのフィールドは半径五キロの学園内部で行われる遭遇戦。

決闘祭では集団戦闘をしても良いが、一騎打ちにお互いが了承したならば、周りの者は手を出してはならない。出した場合は横槍を入れた者に入れさせた者を退場として、その相手は一騎打ちに勝利する。

この決闘祭は学生のみ参加を許すものとして、それ以外の参加者を認めない。戦闘は原則どこでも行っていいがトイレ、学長室などの一区画は戦闘禁止エリアとする。相手

を死に至らしめる攻撃は禁止とする。もし事故でそのようなことが起きれば加害者の学年は即刻敗退とする。決闘祭で外部から持ち込めるモノは危険物でないことを確認次第持ち込みを許可する。

ツルギを用いて学園に甚大な被害を出した者は、自費でそれを修繕するものとする。校舎内には現役騎士がいるが決闘祭には関わらないため安心されたし。学園外部に出てしまった者はいかなる事情であろうと失格とする。勝利条件は他の学年の生徒を全て倒した学年を勝者とする。

まあ、これがおおまかな決闘祭のルールである。

では決闘祭の開幕はここに成った、各々の持つ願いのために戦争を始めよう。いかなる結末が待っているようと、もはや決闘祭が止まることはない。

二年生校舎、そこでは三年生の戦力偵察をする先発隊にデクリトルが立候補しているところだった。

「へいへい、俺もさっさと戦いたいんだ。行かせてくれよ、ミコト嬢」

「あなたが出るには、まだ早い。先発隊が行くのは確定だが、実力者を行かせるのは、時期尚早で認められない」

「デルはここに置いていても、使い物になりませんよ。」

「戦略なんか頭に入っていませんから、それより適当に暴れさせた方が、よほど、こいつに向いてると思いますね」

「エゼルさん、提案をありがとうございます。」

お嬢様、確かに彼に戦力以外のことを任せるのは危険です。

先発隊に組み込んではいかがですか？」

自らの侍女の話から、その話にも一理ありと納得する。

だが、序盤戦でいきなり主力級をうろつかせて良いものかと考える。そこで先発隊を三年生校舎に行かせるのではなく、別の事をさせる。

「先発隊は三年校舎に直行するのではなく、その途中で陣取ってもらおう。参加者はデクリトル殿に、クリア、あと五人くらいでいってもらおう」

「ちよつとお待ちを、俺はアルと一緒にでは？」

「いや、エゼルには別のことをやってもらう。

では先発隊に加わる人員が決まったら作戦開始だ」

「おい、陣取るって言われても何処で陣取るんだよ」

「それは、僭越ながらお嬢様。私もお聞きしたいのですが」

「ああ、先発隊が陣取るのは三年校舎から本館に繋がっている吊り橋だ。そこで君たちは陣取ってもらう」

「吊り橋？あの下に川が流れてるってだけのところじゃ……ってああ、なるほどね。だからクリアちゃんを出すってわけ」

「……………はい、お嬢様。その任、このクリア、確かに承りました」

「ミコト嬢？それで私は何をすればいいのですか？」

「……………一年校舎に行ってもらいたい。」

三年生と戦う上で、一年は不確定要素だ。早めに潰しておいた方がいい」

「それはまた、了解。それが終わったら先発の方に合流すれば？」

「ああ、合流後は三年校舎に突入してくれ。」

私は屋上に行つて天文台にいつてくる」

「はあ？天文台？まさか昼間からお星様を見たいつて訳じゃねーだろーな。ミコト嬢、指揮官が前線にいねーつて、どういふ見だ」

「安心しろ、前線にいただけが指揮官のすることではない。」

「確実に勝利するための最善の策だ」

不安は在るが、文句を言っても始まらない。

先発隊の人数は規定に達して、彼らは吊り橋上で三年生を待ち受けている。エゼルが率いる別動隊は一年校舎に向かつていった。一方、指揮官のミコトは二年校舎屋上の天文台から戦場となった学舎を俯瞰する。こうして二年生、総員、戦闘準備完了。

「ふふふ、一年に三年生はどうくるか？しかし、ここからならば学園内はほぼ、射程距離だ。……………さて、勝利へ歩みだすでしょう」

ミコトは屋上から笑みを浮かべ、ツルギを実体化させた。

ツルギにエネルギーを込めて、自身の赤い眼を閉じる。

そのツルギは黄昏を内包するかのように、輝いていた。

決闘祭での、本命である三年生のいる校舎では、

王子のカイルと連合貴族たちが作戦会議をしていた。

といっても一年と二年をどちらから倒すという上から目線のものだ。

「カイルさま、是非とも私に一番槍をお任せください！」

「いいえ、その任は私に！」 「この私を！」

このように手柄目当ての貴族に囲まれて身動きが取れなかった。彼としては自分が打って出て勝負を終わらせたかったが、やる気に満ちた貴族たちを止められはしないだろう。

「わかった、では最初に一年を撃破。

そして二年を倒す。アルマニアの方々もそれでいいか？」

同じ教室のアルマニアの生徒が、こちらを眺めている。

だがアルマニアには貴族だけではなく、平民の生徒もいる。

アルマニアの平民生徒は自国にいる貴族に表だって差別をしない、だが他国の生徒にはそれが適用されない。

それ故に平民生徒と貴族生徒は仲が悪い、犬猿の仲である。

「うん、じゃあ、こつちも好きにさせてもらおうね」

「うん、早く終わらせたいもんね」

そこで返事をしたのは、アルマニア国の牢獄番。

ジェイル・ロック・シルドヴァ、チエーン・ロック・シルドヴァ。

ツルギではなく鎖のアームを使い、対象の拘束を得手とする。

その実力はカイルに並ぶものがある。

「ほう、しかし貴女たちだけで良いのですか？

なんなら私が同行する所存ですが？」

「だいじょーぶ」

気軽な一言を言って双子は数人の生徒を連れて二年校舎へ。

その不遜な態度は実力者特有のモノ、不安を感じさせない。

風のように出ていった双子に、
連合の貴族は呆然として、カイルは呆れたようにポツリと眩く。

「全く、中々につれないな。」

あれほどの実力なら我が国に欲しいほどだが」

双子の鎖は非常に強力で、捕まえた者を必ず行動不能にする。それはカイルも例外ではない、まさしく絶対封印、縛鎖の理。その絶対の理を独力で破ったのは、後にも先にも一人のみ。

カイルはこの双子を非常に高く買っている。

何度か連合に来る旨を伝えたが、否の返答しか返ってこなかった。

「……王族であるカイル様に、あのような無礼な態度！

たかが看守の一族が何様気取りなんですか！」

「その通り！それに平民を学友とするなど正気の沙汰ではない！」

周りは双子に対し様々な悪態を吐くが、

それは恐怖と羨望の裏返しだ。

その美しさは三年では並ぶ者なく、鎖のアームは絶対封印の理。

自分たちでは、美、力で敵わないゆえ悪態を吐き気をまぎらわせている。

カイルはそんな周りにグツタリしながらも、

己の任務を果たすために決闘祭に臨む。

アルマニア勢は二年校舎に、連合の先行は一年校舎へ。

その強さゆえ王道の三年、出陣。

戦いにおいて勝つということは、力が強ければいいというだけではない。その戦場に合わせた勝利条件を満たし、尚且つ自陣の損耗を少なくする。これぞ勝負における勝利の絶対条件だ。

とある一室にて三人の少女たちが射ぬくような眼光で作戦を立てていた。狸耳の獣系美少女は眼を閉じて何かを見つめている。

それに問いかけをするアリスタ。

「二年、三年はこっちに來てる？」

「ああ、あんじょう、大勢連れて向かつとる」

口元の牙が眼を惹く銀髪の美少女キュアが提案を行う。

「じゃあ、ここは一つ。奇襲でもしてみるかいい？」

「ダメ、慎重に手を打っていかないと、

どんな失策が影響を与えるか、綱渡りの状態なんだから」

「むっ？では、なんで校舎に数名を残していったんだい？」

「キュア、まず、あてらが校舎内に全くなかったら、

先輩方はえらい警戒するはずや。

そないことになったらこつちの策に嵌めずらくなつてまう」

「だから何人か置いてきた。あと置いてきた人達は志願者のみ」

「はあ、それはまた、どんな話術で引っかけたのやら」

「人聞きがわるいなあ、別段騙した訳やあらへんのやし。」

かまへんやろ、あんちゃんも時には手段を選ばなって言ッてし」

「アドは良いことを言う」

「……………アドにい、この二人にそんなことを言ッちや、ダメだよ」

自分の親友の性根の曲がりっぷりに、

どつと疲れたように感じるキユア。

「ん？でも、今回はよく全クラスと交渉を交わせたね。

どんな手を使ったんだい？」

そう、この作戦の要となる他クラスとの協力の締結。

決闘祭本番には協力を取り付けてあつたのだ。

それも平民、貴族、獣人、連合人、他国のクラスと、水と油を混ぜ合わせるレベルの快挙であり、おそらく、もう見ることはできないであろう、奇跡が起きて完成された協力関係。

「まあ、単純な話。餌で釣ったつてのが真相や」

「エサ？それっていったい？」

「平民、商人の学生には学費の減額を」

そう平民、商人の子供で才能がある者には援助資金が出されるが、それでも足りなくなるほど学費が高いのだ。

特に才能のある学生は貴族や騎士団の進路があるが、実力のない生徒はギルドで戦闘していくことになる。

ギルドは騎士団にはない、ブレイドとの実戦が望めるが、

普通の神経をしているなら安定し、安全な騎士団、貴族を目指す。

ギルドにいるのは実力のない者、ブレイドとの戦いを求める者、

騎士団、貴族の生活が合わなかった者ばかりだ。

「なるほど、でも連合、アルマニア、他国の貴族は？」

「平民が決闘祭で活躍したら、貴族の面目は丸つぶれや、だから自然とやる気を出さな。あかんって寸法」

「これで貴族は終了。獣人のほうはシスが説得してくれた」

「ん？じゃあ、魔人たちは？僕は何もしてないけど？」

「それは、まあ、キュアのことを出したらすんなり言ったんよ」

「へっ？僕のこと？それってどんなことを言ったんだい？」

「……二年、三年が校舎に襲来。話をしてる場合じゃない」

「おっと、せやな。じゃあ、いっちょやっつたろうやないの」

「ちよつと！二人とも今の話はこういうことなのさ！」

「まあまあ、それよりここからが決闘祭や気張らな、あかんで」

「了解、キュアも早く準備して」

「え、ちよ、ちよつとー」。何を話したのさー!!」

さて、ここで蛇足だが魔人の生徒たちに言ったのは、

上級生がキュアを口説いたと話して協力を取り付けたのだ。

彼女がこの話を知るのは決闘祭後であつて、

今、現在、彼女は何も知らない。

では一年生は準備万端、気力十分。

三人の少女たちは策謀を巡らせて、舞台裏から戦闘に参戦する。

彼らは格上を相手にして、その喉元に牙を立てようとしていた。

牢獄の奥深くで、鎖にがんじがらめにされた青年。
その青年は今、身体を捻らせて鎖から脱しようとしていた。

「ぬぎぎぎぎ、ふんぬぬぬ、……だあ！」

だが、その鎖はびくともしない。

それは樹齢数千年の大樹のごとく、常に存在する大地のごとく、
不変、不動、強固、頑健といった堅さを感じさせる。

「はあ、前は少しの隙間があったんだけど。

これは手間取りそうだな」

彼は誰にも聞かれることのない独白を、一人ごちて、

再度、鎖を抜けるように身体を揺さぶる。

それでも依然として鎖に変化はないように見えるが、自分が動いたことよって多少の隙間が生じる。

常人ならば、この隙間であろうと脱することは叶わないだろう。

しかし、アドは役に立たない種子形態の斬撃皇帝を持っていた故に、技術、小細工は常人を遥かに越えることに成功した。いわば技術の一点特化型。一点特化らしく己に適していたスキルでこの束縛から脱してみせよう。

この調子なら何時間かはわからないが、このままいけば脱出は可能だ。

問題なのは、たった一つ。決闘祭終了までに遂行できるか、できないのかが、鍵を握っている。

元来、脱獄というのはこつこつと、日頃の中で看守や同じ囚人に見つからないように手早くできるかが、肝である。

アドは脱獄当日に決行しているのだ。

手間取るのも無理はない、それに、これはジェイルとチェーンのアーム(能力)だ。破壊や鎖から抜けた瞬間に彼女たちには感づかれるだろう。だが王宮と学園は非常に距離が近いので直行できる。

あとは王宮内の騎士やメイドに、バレなければ良い。

さて、決闘祭に行く主な理由は後輩たちだ。まあ暇ということもあるが。

後輩の件はアリスタに伝言すればいいのではと思うだろうが、牢獄の収監者の情報は、どんなことがあっても外に伝えられない。

それゆえに後輩には心配をかけているかも知れないのだ。

あと、付け加えるなら萌え要素である、なんと関西弁で狸耳の可愛い獣人っ娘と、僕っ娘の吸血鬼っ娘がいるのだ、何としても拘束を抜けねば！

ふふふふ、待っててねー、可愛いっ子ちゃーん。

舞台上では火花が飛び散り、舞台裏では阿呆が笑う。

それでは、この舞台を御覧あれ。

筋書きは理解不能にして、予測不能。

それでは役者も揃い踏み、それぞれが野心、想いを抱いて踊り出す。

それでは、観客の皆様。この舞台を思う存分にお楽しみあれ。

だが、忘れてはならない。

どれほどの戦い、想いがあるかと、

この物語の根幹を担うには、引きこもりの墮落しきった喜劇なのだ。

舞台裏と決闘祭序盤

決闘祭は学生たちを主役とした行事でこそあれ、

その舞台裏では各国の貴族や騎士団、王族が学園を眺めていた。

どうやって学園を眺めているのかというと決闘祭の舞台となつている学園内には、学生たちの戦闘が危険と判断した時に強制的に戦闘を中断させるために、選りすぐりの騎士が学園で待機している。

その騎士らは剣結晶と呼ばれる特殊な結晶体を持っている、剣結晶とはブレイドを撃破した際に入手できる物質で、剣結晶は鍛冶場や厨房、船に飛行船などを動かすための燃料として活用されている。さらには遠くに映像を受信することもできて現代社会の基盤となつている物質だ。余談だが、剣結晶はブレイドをツルギ、アームで倒した時に出現するが、もしツルギやアームが剣結晶と接触した場合、剣結晶は融解して武装の内部に溶け込みツルギ、アームを強化すると言われている。

しかしリスクは存在して、騎士がその強化に耐えきれなかった場合、騎士は必ず絶命すると言われている。強化に成功して生き残った人間は人類史を紐解いても6、7人く

らしいか存在しない。ちなみに弱いブレイド、A級以下のブレイドからは剣結晶が出ることはないため非常に高価なモノとして高値で取引が行われている。学生行事にも惜しげもなく剣結晶を使えるのも、アルマニアが強国である証拠に他ならない。

重鎮、貴族、商人、王族に割り振られた部屋の中央には、大きな剣結晶のモニターが置かれていた。モニターでは学生たちが戦闘を行っている場面が所々に見えていて、観客たちは画面に張り付いてでもいるかのようになり、凝視している。例えるならばワールドカップのサッカー試合でも見ているような光景とも言えるだろうか。これは各国の威信を賭けた代理戦争でもあり、ここで活躍した者は後に外交上のカードにすらなり得るのだ。

そしてこのアルマニア国の王族用の部屋では王女と一人の侍女が決闘祭を真剣に見据えていた。かつては彼女たちも、学園の生徒であり決闘祭では多大な活躍をしていたモノだ。一人は煌めく黄金色の髪、蒼く清みきった空のような瞳、体は起伏に富んだ流線型で、その胸は男女・性別を問わず目を惹くだろう。まあいうなれば絶世の美女と呼んでも差し支えない。だが同時に童女のような清らかさを感じさせている。彼女こそがアルマニア現女王リリーシャ・アルマニア・ブリエスタである。

リリーシャはアルマニア国立学園を首席で合格した才媛だ。

その一步隣にいるのは次席卒業を果たし、王宮で王女付きの侍女兼護衛騎士として活躍する少女、メイド喫茶のなんちゃってメイド服などではなく正統派のロングスカート
のメイド服に森林の大樹の緑のような色の髪、エメラルドの輝きを持つ瞳の彼女の名は
マキナ・ジーン・デウスエクス。

そんな彼女らは今、決闘祭の舞台となっている学園の映像を見ていた。
彼女たちはある理由から一年生に勝利してもらわなくてはならない。

「どうかしら、マキナ？一年生たちに勝ち目はあると思う？」

「客観的に言わせてもらえば、不可能に等しいでしょう」

「まあ、そうよね。三年、二年生には戦闘専門の騎士ばかり、

比べて一年は特殊な能力のツルギ、アームはいるけど、

経験不足だから戦闘能力は全体的に低い」

「付け加えるなら三年には連合の王子カイル殿に、

ジエイル、チェーンの二人がいますし、

二年はミコト嬢を筆頭に粒ぞろいといった様子です」

「決闘祭の報奨は王家の威信と同じ、

だが、二年、三年生が勝つてしまえば、

十中八九アド・エデムの身柄を要求されてしまう」

「だから、一年生に勝ってもらわねばいけないのですが、

真つ向からの戦闘では勝ち目が欠片もございません。

アリストア様を疑う訳ではありませんが、勝利できるのでしょうか？」

「マキナのいう通り真つ向からじゃ勝ち目はないけど、

アリストアの策略がうまく嵌まれば勝ちに手が届くかも」

「……………結局、私たちは勝利を祈るしかないのですね」

「ええ、アリストアを信じるしか、今は……………」

国を思う少女たちはただ、モニターの向こうの戦闘を観る。

アルマニアの王宮派閥にとってはアド・エデムは、

ジョーカーのような立ち位置で重要なフアクターである。

そんな彼が連合、もしくは貴族派閥に奪われれば、

現時点の国力のバランスが崩れ、冗談抜きで国が傾きかねない。

もしも、アド・エデムが奪われてしまえば、

彼が幽閉されることを懇願した意味が年月が無駄になってしまう。

彼は強すぎる力の持ち主、己を犠牲にすることによって、

国の明日を、未来を、希望を繋げたのだ。

彼の想いに応えるためにも、国のためにもアドは渡せない。

そんなことを考えていると、彼に最後に会話した時を思い出す。

彼が自ら幽閉を願い出たあの時のことを、

――回想――

SSS級のブレイドの討伐を終えて国が安寧を取り戻した頃、

城下町では連日お祭り騒ぎになっていた時、

王宮の王族用のテラスで休憩をしていた私の元にアドはやってきた。

「やあ、リリーシャ先輩、マキナ先輩。久しぶりです」

「リリーシャ様、英雄さんの登場です」

「あ、アド。……あなた、連絡してから来なさいっていったでしょ。

いくら英雄さんだからって私は一国の王女なのよ。

その辺りはしっかりしてもらわないと」

「ああ、ごめんなさい。そこまで考えてなかった」

「アド・エテム、いきなり現れるとは無礼な、

あなたも貴族ならば、王宮における最低限のマナーを覚えなさい。

まったく、あなたが救国の英雄とは、

世も末といったところかしら。

それとリリーシャ様は王族であることを肝に命じなさい。

下手をすれば無礼討ちすらありえますよ」

「はあ、それでどうしたの？ここまで来たんだから、

急ぎの用事ってわけなんでしょう。いったいどうしたの？」

すると彼は沈痛そうに、痛ましげにこちらを見ていた。

まるで死の宣告をされた病人の如く、悲しげに口を開いた。

「誰にも会わずに、隔離された場所はないかな？」

「……………どういこと？」

「そのままの意味だよ。

俺がしばらく静かに籠っていられる場所はない？」

彼が何故にそんなことを言ったのかと頭が真っ白になる。

時間にしておよそ1〜2秒、

その僅かな時間で彼が言ったことの意味を理解する。

「アド、それでいいの？あなたは英雄になったのよ。

もう監獄に囚われることなく、自由に外を歩くこともできるのに、それに学園の後輩も同級生も先輩も先生も見返せる、英雄として生きられるのに、本当にいいの？」

「うん、迷わない。だって、もうとっくに決めたから」

アドの眼は私を真っ直ぐに貫いた。

覚悟を決めた男の瞳に私は僅かな怒りを覚えた。

アドは誰にも相談せず勝手に決めたのだろう。

たったそれだけのことに腹の底から怒りが込み上げてきた。

しかし、アドの提案は正鵠を射ている。

SSS級を撃滅した騎士など国に様々な混乱を起こしかねないのだ、彼のアイデア以上に良い案が思い付かない自分が情けない。

女としての私はこの提案に納得がいかない。

だが、王女としての私はこの提案を呑めと心で叫ぶ。
悩んだ時間は数秒、私はアドを再度幽閉することを決定した。

「わかった、以後のことは追って連絡するわ。」

「ご家族のことも心配しないで王家で責任を持って保護するわ」

「え？……………あ、ありがとう。リリース先輩」

「……………ちよつと、アド、何よ。」

その反応はあなたの家族のことを何もフォローしないほど、
私が冷酷非道に見えていたの？」

予想外とでもいった反応の彼をからかう。

すると彼の顔が申し訳なさそうになる、

その顔が気に入って学園時代は彼をからかっていたっけ。

「アド、大丈夫。いつかきつと、あなたを救ってみせる」

そう私が呟いたのが聞こえたのか、曇っていた彼の顔が笑顔に変わった。

その信じるような笑顔を私は決して忘れない、学園時代とは何もかもが、変わってしまった。

それでも私の生涯の中で最も輝いていた時間を、それを私にくれた彼を必ず助けてみせる。

「マキナ、私がアリスタと戦略ボードゲームで、勝ったことってあったかしら？」

「失礼ながら、一度もございませぬ」

「私って、これでも騎士団の指揮を執ったりするから、自分を優れてる、何て言うわけではないけど弱くはないつもりよ」

「……………アリス様には戦闘能力はございませんが、それを補って余りある戦略眼を持っていると？」

「ええ、アリス様の戦略と一年生を信じて待っているしかないわね」

「わかりました、では紅茶をお淹れします」

「ありがとう、マキナ」

アルマニア王族の舞台裏では、

未来がどのようなようになるか、それを見据えて決闘祭を俯瞰する、彼女らの目には校舎から撤退する数人の一年を映していた。

別の一室では黒く染められた聖職者のような服装の集団、服の胸にあたる部分には剣と刀の重ねられたエンブレムが、そして彼ら、彼女らが共通して放つ常人離れした雰囲気、

戦闘を経験した様な独特の眼光、

間違はなく、この聖職者の様な集団は全員が騎士に違いない。

そして、その中央で背筋を伸ばし椅子に座っているのは、

神聖で侵しがたい圧力を持っている年端もいかない青年。

藍色の髪の毛、瞳は知性的な猫のような金色だ。

そう、彼こそが騎士で信仰する者が最も多い宗教団体の長。

剣神教の教祖、ソードス・レイピア・エイルである。

「教祖様、めぼしい者はおりましたか？」

「いいえ、非常に腕のたつ者がいても、

それは貴族位、王族といった方々で剣神教には納刀しないでしょう」

「やはり、平民や商人の子供で才ある者は中々いませんか」

剣神教はこうしたツルギ、騎士関係の行事には、

率先して参加を申し込んでいる。

それは優れた騎士の発掘やスカウトなど後々の利益を考えたモノ。スカウトできないにしてもコネクションを作るのも理由の一つだ。だが、彼らはアームがらみの行事には参加しない。

そういつたモノは大地母神教の管轄であるが、
劍神教はツルギを持つ騎士を重要視していて、
劍とは異なる形状のアームを使う者を毛嫌いしているのだ。

「それにしても一年生の騎士は逃げてばかりで、
戦う気はないのでしょうか？教祖様」

「ああ、そうでしょうね。単純に戦力の差がありすぎて、
逃げて時間を稼ぐ算段でしょう」

「ああ、一年には第二王女がいますからね。

攻撃力のない無価値なツルギを持った出来損ないが」

周囲の取り巻きがクスクスと嘲りの笑いを静かに溢す、それを教祖のソードスがたし

なめた。

「言葉を慎みなさい、ここは王族の管理する場所。

どこにも目や耳があるか、わかりませんよ」

「あ、申し訳ありません！」

「いいえ、あなたの気持ちもわからない訳ではありませんから、

王族という民を導く者でありながら、

あのようなツルギを発現したとは、非常に許しがたい。

それにもかかわらずリリーシャ殿下は第二王女を放逐しない。

まったく、理解に苦しみます」

「そうですね、………ところで教祖様はどの学年が勝利するとお考えで？」

「順当にいつて三年生でしょう。」

「ですが、勝ってほしいのは一年ですかね」

「え！一年？何故に一年の勝利を求めているのですか？」

「三年生の代表は連合の王子です。」

連合は斬撃皇帝を欲してアルマニアに打診を続けています。ならば彼が望むモノは自然と絞れてくる。

九割は斬撃皇帝の身柄を要求するでしょう」

「なんと！」「まさか！」「連合に斬撃皇帝を？」

どよめき、騒ぐ彼らを手を僅かに挙げて静める。

教祖は獲物を狙う鷹のような目で決闘祭を見ている。

呟いた言葉は神官が神へと祈るように、

賭博師が天に流れを任せるかのようにだった。

「最低でも二年に勝利して欲しいのですが、

さて、どのようになるのやら？」

さて、そういった舞台裏の思惑など関係ない舞台上に話を移そう。

その頃、一年校舎では二年生が一年を追いかけていた。

一年は遠距離攻撃のできる者以外は戦闘に加わっていない。

そして二年が近づこうとすれば、一瞬で撤退に移行する。

どうやらまともに戦う気はないのだろう、

逃げる後輩を追いかける二年の中でリーダーとも言える男。

エゼルは漠然とした違和感を感じていた。

(逃げてばかりで正面から戦わないのか?)

古今東西戦略において逃げると言うことは、

戦場を変えるか、負けた時、もしくは罠を張るときだ。

そしてどういった可能性か判別しにくい。

「えーっと、皆、相手には気をつけてください。

相手が何も考えてないってことは無さそうですから」

「一年ボウズたちに警戒なんていらんでしょ。

心配しすぎですよ、エゼルさん」

「そーゆう油断が、ってもういいか。とりあえず気をつけるように」

逃げの一手しか打っていない一年を追いかけて、

とうとう、校舎の行き止まりに追い込んだ。

前後左右に逃げ場のない一年を倒そうとしたら、

突然、一年が姿を霞のように消してしまったのだ。

「……………いったい、どういうことなのやら？」

袋小路に入ると姿を消した一年たち。

理解の及ばない状況にこれは何者かのツルギによるモノと判断する。

エゼルは誰より早く冷静になるが、

周りの者はしばらく茫然としている。

するといきなり背後に現れたのは、

三年生に追われてこちらに向かつてくる一年たちだった。

しかも不可解なことにその一年生たちは自分らが追いかけていた一年生だ。彼らは三年生と共にこつちに突進ともいうべき速度で進んでいる。こちらがツルギを構えていると一年生は姿をまた消した。

あとに残っているのは獲物を見失った三年生。

現状に測りかねている二年生とエゼル。

そして、ここに決闘祭最初の本格的な遭遇戦が開始するのだった。

「アリスタ、三年と二年を鉢合わせるんに成功したで」

「こちらに損耗はないようだ」

「そう、最初の遭遇戦を演出することはできたみたい」

「ああ、しばらくは静観の方向でいくんだったね。

でも、隙があれば漁夫の利を狙ってみるんだっけ？」

「ここですんだだけ削れるやろかね」

「慎重に攻めていく、少なくともここで絶対に損耗は出さない」

「了解(や)」

さて、決闘祭の最初の戦闘は一年校舎で始まった。

策略の一手目が後々にどのような影響を及ぼすのか。

一方で次なる戦場は二年校舎と三年校舎を繋ぐ吊り橋。

そこに陣取っているのはミコトに忠義を尽くす少女、クリア。

周りは学生服を着ているのに一人だけメイド服を着ている。

そして隣であくび混じりに立っているのは、

連合の第二王子デクリトルがそこにいた。

そこにやってくるのは鏡で映したようにそっくりな二人。

彼女らは重力を無視して鎖を自身の周囲に浮かばせている。

鎖は意志があるかのように二人の周りを滞空していた。

鎖は蛇が大地を這いまわるかのごとく空中で動いている。

彼女ら、三年生に対して口火を切ったのは、

素直な喜びを表現したデクリトルだった。

「よう、去年ぶりかね。

こうして戦場でそのツラを拝むのはよお。

予定じゃ、兄貴を仕留めてからあんたらってつもりだったんだが、

決闘祭最初の相手は、お前ら鎖のアーム使いか、まあいいつか。

どちらにしる。去年の雪辱を晴らしたくって仕方がねえんだよ！」

「デクリトル様！その二人は………って話を聞いてください！」

「どうする、ジェイル？」 「どうしよう、チエーン？」

「……………さっさと終わらせよっか」

デクリトルは、かつて味わった屈辱を拭うべく双子に真つ向から挑む。

クリアはそんな彼を止めることに失敗して、

一方のジェイルとチエーンの双子は、

決闘祭を手早く終わらせようと二年生たちとの戦闘を開始する。

ここに吊り橋上の混戦開始。

さて、最後に栄光を手にする者は誰なのか。

決闘祭という名の舞台は序幕が開いたばかり、

そしてこの舞台は生きた舞台。

何が起ころのかは予測のできない代物。

さあ、騎士たちよ。

己の目的、願いのために動き続けるがいい。

時を同じくして王宮内の立ち入りを禁じられた区画。
その奥の奥の奥、誰も名を口にするのすら憚る場所。
永劫縛鎖の禁断牢獄内部にて。

「ふぬぬぬ、ギギギギギギギギッッ」

鎖の拘束から逃れるのを断念して、

必死で暴れまわり鎖に隙間を作ろうとする。

ここでアド・エテムは朝から休まずに暴れ続けているものの、
鎖はうんともすんとも、びくとも言わない。

これは鎖が強いのか、鎖に込められた想いが強いのか、
はたまた両方なのか、悩んでしまうのだが。

そんなことはどうでもいい。

とりあえず動き続けて僅かな隙間さえできれば脱出できる。

そう自分を信じて単純作業を継続させる。

そうやって体を揺さぶって荒ぶり暴れているうちに、
なんで自分がここにいるのか考えてしまう。

なんでリリーシャ先輩は俺をここに戻したのやら。

いや、本当に訳わからん。

ちなみに読者の皆様は今話の始めの方で、

アドとリリーシャの会話を見ているが、それはリリーシャの視点だ。

それだけでは内容を理解しきれないため、

アドの視点でリリーシャとの会話を見直してみよう。

――アド視点――

SSS級のブレイドを倒して数日がたった頃だ。

街はお祭りムード一色で騒がしいこと、この上ない。

いや、別にこういうお祭りが嫌いなんて訳ではない。

むしろこういったお祭りは大好きな人間にカウントできる。

それでも俺のテンションが上がらないのには理由、原因がある。

それもこれも街のあちこちに斬撃皇帝と書かれた旗や壁があるのだ。

想像してくれ、自分の持ち物の名前が街の至るところにあるのを、

ぶっちゃけ俺は耐えきることができなんだ。

幽閉から解放されて久し振りのシャバの空気を楽しんでいたら、

こんな強制羞恥プレイを体験するなんて予想できるはずもない。

それに斬撃皇帝とだけ書かれているだけなら、

今はマシだが、もし俺が斬撃皇帝と知られればどうなることか。

アド・エデムと名前が町中に書かれる。

そんなことにもなってしまうえば、

俺はこの国で生きることが、いや社会的に抹殺される。

どうすればいいのかと頭をひねっていると、

目に入ったのは悠然とそびえ立つ王宮だ。

そうリリーシャ先輩に頼み込んでみよう。

こんな言い方はするいのだろうが、先輩と後輩の仲だ。

なんとかかほとぼりが冷めるまで安全な場所を紹介してもらおう。

罪悪感が胸をチクチクとうずかせるが、

この生き地獄から脱するため背に腹は代えられない。

なんとか王宮のリリーシャ先輩がよくいるテラスに到着する。

挨拶は大事な要素のひとつだ。

というわけで、まずは爽やかに挨拶を試してみる。

「やあ、リリーシャ先輩、マキナ先輩。久しぶりです」

「リリーシャ様、英雄さんの登場です」

「あ、アド。……あなた、連絡してから来なさいっていったでしょ。

いくら英雄さんだからって私は一国の王女なのよ。

その辺りはしつかりしてもらわないと」

ごめんなさい、普通にダメ出しされてしまいました。

でも諦めてたまるかあ！

……でも、謝つとかないと

「ああ、ごめんなさい。そこまで考えてなかった」

「アド・エデム、いきなり現れるとは無礼な、

あなたも貴族ならば、宮廷における最低限のマナーを覚えなさい。
まったく、あなたが救国の英雄とは、

世も末といったところかしら。

それとリリーシャ様は王族であることを肝に命じなさい。
下手をすれば無礼討ちすらありえますよ」

「はあ、それでどうしたの？ここまで来たんだから、

急ぎの用事ってわけなんでしょう。いったいどうしたの？」

言いにくいんだよなあ、だってようするに今回のお願いつて、

ヒキコモリ、ニート、またはヒモにしてくださいって、

頼み込むようなもんだからなあ。

ああ、言い出しにくいよー。。

ふう、男は度胸だー!!

「誰にも会わずに、隔離された場所はないかな？」

「……………どういうこと？」

「そのままの意味だよ。」

俺がしばらく静かに籠っていられる場所はない？」

心なしかリリーシャ先輩もマキナ先輩も顔色が変わった気がする。

……………やっぱり、ダメですかね。

いや、せめてこのお祭り騒ぎのほとぼりが冷ますために、

どこかに隠れる場所を恵んでください！

いやもう、本当にお願ひしますよ！切実に、

だって俺が斬撃皇帝って、

剣神教の教祖さんは知ってるじゃないですかー！。

あの人やけに俺を勧誘してくるけど、

元日本人からすれば宗教ってどれも胡散臭いんだよなあ。

ってか、あの教祖さん。冗談かもしれないけど、

SSS級討伐の記念に俺の像を作るっていつてたけど、まさか本気じゃないよね。

……………このままじゃマジでヤバイ、それに他にも名前がバレて、プライベートが暴露なんてことにもなりかねなさそうなんだけど。

事は一刻を争うのですよ！だからお願いします！

「アド、それでいいの？あなたは英雄になったのよ。

もう監獄に囚われることなく、自由に外を歩くこともできるのに、

それに学園の後輩も同級生も先輩も先生も見返せる、

英雄として生きられるのに、本当にいいの？」

……………え？マジで？この流れはオツケーってこと？

それなら迷いなんかない！

よっしゃああ、夢のグータラ生活が俺を待ってるぜ！！

「うん、迷わない。だって、もうとっくに決めたから」

「わかった、以後のことは追って連絡するわ。」

「ご家族のことも心配しないで王家で責任を持って保護するわ」

ん？家族も？家族と一緒にどこかに行くのかな？

まあお礼はきちんとしておかないと。

「え？……………あ、ありがとう。リリーシャ先輩」

「……………ちよつと、アド、何よ。」

その反応はあなたの家族のことを何もフォローしないほど、
私が冷酷非道に見えていたの？」

いやいや、そんなことはありませんって。

むしろあなたの背中から後光が見えるくらいです。

いや、本当にリリーシャ先輩。マジ女神！

ありがたやくありがたやく。

「アド、大丈夫。いつかきつと、あなたを救ってみせる」

へっ？いやいや、リリーシャ先輩にはもう救われてますって、その言葉に違和感を覚えていたのに聞き返さなかったのを、今の俺はものすごく後悔している。

まさか牢獄に突っ込んで真人間にしようなんて、

まあ、自分の国の王族に『ニートになりたい』なんて言えば、普通は一蹴されるか、不敬罪で処刑されるだろう。

むしろ首を物理的に斬られなくてよかったと思うべきだ。

そうして俺は牢獄で生活する運びとなった。

まあ牢獄生活に不満はない、

環境は眉をしかめる所もあるが、美人の双子に、

可愛い後輩の一人が遊びに来てくれる。

でも娯楽がないのは、いただけない。

それだから決闘祭を観に行きたくなってしまうのだ。

だから、俺は悪くない。……………よし！理論武装完了！

このペースなら後少しで鎖に隙間を作れる。

そうすれば脱出可能。よし、頑張るぞー！！

「ん、だらあああああー！」

王宮に響く悲しみを帯びた叫び。(本質はただの掛け声)

この近くの区画で働く騎士たちはここに集まり、

侍女たちはこれを井戸端会議の肴とする。

ちなみにこの時の絶叫が、のちの王宮で怪談話になってしまうことを、

彼は知るよしもない。というか知れるわけもない。

業火絢爛なお祭り騒ぎ

決闘祭の舞台となるアルマニア国立学園で現在、戦闘が行われているのは大きく分けて二つ。三年校舎から二年校舎に渡るための唯一の移動手段である吊り橋での戦い、一年校舎での三年と二年の遭遇戦。この決闘祭の序章は既に始まった。

その戦場で騎士たちが示すモノはなんなのか。

では最初に視点を飛ばすのは一年校舎の戦闘で、こちらの戦場の方は混乱の渦に包まれていた。それもそのはず二年、三年と、お互いに予期していなかった敵との接敵に互いに驚いていたのだ。いや驚いてはいたが、すぐに戦闘を開始する辺りは、さすが騎士といったところだろう。二年と三年が戦うだけならよかったのだが、その戦闘に不確定要素が介入したのだ。それはなんと先程逃げ出した一年生だった。戦闘をしている最中、いきなり虚空から出現して敵を倒す。そんな状況に二年、三年は戸惑いを隠せないでいた。

戦っている時に突然、別の敵が現れるという悪夢が正夢として具現化したのだ。不意を突かれて二年が十数人、三年は九人が倒され、脱落者は二桁を越えている。三年は不意討ちにもとつきの対応ができる者が少なくない、むしろ不意討ちを仕掛けた一年にカウンターをするものさえいる。しかし、カウンターを入れたはずの一年は次に現れると無傷でいる。二年で不意討ちに対応できるほどの技術を持つ者は少ないため、次々と不意討ちにあつて倒されていく。刻一刻と三年、二年は減つていく。三年も一年を捌ききれなくなつてきた。そんな中、この場にいる二年のまとめ役、エゼルはある決断を下す。

「聞けええ、生き残っている者は近くにいます、このさい三年でもいい。背中合わせで一年を対処しろ！」

なんとエゼルの下した判断とは、敵の敵である三年に協力してもらおうというアイデア。まさしく逆転の発想、戦場でこの柔軟な発想を組み立てられることから、エゼルは優秀な指揮官の才能があるのがわかる。だが、それだけで動かないのが戦場というもの、不確定、理不尽を計算にいれていない彼は指揮官の才能はあれど、指揮官の経験値が不足している。そう貴族という生き物は何より体裁を重んじる、先程まで戦っていた相手に背中を預けるなど彼らが認めるはずもなく、意味のないプライドを口にして、戦

況は悪化する。

「な、そんな、三年は敵なんですよ。そんな奴らに背中を預けるなんて」

「そうだ、こちらも後輩に守ってもらおう背中などない！」

「先輩面しているような、こいつらに協力なんてできません！」

「そうだ、一年の連中なんて三年の力を借りなくたって」

「さつきから一年にやられっぱなしな、こいつらに預けられる背中など持っていない、それよりこいつらを先に片付けるぞ！」

「それはこつちのセリフだ！」

三年も二年も協力する様子など微塵もなく、むしろ隙を見せた敵に攻撃を入れ、そのせいで出来てしまった隙で自分が脱落していくというループに嵌まった。二年も三年

も高く無駄なプライドのせいで足を引つ張りあうことになってしまった。エゼルはこう思っていた。

「(どうしてこうなった?)」

エゼルは身分のそこそこ高い生まれで、なおかつ高い実力から刃騎士団にスカウトされていた。貴族の生まれだったエゼルは貴族としては珍しい柔軟な思考を持っており、彼は勝てるのならどんな方法でもいいと、誇りを守るための行為は、どんなことより優先されると考えていて、そのせいで騎士団時代は目上の騎士たちに白い目で見られてきた。それが嫌で刃騎士団を抜けて第二王子の元に身を寄せることになったのだ。まあ貴族の誇りを胸に持つエゼルは、王族らしからぬ言動をするデクリトルとたびたび衝突するが、なんだかんだで仲のいいコンビなのだろう。そんな彼は現状どうすればいいのか、頭を悩ませていた。

(……………(いつら、使いにくい!!))

「……………せめて二年同士は背中合わせで戦ってくださいねって、駄目だ。こいつら話を

聞いちやいねえ」

同級生は自分のこと、目の前の戦闘に精一杯で自分の号令を聞いていない。三年も二年に手一杯で一年の攻撃を隙だらけで受けて数を減らし続ける。この狭い校舎で味方を正確に転移させられる技量の持ち主、この戦場をデザインした相手のことを想像すると背筋が寒くなる。多種多様なツルギの能力が校舎を蹂躪する。破壊された校舎の破片が煙幕となつて視界を塞ぎ、今、自分の目の前にいる者が味方なのかすら判別できなくなつた。

「……………これは撤退でもしないとですかね。まあ皆々撤退してください、つてやっぱり聞いちやいねえよ。こいつら」

自分の、いや指揮官の命令に従わない者を惜しむ必要はないと、この混戦から自分だけでも撤退しようとする。うんざりした様子で撤退を開始する。とうかここまで命令を聞いていないとは、三年という不確定要素があつたにしろ、一年を撃破するのにここまで損耗するとは、想定外のことと頭を痛める。本陣とうか二年校舎に戻つたら、ミコトさんにクリアさん、デルのヤツに色々と言われるだろうと悪い予感を背負つて一

年校舎を後にした。

その風景を安全地帯から眺めている一年生の首魁である三人の少女は、最初の戦闘に僅かだが困惑していた。二年はエゼルを除いた全員を撃破、三年は引き際が遅れたものさすがに撤退を選択し、校舎外に移動したようだ。二年が撤退しないまま戦うとは予想外だったが、それでも三年だけになった以上、ここに来た三年は仕留めきる。

「二年の先輩たちがここまで往生際が悪いとは思わなかった」

「うちもやでアリスト、まさか引き際を判断できるんが、エゼル殿だけとは誤算やったわ。これまずいんとちやう？」

「……………？……………なんで不味いことになったんだい？敵がいつぱい倒せたのなら、それはいいことになるんじゃない？」

「……………キユア」

呆れたような視線でキユアを見つめる、二人の少女は現状、何故困っているのか懇切丁寧に話そうとする。キユアは頭が悪いわけではない、むしろ良いという方に分類できるが物事の本質を裏の裏まで理解することが得意ではないのだ。魔人という種族は大抵そういう者が多い。

「じゃあ、簡単に説明していく。今回の作戦では敵を減らすことではなく、二年と三年の間に亀裂を作ることが狙いだった」

「ところが二年も三年も中々退かないから、想定していたより敵の数を減らしてしまったりちゅーハナシや、これは下手すれば二年、三年が組んで、うちらを潰しにかかってもおかしくないやん」

「……………それは、じゃあ、どうするんだい？このままじゃ、まずいことになるじゃないか！」

「落ち着いて、最初の戦闘は想定外ではあつたけど、こうなることを予測していなかった訳じゃない。第二プランに移る」

「へっ！第二プラン？……マジでやるん。あれは博打だと思ふんやけど、うちらみたいな真つ向勝負苦手なんが揃っている一年生には、荷が重いちゃう？」

「僕は第二プランのリスクよりこのままでいる方がリスクが高いと思う。だったらこのままでいるより、賭けに出るしかないよ」

「そう、でも急いで策を出せばこつちが負ける。だから第二プランは状況に応じてすることにする。それまでは各員、三年、二年を遊撃していつて。私はダメージを負った人員を本陣に転移させる、シスは戦場を俯瞰していて、キュアは負傷者を手当していつてね」

一年の三人は己の為すべきことを理解して、たった一つの目的のために動き続ける。そう自分たちを助けてくれた男のために、その男にもう一度会うためだけに彼女たちは不可能という障害を突破し、打倒する。

Side Out

ジャラジャラジャラジャラ、ジャラジャラジャラジャラ、ジャラジャラジャラジャラ、鎖が歌うように、唄うように金属の擦れる音を鳴らす。その擦れる音は蛇が獲物を威嚇する鳴き声のようだ。鎖は宙を華麗に舞い、眼前の敵を仕留めにかかる。鎖が音を置き去りにして中空を翔ぶ、その鎖の通った後に少し遅れて音が鳴る、音速を突破した鎖は動くだけで大気を裂き、衝撃波が斬撃となつて周辺の数人を切り裂いて空へ吹き飛ばしていく、吹き飛ばされた者たちは、ボチャツと吊り橋下の川にまつ逆さま、音速を超越した速度で動き回る鎖に餌食となる二年生一同、三年は既に鎖の届かない安全地帯まで退いている。そんな鎖をすり抜けて双子に接近していくのは二人の騎士。

その二人の騎士こそ二年の中でも、トップクラスに数えられる二人。白い光を纏つてジェイルとチェーンの懐に突貫するデクリトル、水の羽衣を周囲に浮かべてクリアもそ

の後に続く。幾重にも立ちはだかる鎖の壁が不落の城塞のような五十メートルに挑んでいく。その五十メートルこそ、この勝負の命運を分ける節目だ。騎士という常人を遙かに越えた身体能力の持ち主ならば五十メートルという距離など、一瞬で踏破できるが、恐ろしい速度で振るわれる鎖が五十メートルを難攻不落の鉄壁とする。

「ちっ、……………くそおおお」

「ぐっ、近づけない……………五十メートルが遠い」

「フフフフ、近づけるかな？ どうせ駄目だと思おうよ」

「うん、さっさと終わらせよう。私たちは早く戻らないといけない所があるんだから、……………ね、ジエイル」

「そうだね、チェーン。さっさと始末をつけて帰ろう。私たちがいるべき場所に」

二人の騎士は双子の鎖を突破しようとする。鞭のごとく振るわれた鎖を、水のヴェー

ルが、電光を纏った刃が鎖を受け流す。鎖の根元から発生した運動は中間地点を伝達して先端部を鋭い棘に変える。棘と化した鎖は水を、雷の壁を貫く。かろうじてそれをギリギリで回避するも、体勢を崩した状態で避けてしまったことから攻撃に移れない。敵の鎖に一方的に攻撃されてしまい、このままではラチがあかない。何かこの流れを断ち切る出来事が必要だ。だが、そんなことを期待しても、そう簡単には起きやしない。水を操って鎖の軌道を反らしていると、デクリトルが勝負を決めようとする。鎖に打たれるのを覚悟で、双子に向かって最高速度で一直線に突っ込んでいく。だが、この時彼は失念していたのだ。去年己を仕留めたのがいったい何なのか。五十メートルを一瞬、ゼロコンマの領域で半分まで接近する。その瞬間に双子が笑った、デクリトルは双子の正面にいたため、その笑顔を見てしまった。その笑みは作戦が成功したという笑みではなかった、そもそもその笑顔は喜びを含んだモノではない。見え見えの罨にかかった愚かな獲物を哀れみ、嘲笑する笑顔だった。十メートル圏内にデクリトルが踏み込んだ時、虚空から鎖が出現して彼をがんじがらめにしてグルグル巻きにした。その鎖の先には冷たい笑顔を浮かべたジェイルがいた。

「しまったー……………畜生がああー！」

去年の屈辱は忘れていなかった、その汚点をバネとしてさらなる鍛練を積んだ。力も速度も去年の自分を遥かに越えているはずだった。だというのに鎖から逃げる事ができない、……………そう考えれば当然のこと。自分だけではなく相手も鍛練を重ねてきたのだろう。理解したとしても時、既に遅し。鎖は万力のように自分の体を締め付ける。締め付けてくる力はS級ブレイドでも捕縛できると思わせる。鎖の締め付けに意識が消失しそうになるも、何とか意識にしがみつく。意識を保つため歯を喰いしぼる、口内のどこかを噛みちぎったのか、激痛と血液が口に満ちる。

「アドに比べれば、どんなモノも脆いんだよ」

「アドと比べたら、可愛そうだよ。ジェイル」

そう彼女らは長い間、斬撃皇帝を封じてきた実力者。アドが逃げる気ではなかったということを差し引いても、ジェイル、チェーンは封じる、縛する、閉じるという一点は他に比肩するものがないほどだ。デクリトルを捕縛したことによりクリアは一人で双子を相手取らないとならなくなった。吊り橋の下の川から水を集めようと意識を集

中させようとした時、こちらに近づいてくる紅の球体が視界に入った。それは己の主人の力を帯びていることに、クリアは真つ先に気付いた。ジェイルもチェーンも状況とリスクを考え抜いて即決即断をした。紅の球体、焔塊を避けるためデクリトルの拘束を解いてクリアの方にブン投げた。火球は吊り橋に着弾して大穴を空けた。決闘祭のルールでは校舎を破損させれば、その破損箇所は自費で修復しなければならぬのに、フルパワーで仕留めにかかっている。炎の弾丸を避けた二人は同じことを考えていた。

「(ミコトちゃんが来たのか)」

アドの所に早く帰るためだけにジェイルとチェーンは、決闘祭を本気で戦っていたが彼女らには一つの目的があった、その目的とはミコトの撃破である。かつてアドを裏切ったミコトを打ち負かすことを決闘祭の目的とし、二年校舎に行くのに立候補したのだ。

「やっと見つけた、見つけたよ。チェーン」

「そうだね、見つけた、見つけたね。ジェイル」

双子は狙っている怨敵の待つであろう二年生校舎の最上部を見つめて、鎖をジャラジャラと鳴らして二年校舎に向かおうとする。それを止めるのは先ほどの雪辱を晴らすためデクリトルは剣を構え、クリアは主の援護に高揚感を覚えながら双子に対峙する。ジェイルとチエーンは邪魔者と決着をつけて、ミコトの居場所へ向かおうとしていた。

二年校舎屋上、生徒たちの学習のためにある学園天文台の上から、決闘祭の真つ只中の学園を俯瞰しているのは、二年生代表者とされた実力者。ミコト・ブレイズ・ヴォルカニア。彼女がこの天文台に上がって来たのは、周囲を見渡すためと、飛距離を伸ばすためである。では飛距離とは何か？それはミコトの放つ炎である。精密な狙撃をするためには、より高い場所へ上がる必要があった。そしてあつらえたように二年校舎屋上には他の学年の屋上にはない物、天文台があったのだ。

「獄卒の双子は仕留め損なつたか、……まあいいだろう。クリアたちの攻撃に私の狙撃

をもって大地に伏すがいい」

彼女としても、アドを封印し続ける獄卒の一族の双子。ジェイルとチェーンには思うところがあつた。……………しかし彼女は獄卒に抱いている思いは怒りではなく、憐れみであつた。そうSSS級のブレイドを屠つた（ほふ）アドならば封印に特化したとはいえ、あの騎士らの呪縛を抜けられぬはずがないと信じている。アドが双子に封印されているのではない、アドが双子に封印されてやっているのだ。おそらく双子の面目を潰さないために茶番劇に興じてやっているのだろうが、あの双子を倒して真実を叩きつけてやろうと、ミコトは想像を膨らませて眼下の先、双子の鎖使いを仕留めようと己のツルギに焔を充填し始めた。

「私はアイツに謝らねばならないんだ」

ポツリと後悔と懺悔をトッピングさせた独白が天文台に、虚しく（むな）木霊する。彼女は今、かつての彼に犯した罪を乗り越えるために戦場に立っているのだ。自分はアドを罪人にして、名を奪つた。そんな相手を自分だったら許すのだろうか？ 答えは否だ、否に決まっている。自分だったら確実に許さないと理解している。

……だが、待て。怒る、罵る？……アドが？……いや、アドがそんなことをするのか？ 亜人種族のヤツラとも話をして、商人や平民と会話するアイツが？……ないだろう、それに自分を恨んでいるとすれば、何故に自分に復讐をしない、アドには復讐を成せる力がある、実行は出来るはずだ。……それにアドは馬鹿馬鹿しいくらいに、甘かった。どんなヤツにも甘ったるかかった、そんなヤツが私を憎んでいるのか？……わからない、少なくともアドがそんな行動をするところが想像できない。だが、アドが自分を許してくれたとして、その事実には自分には納得できるのか？……自分を許せるのか？……私はアドの隣で立つていられるのか、底無し沼のような疑問が頭を覆う。それは今（戦場で）考えることではない、決闘祭に勝利してアドに謝ること、それだけを頭に詰めて意識を戦いに切り替えた。

……彼女はあるひとつの可能性を忘れていた。それはアドが彼女のことを憎んでも、愛してもいない場合、つまり好感度が普通の場合を失念していたのだ。実際、アドは牢獄生活を満喫しているし、事件とかミコトのことを深く考えていない。彼女が深く考えていても、相手はただの能天気な引きこもり。深く考えれば泥沼化するの当たり前だ。ミコトはアドが自分を憎んでいるとか、愛しているという風に考えていた。……アドはそんなに深く考えていないことをミコトは、知るよしもない。

補足だが、アドが双子の封印に甘んじていると言っていたのは、ミコトの勘違いである。確かにアドの斬撃皇帝は威力が尋常、いや常識はずれの騎士すら戦慄させる偉業を成したツルギだ。発動状態ならばどんな拘束も引きちぎって、滅ぼしてしまおうだろう。

……………そう、発動状態”ならば

発動状態ではない斬撃皇帝はただの種子の形をしたツルギであり、鈍器としてしか使えない道はないとアド自身が常々思っているのだ。アドは自身のツルギを一か、百以上の極端なパワーの使いにくいツルギと言っていた。実際、種子形態では役に立つどころか、むしろ邪魔になるという理由からナイフで戦っていたほどだ。そして現在、アドは斬撃皇帝を発動させてはいない。ゆえに彼は拘束されているのだ。

しかし、彼女の勘違いも無理からぬことだ、何せ彼女は初めて斬撃皇帝の発動を目撃した者の一人なのだから。そう二年の初め、ブレイドを実戦で倒すための授業があった時、想定外の出来事であるS級ブレイドの出現だ。そのブレイドを撃破した者がアド・

エテムなのだ。ちなみにこの時、斬撃皇帝を発動したのはおよそ十五秒。その短時間の発動で近くの草原、川、大地は枯れ果てた。種子だったはずのちつぽけなツルギはあつという間に天を貫かんばかりに巨大になった、斬撃皇帝の周囲は黒くなり、空を切り裂いたと形容するのが相応しい。そして斬撃皇帝が振り下ろされると、その一撃だけでS級のブレイドを滅殺した。

人を救って彼に与えられたのは、喝采でも賞賛でもない。名もないツルギに皮肉を込めて斬撃皇帝という名を押し付けられ、己の名前の一角を奪われたのだ。この世界の名前は三つに別れていて、最初と二つ目の名前こそ親から貰う最初の贈り物なのだ。それを奪われた者は罪人という証明。

S級のブレイドの事件のせいで、アド・エテムは自然を破壊する危険なツルギの持ち主として封印を執行された。その封印する際、婚約者の申し出があればアドは封印されずに済んだかもしれないのだが、彼女は封印に対して異議を出さなかった。……貴族として生きてきたミコトと違い、アドはどんな者であろうと拒絶はしなかった。そんな彼は学園では貴族からハブられ、一般生徒は貴族に目をつけられたくないからアドと関わるのをやめる者もいた。数人の後輩はアドと仲が良かったが、封印されるアドを黙って

見ているしかできなかった。そう見ていることしかできなかったのだ、アドの封印は剣神教、大地母神教とアルマニアの貴族たちの要請。断ろうものなら国は割れて、クーデターが起きる。結果としてアドはその封印できる人材のいた王族所有の牢獄に投獄された。その後SSS級のブレイドの出現時、それを撃破するという功績を出して、周囲は態度を一変させた。剣神教はアドを自分たちの一員にしようと、大地母神教は封印するのをやめて処刑しろと、貴族は意見を一回転させて彼は無実だから解放しろと騒ぐ。諸国は斬撃皇帝を寄越せと、喚く。(わめ)さて、斬撃皇帝の行く末は？そして決闘祭の果てに待つものとは？

一方、知らぬ間に実質、景品とされている斬撃皇帝ことアド・エテムは何をしていたのか。それは暴れることをやめてモゾモゾと芋虫のように蠢いていた(うご)。

「ん？……………もうちよい、もうちよいなんだよなあ。もう少しで鎖から……………んん？……………イケるか？」

散々暴れたおかげで鎖には、僅かな間隙ができた。ここからはゆつくりと鎖を抜けていくだけ、ここで焦って絡まれば脱出は絶望的だ。心を落ち着かせて……………そうだ。ゆつくりと一つ一つの段階を踏んでいけば、突破は余裕で可能。こうしていると学園時代を思い出す。そう、いわゆる青春という刹那の時、そんな時を俺はどうやって過ごしていたのか……………軟弱者といわれミコトにシバかれる、ミコトに強制的な特訓に連行される、ミコトの侍女のクリアさんにシバかれる、逃げる逃げる逃げる、追いかけられる追いかけられる、隠れ家を幾つか作る。んんん？あれ？いやこんなのばかりじゃない。これは違うでしょ。

そうだ！後輩の相談にのったりしてたっけ。うん、というかケモミミの後輩から大阪弁を聞かせてもらうとは思わなかった、それとケモミミをもふもふさせてもらって本当によかった。柔らかかったなあ、シスはこの世界では珍しい科学の勉強をしていて周りはシスを変人扱っていたけど、むしろ科学以外の技術で成り立っているこの世界の方向が違和感すごいんだよねえ。だってわかんないことは神様のおかげでなっているんだもの、さすがに納得できないよ。

あ、あとは吸血鬼系でボクっ娘の後輩に、突然血を吸われたりしたっけ、いや別に気

にはしてなかったし許したから、もういいけど。……何を言ってるかと呆れるだろうが、俺はあの時に何をされたのか、わからなかった。催眠術とかトリックじゃない、もつとすごいモノの片鱗を味わった。……気がする。

それとアリスタちゃんというクーデレの後輩とお茶をしたりした。まあリリーシャ先輩と仲直りのお札に付き合ってくれたんだけどね。アリスタちゃんはここにもちよくちよく来れる身分だからなあ。というか捕まった先輩に面会に来てくれる後輩って中々いないよね。本当にいい娘だ、……そういうえばアリスタちゃんとのチェス、一回でいいから勝ってみたい。だって後輩に負け越してのは先輩としての沽券に関わるのですね。でも彼女に勝てるとは欠片も思えないんだよなあ。

さて、我が青春時代を思い出していたが鎖をそろそろ突破できそうだ。ここから抜けて決闘祭に間に合ったら、まず誰に会いに行こう？……最初に合った人でもいいか。……そういうえば昔、ミコトにご馳走になった食べ物には驚いたなあ。……まさかこの世界にアレがあるとは。もう一度でいいから相伴に預かりたい。彼女の家の領地にしかないからなあ。とりあえず頼んでみるか、まあ脱走したことについて、絶対怒ら

れそうだけど。

………ああ、食べたいなあ、カレーライス。

真打ち登場!

――Sideアド・エデム――

地の底、ひび割れた壁の隙間から僅かな光が射し込む牢獄の中。そこにいた黒髪の青年はもがくことをやめる。朝からの数時間に及ぶ抵抗によつて双子の強い想いの込められた鎖は僅かに緩んだ、その緩みは常人には何の意味を持たないだろう。だが、それが常人ではないのなら?それは不可能を破りさる突破口になる。黒髪の青年は今まで何人もの抵抗を無に帰した拘束という特性を持つ鎖から、何の能力も使わずに逃れるという偉業を成し遂げたのだ。

「ふう……………ようやく鎖が外れた。それじゃあ、飛び入り参加と洒落こもうかな」

牢獄から、外へと続く階段を上る。束縛されて鈍った体を馴らしながら、体のエンジンに火を灯す。自由の喜びを叫ぶように体内からパキパキと、軽やかな音が出る。そうしてゆつくりと階段を登っていく。およそ五分程度で牢獄から、王宮の一角に通じる扉

に達する。首をコキコキと鳴らし、両手を握ったり開いたりして準備は出来たとばかりに笑みを浮かべる。同時に頭の中で、このまま城の壁を越えて学園の外れに乗り込もうと簡易な計画を立て終わつた。牢獄周辺は普段から警備が薄い、なおかつ今日は決闘祭というイベントがある。王女の護衛のため城内の人は少なくなっているだろう。簡単に脱獄後の計画を立て、狭く暗い監獄から外へ。

「……それじゃつ、行つてきまーす！」

牢獄に別れを告げる言葉と共に、扉を両手で押して外の世界に踏み出した。……そうして外へ飛び出た彼を最初に歓迎したのは、自由な世界の全てだった。太陽の体の内部に溜まるような日の光、頬を撫でる優しい風、密閉された牢獄とは違うなんか……体育会系の部室のような匂い、……最後にこちらに向かつて多種多様なツルギを構え悪鬼の相貌でこちらを睨む歴戦の騎士（ガチムチ）集団だった。……扉を閉めてUターンしたくなる心を理性と意思で抑え、己の魂から絞り出すように言葉を発した。

「チェンジで」

――Sideジェイル、チェーン――

最初に気づいたのは、いやわかったのはこの双子だった。自分たち二人の力と想いを籠めた鎖は通常のそれとは一線を画するはずのモノだった。例えば自分たちが近くにいななくとも、対象を完璧に封じることが可能だと確信していた。だというのに、自分たちの鎖から標的から逃れる感触を感じた。そうこの瞬間に至上最強のツルギの担い手たる斬撃皇帝、アド・エテムが解き放たれたことを誰よりも先に双子は理解したのだ。

「そんなっ!」

「うそっ!」

眼前に敵がいることなど忘れてジェイルとチェーンの二人は、牢獄がある方向に体ご

と目を向ける。そんな中、ジェイルとチェーンと戦っているクリアとデクリトルは双子が作ったあからさまな隙を突くか迷っていた。クリアは主であるミコトの射線に入らないよう水の弾丸を生成して待機する。デクリトルは先程自分が鎖に囚われた事実怒りを覚える、同時に取り乱したような二人を怪訝な眼差しで見ている。

「へいへい、あいつらどうしたんかね？クリアちゃんよう」

「さあ、油断か慢心か、はたまた毘の類いなやら。どうとでもとれますね。それより現状ここで足止めして、お嬢さまの狙撃を命中させなければ」

「あいよって……おい、あの双子なんか様子がおかしくねえか？」

「んっ？ああ、確かに様子が変わですね。ですがここで獄卒の双子を倒さねば決闘祭の大局は予測しきれなくなります。ここで決着といきましょう！」

クリアとデクリトルはここでジェイルとチェーンたちを仕留めんと意気を充填させて、ツルギを構える。そうしたクリアたちの行動にジェイルたちは何とも思っていない

い。双子は鎖を伸ばして、大きくしならせる。その目的は学園の外へ行つて、牢獄でアドを拘束することにあつた。双子の束縛の鎖を逃れうる者などアド・エデムを置いて他にいない。しかし、アド・エデムが脱獄するなど、よつぼどのがない限りありえない。そして今回はそのよつぼどが起きたのかと心配になるのも無理はないだろう、あとはアド・エデムに対する執着によるものが大きい。

「ねえ、ジエイル。こんなところにいる暇なんてないよね」

「そうだね、チエーン。時間がもつたいないよ」

「舐めるな!!」

自分たちを侮る発言に否を一喝するクリアたち。と同時に焰の砲弾が吊り橋に落下した。狙いは外すことなく双子に直撃した……ように見えた。彼女たちは鎖を回転させることによつて焰の砲弾を消しはらつた。端から見れば鎖の速度が先程よりも、さらに加速しているのがわかる。振るわれた速度により発生した余波にすぎない衝撃波がもはや攻撃と呼べる脅威へと変貌する。

「まさか、まだ底を見せていないというのですか？」

「……………クリアちゃん。あいつらは俺が倒すぜ」

クリアはジェイルとチエーンの底知れぬ力を畏れ、デクリトルはそんな双子に対して恐怖を嘸みしめながらも、強がりとわかる壮絶な笑みを浮かべてツルギを構え直す。そうしなければ心が折れてしまうと本能で理解しているのだ。そんな二人（障害）をジェイルとチエーンは面倒くさそうに眺める。

「退いてくれないかなあ、今、あなたたちにかまっている暇はないんだ」

「……………ねえ、ジェイル。こんなことよりアドはだいじょうぶかな？」

「大丈夫だよ、アドはきつと無事だと思う。それでも何でアドが逃げたのかな？まずはアドのところに行って、話を聞きに行こう。話を聞いたらアドをいっぱい叱らないと

ね」

「そうだね、大人しくつて約束を勝手に破ったアドにお説教しなきゃ」

「うん、いつぱい、いーっぱい怒ってさ。たくさん、たくさん封じてあげようね。
……………一生逃げるなんて考えないように」

「そうそう、絶対、絶対に逃がさないんだから」

「……………なあーに、無視してんだ。こらああ!!」

デクリトルは雷速で二人に接敵する。50メートルの距離を一秒と待たず突破しようとする。それは一瞬の出来事、接近した瞬間の時間に雷速を越える視認できないほどの速度で鎖が、デクリトルをがんじがらめにする。まるで先程の攻防はお遊びと言わんばかりに、あつさりどデクリトルの身体を縛った。この場合デクリトルが弱かったのではなく、鎖のアームが強すぎたのだ。この場合、強すぎるというのは、攻撃力を指しているのではない。ジェイルとチェーンのアームは攻撃力が平均より低い、だが、それを

補って余りある一点特化の特殊能力を保有するのだ。彼女たちは代々、王宮の内部に存在する牢獄の守り手という役職を継いできた。王宮内部の牢獄は王族に関係し王家に不利な事態を起こす者を隠しておくための場所にして、国家に危険を及ぼしかねないツルギ（能力）の騎士を封印する役目を持っている。ジェイルとチエーンは歴代最年少で、その役目を許可された天才だ。そんな彼女らの鎖はどんな騎士であろうと拘束する絶對縛鎖の具現。捕まれば脱走不可能の怪物染みた鎖。

「ガアっ……………つてええ。つてめえら……………手え抜いて…やがった……………のか」

鎖が全身を軋ませ体を潰さんばかりに、ミシリミシリとデクリトルを縛る。拘束する力が強いのか体を潰し、肺を膨らませることが出来ないため、呼吸すらまともに取ることがを許さない。意識を保とうと努力することすら出来なくなる。デクリトルが最後に見たのは、自分など目もくれず歯牙にもかけない無表情な二人の少女たちだった。

「デクリトルさまー！」

ジェイルはデクリトルを掴んでいた鎖でデクリトルを適当に放り投げた。クリアは

限界まで心身を緊張させた状態で、吊り橋の下の川に落とされたデクリトルに大声で呼び掛ける。助けようとするも、さっきのデクリトルを軽くあしらった場面を見て、双子から一瞬たりとも目を背けることが出来ない。そんな絶体絶命の窮地でクリアのもとに更なるピンチがやって来る。

「あれはまがいなりにも我が愚弟なのだ。多少は加減してくれまいか、縛鎖の双蛇よ」

「その名前では呼ばないで、次に言ったら……怒るよ」

三年のリーダーであるカイルの発言にジェイルが不満をにじませ一言もの申す。周りの取り巻きたちがジェイルの不遜な物言いに文句を吐こうとする。しかし、ジェイルの発言の最後の一言はトーンが下がっていて、数々の命の危険を味わってきたカイル程の実力者をして背筋を凍らせるほどの威圧を感じさせた、そんな威圧に大した實力を持たない有象無象が意識を保てる道理はない。取り巻きの者たちは活躍と呼べる活躍をしないまま、決闘祭から退場した。カイルはそんな取り巻きたちを呆れ、疲れてしまっ放置する。ちなみにジェイルとチェーンはその話をした時、眼に光を映していなかった。(ハイライトを無くしていた)

「あと、ちゃんと殺さないように加減したよ、というか、急ぎの用事が出来たんだ。ここ、任せたから。……ジエイル、行こう」

吊り橋を抜けて目指すのは二年校舎、その目的はミコトでも決闘祭における栄光でもない。現地点でもっとも近い学園の出口が二年校舎の向こうにあるからだ。ジエイル、チエーンは吊り橋から近くの外灯を鎖で掴んで蜘蛛のような移動法で高速で移動していく。彼女らはただ、アドを拘束するため決闘祭のことごとくを無視して王宮方面に向かう。そして彼女らは知らない、双子の目的であるアド・エデムが決闘祭の会場である学園に来ようとしていることを。

——Sideカイル——

「ふう、まさかまだ手加減していたとは底知れぬ二人だ。ますます、我が国に欲しい人材だ。どうだ、ジエイル、チエーン殿、望むモノを何でも用意しよう。我が国でその鎖をふるっ……」

カイルの言葉に耳を傾けることなく、ジェイルとチエーンはさっさと吊り橋を通過しようとした。それを大人しくクリアが逃すはずはない。足止めをしようと、挑発的に双子を引き留めようとする。

「待ちなさい。私が見逃すと?.....!」

クリアはジェイルとチエーンを阻もうとするが、双子の苛立ちの籠った眼の奥を見た瞬間、言葉が出てこなくなる。のどが干上がり、恐怖で体が痙攣を起こす。一方、カイルは無視されたことにも、双子のものはや殺意と言っても信じられるレベルの覇気にも大した感慨も持たず、メイドのクリアと対峙する。

「それではメイドよ、俺もその道を通りたいが大人しく道を開けてくれるか? さすればお互い余計な時間を使わずに済む。それに今のお前は恐怖に吞まれている、それでは我と勝負にすらならん」

「.....それでも、退けない理由があるのです」

「成る程、先の双子の眼光で逃げても誰も責めはしないというのに、逃げなかったのは主への忠のためか？」

「……そうです、この忠誠こそ私の唯一の誇り。これだけは譲れないのです！」

「見事、見事とだけ言っておこう。それ以外の言葉は無粋である」

「ここで倒れてもらいます。カイル殿！」

「ああ、来るが……むっ！」

戦う前に多少、会話をしているとカイル目掛けて焔が発射された。カイルは周囲に転がっている取り巻きたちを庇うため、焔はツルギを使って空中に受け流す。焔の砲弾の軌道、熱の効果範囲、どの方向に受け流せば損傷せずに済むかを、カイルはコンマ数秒の時間で正確に計算しきった、それはもはや未来予知の領域に踏み込んだと断言できる。炎の砲弾が高質量とはいえず、実体が存在しない現象をツルギで受け流すということが、どれほどの絶技を用いたのかを理解したクリアは戦慄した。そしてカイルは遠距離

から炎を放った者がミコトであることを理解すると笑みを深め、味方である取り巻きたちを巻き込まないため、邪魔なため下の川に突き落とす。結局のところ彼らが戦うのは、たった一つの譲れないシンプルな理由のため。クリア、ミコトのタツグとカイルの戦闘が幕を開けた。

――Sideミコト――

「つちー！双子には抜けられたか」

あわよくばカイル共々、吊り橋上で仕留めるつもりだったが計画通りに、ことが進まないのは戦場の常。二年校舎に向かって来る双子と吊り橋上のカイル。どちらを倒すべきか脳内の天秤がリスクとリターンを秤にかける。

「いや、ミコトで勝負を決める」

クリアの援護をしてカイルを仕留めることを決定したミコト。凄まじい熱量を秘めたツルギを構え、眼下のカイルに狙いを定める。焔を一発放てば次の発射まで十五秒のチャージ（充填）を余儀なくされる。しかし、それは威力重視の一発である場合、量を重視して一発一発の威力を下げる代わりにマシンガンのような連続射撃でカイルを押し切ることを決めたミコト。そんな覚悟を決めた彼女の耳に雑音が入る。なんと、それは普段は静寂な雰囲気を持つ王宮からだった。

ズドーン、ガガガガガ、キーン、シャシャシャ、様々で猥雑な音が王宮から学園に聞こえてくる。騎士であるミコトは、すぐにこの乱雑な音響が騎士のツルギによるものと察知する。

「学園で行っている決闘祭にあてられて、訓練に熱が入っているのか？ まったくやかましい、もう少し品よくできないものか？」

ミコトは王宮で行われている騎士たちの戦闘を訓練と勘違いして嘆息する。実際は逃走中のアドを捕まえようとしているのだが、彼女もまさかアド・エデムが脱走したなど知れるはずもない。アドのことに気づかぬまま戦闘に集中し、カイルに焔の照準を合

わせた。ジエイルとチェーンたちは接近してから仕留めることにし、ミコトはツルギから焰の弾丸を吊り橋目掛け、ばらまいてカイルを吊り橋で打ち倒さんとツルギから焰を射つ。……………アドが自由の身になったことには欠片も気づかぬまま。

——Sideリリーシャ——

現在、リリーシャとマキナの二人が観覧しているのは一年校舎の戦闘。最初は逃げばかりだった一年生だが、二年と三年を鉢合わせることで上級生をあらかた仕留めたのだ。まさか全体的に能力、経験で劣る一年がここまで大判狂わせをするとは、決闘祭を俯瞰している観客の誰も想像できなかっただろう。リリーシャはまさかの戦功を挙げた一年たちを見て美しい相貌を緩ませる。それとは反対に傍にいる侍女のマキナは、この結果に不服があるのか厳しい面持ちになっている。それに気づいたリリーシャはマキナに対し、何が不安なのかと問いかける。

「そんな暗い顔でどうしたの?……………もしかして一年が心配なの?」

「はい、失礼ながら一年生は早々に退場する可能性が出てきました。残念ですが……
アリスさまの策が外れてしまったのかと」

「ああ、まさかあそこで戦闘継続するほど、相手が無能とは思わなかったでしょう。確かにアリスさまはこつそりと裏から操るって方針だったんだろうけど、これじゃあ警戒されてしまうのは確定ね」

「はい、………そこまでわかっていて、何故にリリースさまは落ち着いていられるのですか？」

「今の二年と三年を見てみなさい。二年のトップのミコトは三年トップのカイルに手一杯で、一年のことを考えてないでしょう。アリスさまたちはエゼルが率いる二年の残党を倒しに向かっている。あとはスピードが勝負、エゼルたちを速く撃破して二年、三年の漁夫の利を得ること。これが一年が唯一勝利できる方法よ」

「間に合うでしょうか？」

「…間に合わせるでしょう、アリストはそのために行動している。あと必要なのは、計画を遂げるための運びじゃないかしら?」

「……………最後は運ですか」

「万難万事で最後の決め手になるのは運でしょ」

侍女のマキナが疲れたように肩を落とす。それを主であるリリーシャは面白がっているのが、一目でわかるほどの笑顔で椅子に座する。するとそんな主従の歓談を阻むように部屋の隅っこに置いてあった水晶がピカピカと点滅する。これは遠距離に音声で伝える剣結晶で世界中の主な通信手段として扱われている。その通信機である結晶が点滅したということは王宮から連絡があることを示している。決闘祭の最中に王女であるリリーシャへ連絡をしてくるということが、どれほど緊急事態を示すのか理解したマキナは結晶に手を当てる。すると結晶の点滅が終わり透明な結晶が蒼く染まる。

「何事ですか?……………はっ?!……………まさか……………あり得ません。……………それが本当なら……………はい

……私も急ぎ、そちらに合流します」

「何があったの？」

「……………アド・エデムが脱走しました」

「……………え!?……………何でアドが脱走するの!」

「現状では不明です。何でも朝から永劫牢獄で叫び声が聞こえて、城内警備をしていた騎士たちが牢獄の前で警戒をしていたら、アドが脱走したとのこと。現在アドは城内を逃げ回っています」

「……………アドが牢獄を出るなんて、とりあえず大至急アドを確保して!……………それとジエイルとチエーンたちを急ぎ呼んで来て」

「ジエイルとチエーンは既に王宮方面に向かっています。そもそも、アドに掛けた鎖は彼女らのモノ、最初に気づくのは当然というところですね。それで私たちはどうしま

「しょうか?」

「……………絶対に、アドの脱走のことは隠しておいて。剣神教や貴族の奴らに知られると厄介なことになる、急ぎアドを捕獲して何故に脱走を図ったのか聞かないと。……………まったく…アドってば、いつだって自分一人で抱え込むんだから」

「城内ではアドを捕獲しようと本日、城の警備をしていた者たちが追いかけています。私も大至急、アドを追いかけている騎士たちに合流するので、リリーシャさまはここでお待ちを」

勘違いしているようだが、アド・エデムは決闘祭の野次馬をするために脱獄したにすぎない。リリーシャ、マキナが思うような国の一大事に関わろうなんて考えは一切なく、今回の脱獄はアド・エデムの単なるバカらしい思いつきだ。リリーシャとマキナに城内の騎士たちが、そんなバカらしい思いつきに振り回された事実を知るのは、決闘祭を終えてアドを捕まえた後の話。

パーセントカットという悲劇をもって、あがなわれることになるのを彼らは後々痛感することとなる。

「くつそ!一発も当たりやしねえ!」

「なら、逃げ場を作らずに囲め、囲め!」

「おい、城に置いてある壺とか保証効くよなあ!」

「あいつを捕まえなきゃ、話にならん!絶対に捕獲しろおお」

脱走者(バカ)を捕まえようとする漢たち。アドは何故、彼らが牢獄前にいたのか、疑問に思っていた。当人は、牢獄内で力んで叫んだことが直接の原因だとわかっていないようだ。牢獄から外に聞こえるほどの声、警戒して当然といったところ。アドは騎士たちから逃げ続ける。すると前方にメイドの集団が現れる、アドはほおをひきつらせて静かに笑った。それはなんでか?普段の彼だったら、眼福と喜んで観賞するはず。それをしない理由はたった一つ、メイドが持っているものは後方の騎士たち同様、騎士の象徴

である異能を発現するための媒介、つまるところツルギを手にしていたからに他ならない。前門の虎、後門の蛇？いや、前門の華、後門の漢と表現すべきだ。

「これはまずいねえ」

苦笑いをしてアドは立ち止まった。同時に騎士とメイドの塊も停止する。騎士たちはアドが自身のツルギである斬撃皇帝を発動させないように隙を伺って一瞬で仕留めようとする。メイドたちも男の動きに合わせてようと試みる。現時点でアドが所有するのは自分の服と、牢獄に入る前から使っていた愛用のナイフのみ。（没収されたナイフにアドの私物は牢獄内部に保管されていた）

膠着状態の緊張に耐えきれなくなった騎士の一人が油断したように見えるアドの懐へ一瞬で潜り込む。（アド・エデムは普段から脱力しきっているので、常時油断しているように見える）他者から見れば油断した敵の虚を突いたように見える行動。しかし、それはこの場においては下策だった。接近した騎士の運動エネルギーを、アドは利用する。地力では、この城内の騎士とメイドの集団一人、一人が上回っているだろう。そんな彼ら、彼女らから逃げるなど、並みの騎士では不可能。だが、斬撃皇帝の担い手アド・

エデムならば、不可能ではない。彼の技術のレベルはS評価（最上級）だ。小手先の技と工夫を使って、この状況を打破するなど造作もない。突っ込んでくる騎士の肩に手をおせて、そこを起点にして跳躍。人間を越える身体能力を有する騎士の動体視力すら惑わして、刹那の間に追跡者を振り切る。跳躍したアドが着地したのは、学園に近い城壁の上。壁を降りて城から脱出したアドは、学園内部に侵入するため学園の方向に向かった。こうして斬撃皇帝アド・エデム、脱獄成功、牢獄から出ていった彼が進むのは決闘祭の行われているアルマニア国立学園。

アド・エデムが決闘祭に参戦することによって、舞台はどのような模様となるのか？ 決闘祭は中盤戦に突入し始めた。

トリックスター乱入、交錯する意思と願い

決闘祭、それはアルマニア王国が誇る超巨大学園機関、国立アルマニア学園で一年に一度行われる一大イベントの名称。各国の留学生を広く受け入れるというアルマニア学園の構造上、この決闘祭の最終結果は国交、国益に大きな影響をもたらす。いわば、各国の面子争い、いや小規模な国家間の闘争と呼べる。何故、アルマニアがこのようなイベントを自国で行うのか？自国の学生が勝利すれば、（その学生の所属する派閥によるが）国にとって大した被害はない。それでも他国の学生が大きな結果を残した場合、そのリスクは計り知れない。だというのに、何故アルマニアは決闘祭を廃止にしないのか？そこには、アルマニアという国がどのような立場にあるのか？それが重要な鍵となってくる。

アルマニアはこの危険な時代において、永い間、その国力を保ち続けてきた。現にブレイドと呼ばれる人類の天敵を自国の戦力のみで払い続けた能力は見事と各国も認めている。国内の強力な騎士、獣人やエルフ、ドワーフ、魔族、大きな宗教組織など様々な勢力を国内で巧みにコントロールできたからこそその、奇跡的な繁栄。だが、それは裏

を返せば国内の多くの勢力のバランスが崩れた時、栄華を輝かせてきたアルマニアは必ず終わるということを示唆する。先代の王は娘であるリリーシャに王位を譲って戦場で果てた。まだまだ、不安定なアルマニアは諸外国の干渉をシャットアウトするため、国の力、能力、ポテンシャルがまだまだあるのだと証明し続けなければならない。もともと効率がよく、国に負担がかかりにくい宣伝は何か？過去の王はアルマニア学園の定期行事である決闘祭に目をつけた。アルマニア学園での高度な実戦演習、決闘祭は国の若者たちに宿る真価を魅せるという点で非常に素晴らしい効果を発揮している。しかし、そこには逆に他国が強いということを示すリスクもあつた。そのリスクを視野に入れても決闘祭を廃止することは出来ない。決闘祭は各国に対する自国の戦力提示という面もあるが、国内の宗教組織、国内の様々な勢力の牽制という意図も込められているのだから。

決闘祭は出目の大きなサイコロ、当たればデカイが、外せばリターンと同じだけのリスクを支払わねばならない。

決闘祭はアルマニアという国のいわゆるターニングポイント。決闘祭での結果は国の明日に影響してくる。そして今年の決闘祭では、昨年とまでと大きく違う所があつた。それは規格外にして常識はずれの騎士、アド・エデムだ。尋常ならざるツルギの使

い手がアルマニアに出現したことで、連合国や様々な勢力、各国などが暗躍している。そんな今年の決闘祭は近年まれに見る激戦の体を為していた。連合国の王族や、アルマニア貴族派閥でも屈指の実力者、アルマニア王族、獣人、魔族の姫たち。何十、何百年に一人、二人の猛者、智者者の集まった今年。平和な学園は人という常識の壁を越えた騎士たちの戦場となった。そんな生き物の限界を凌駕した戦いの巻き起こる学園に向かうのは、決闘祭の中心にいる斬撃皇帝。牢獄から抜け出し、城内を突破したアド・エデム。さて、決闘祭はどのような結末を迎えるのか？

ただ一つ、確定していることがある。それは、どのような終幕になろうとも斬撃皇帝を中心にした物語である以上、決闘祭を巡る騒動は結局、英雄譚ではない。他者から見れば荘厳な寓話も、斬撃皇帝から見ると勘違いとすれ違いに気づかぬ喜劇に他ならないのだ。

生まれた時から一緒だった。どうして自分達が双子で生まれたのか、その理由はとんとわからない。それでも、私は双つに分かたれて、この世に生を受けた。言葉もわからないような子供の時から、私たちはずっと一緒に居た。母も、父も、私がどちらの名前を使う、私が判断出来なかった。顔ぶれはそっくり、髪型も好んで一緒にして、好きなぬいぐるみも、大好きなお菓子も、嫌いな野菜も、苦手な習い事も同じだったのだ、見分けろなんて難しいに決まっている。無理をして互いを似せているわけではない。自然と一致してしまうのだ。言葉が話せるようになって、母や父、友人たちにわかりやすくするため、仕方なく口調を意図して変えてみたりした。まあ、たまに口調を入れ換えてみたりするのだが。とりあえず、大体は私たちがジェイル、チエーンだと区別は出来るみたいになったので目標は達成できた。まあ、こうやって、私たちは大きな不幸もなく、至って平々凡々な生活を六歳まで過ごした。

そんな知識も経験もない幼い頃からわかっていいること、確信していることがたった一つだけある。

それは、私は、私たちはいつか誰かを好きになるってこと………そしてその好きになる人は同じなんだと。

自分達は剣型の、ツルギと呼ばれる異能ではなく、剣以外の形状をした鎖のアームの

使い手だと判明した。何でもシルドヴアの家系は代々、牢獄で囚人を捕縛するお役目を賜ってきたらしい。ただの一般人の罪人を捕縛する看守ではなく、ジェイルとチエーンは騎士を封じる牢獄の看守だという。そんな牢獄の仕事は七歳の時から始めた、捕まってくるのは大抵身分が凄く高い人ばかり。自分を解放しろ、自由にしろ、何でも欲しいモノをくれてやる、そんなことを言う人ばかりを相手にしていたら、いつの間にか、私たちは他の人の言葉が聞こえづらくなっていた。まるで遠くから声が聞こえるような感覚。物理的には距離がないはずなのに、まるで遠い彼方にいるみたい。最初は生活に支障が出ていたが、読唇術を自然と修得し困らない程度には日々を過ごせるように進歩した。それに母や父の声はちゃんと聞こえていて、私は、特に問題視していなかった。

そうやって、ゆっくりと確実に私たちの世界は狭く、小さく縮んでいく。学園にいても、それは何一つ変わらない。変わらない日常、変わらない周囲、不変に思われた学園生活。そんな折、学園におかしな後輩が現れた。それが後に斬撃皇帝と呼ばれる青年、アド・エデムである。

アームもツルギも大抵は武器か、それに準じた形状になる。なのに彼は種子という武

器にならない形の能力の持ち主。いつも戦闘で、もっぱら使うのは何でもないただのナイフ。おかしいな後輩だと思っていたが、積極的に関わろうとする気はない……………つもりだった。二年生になった時の決闘祭で彼は何の能力も使わず、ただの技術で私たちの鎖を抜け出した。それは屈辱だと思わずが、実際に感じたのは彼という人間への興味だった。そんな興味は彼の斬撃皇帝によって、恋心として完成した。

SSS級ブレイドという世界の破滅そのモノをたつた一発で倒し滅ぼしたツルギ《斬撃皇帝》。さて、ここで話を変えるが、私のアーム《律法の拘束者》（ロウ・バインダー）は、対象の力に依じて強度を上げて相手を絶対に逃がさないという強化型のチカラだ。これは、大地の全てを枯らして、どこまでも強くなる超強化型の斬撃皇帝との強烈なシンパシーを感じた。私が恋に落ちるというのも当然の帰結。私たちが願ったのは恋心に忠実すぎる欲望。すなわち、アド・エテム《斬撃皇帝》を永遠に捕らえていたい、永劫の時を彼と一緒に、という独占欲に似たナニカ。

彼の封印が出来るのは、私（ジェイル、チェーン）しかない。斬撃皇帝は凄まじい戦力を示した。その結果、彼の力に恐怖したアルマニア国の貴族、王族が彼を牢獄に幽閉することを決定。アド・エテムを縛る役目は、私たちが承るといふことで落ち着く。

その時、私たちは狂喜に踊った、恋い焦がれ、その生涯を自分達の手で封印したいと願ったアド・エデムを縛る機会がやってきたのだ。アド・エデム封印凍結の王命を歓び、悦び、喜んで受諾した。そうして、彼といた時間は今までの人生で得た全てに匹敵して、言葉にするとは無粋、単純になるが、簡単に言えば幸せと断言しよう。歪んだ幸せ、間違った幸福観、万人の否定は免れず、認めてもらえないなど私たちがすら理解している。それを承知で、私は彼と永久にいたいと願い続ける。そして彼が私たちの縛鎖を破った時、即座に戦線から離脱し、王宮の方に向かうことを決断したのだった。

彼女たちはアド・エデムが初恋の相手、果たしてこの初恋は実を結ぶのか？…彼女らはこう願っていた。………恋が成就しなくてもいい、ただ願うのは斬撃皇帝と死すまで添い遂げたい。願いと願いは、それだけのようだ。

「えいつ！」

「よつとー！」

双子の鎖は学園の手すり、街路樹、校舎の凹凸に絡まり高速で風を掻き分け、先へ先

へ向かう。この高速移動はスピード特化の騎士と比べても決して見劣りするものではない。むしろ立体的に動いたため、ただ速く動ける者よりも姿の捕捉が困難になっている。まるで翼があるかのごとく、重力という自然の絶対的な摂理を超越し宙を自由自在に舞う二人の騎士。

双子の鎖使いは戦場を翔ぶ。鎖を校舎の隙間、突起に絡ませ、高速で三次元的な移動を行う身のこなしは蜘蛛のごとく。戦場を風よりも疾く飛翔する姿は隼のようだ。学園から王宮に行く最短ルートは二年校舎先の門を通る他ない。ゆえに二年校舎にいるミコトとは戦闘になるだろうが、双子が今、考えているのはアド・エデムが脱走したことに対する危機感のみ。永久に拘束していたいという願いのため、ジェイル、チェーン。二人は一瞬でもアドが縛られていない状況に恐怖すら抱いている。二人は鎖と同色の鋼色の銀髪を靡かせて、二年校舎に急速に近づきつつあった。すると二人の頭上におそらく、ミコトが放ったであろう巨大な紅蓮が迫る。ジェイルは鎖を別の所に巻き付け、引っ張ることで進みながら回避した。一方のチェーンは腰を捻らせて、掴んでいた鎖を頭上の紅蓮に目掛け、ぶん投げる。双子の持つ鎖のアームは攻撃値が一般的なツルギに比べ、非常に低い。ならば鎖を何故、紅蓮に投げたのか？鎖が生物のようになつて紅蓮に真っ向から挑む。万物を焼き尽くさんとする紅蓮、対するは封印の鎖。普通な

ら攻撃値のより高い紅蓮が勝利するだろう。だが、ここで番狂わせが起きる。恐ろしい程の巨大な熱量を放出する紅蓮が鎖で覆われていくではないか。まるで蛇が獲物を己の身で包み絞め殺すように紅蓮を鎖が呑み込む。常識ではありえない瞬きの攻防、しかし、そんな凄まじい絶技を誇る様子もなく、双子は真つ直ぐに躊躇なく突き進む。二年校舎前を通りすぎる時、二年生の数人がツルギやアームを多彩に使って二人を攻撃するが、ミコトの攻撃すら避けた双子に彼らの攻撃は掠る道理はない。そしてジェイルとチェーンは、二年校舎を何もせずに通りぬけていく。ミコト含む、二年生一同は呆然と彼女らを見送るだけしか出来なかつた。

肩を揃え、双子が共に目指すは二年校舎後方にある王宮方面の門。ジェイルもチェーンも無言、無表情で門に向かい駆けているが、内心ではパニックに成りかけていた。自分達が行ったアド・エテムのための鎖、いわば彼女たちとアド・エテムを繋ぐ（物理的）絆を破られたのだ。恋に心を奪われた二人が恐慌し、決闘祭の何もかもを放り投げるのは火を見るより明らか。警備員の役割をしている騎士は上司か、誰かから事の成り行きを聞いたのか、双子を引き止めず敬礼をして見送る。

「ジェイル！」 「チェーン！」

双騎士は到着した門を開ける手間すら我慢出来なかった。一瞬、眼差しの交錯。ジェイルとチェーンはお互いに声をかけた。鎖を門の上部に引つ搔けて、門を飛び越えようとする。その時だった、門を越えんとする丁度のタイミング。そこで起こったことは単なる偶然、運命でも必然でもない予期できぬイレギュラー。それでも、ジェイル、チェーンたちには運命的なことに思えただろう。

「……………アド？」

「……………えつと？……………俺、参上……………なんつって？」

なんと、驚くことに突如として開かれた門の向こうには、ジェイルとチェーンの狂おしいまでに恋する青年の姿。万人に畏怖されし世界最強にして最恐の騎士アド・エデムがいたのだ。

Sideアド・エDEM

王宮を脱走してから、ゆっくりと一息つく余裕が出来た。城内の騎士、メイドの人は外に出るのに七面倒な手続きをしなければ外出が出来ないのだ。その手続きをしている間に俺は余裕で学園に到着できる。後は学園に向かうだけの道を真っ直ぐに進むだけ。よし、学園まで急いでいくかね。

「ふっー！」

全体的に通常スペックが低いアド・エDEMだが、それでも人類を超越した騎士の一人。その身体能力は恐るべきモノ、このペースなら軽く四、五分で学園へ到着可能。数キロ離れた学園を人類では不可能な速度で走破するアド・エDEM、その疾走は疾く駆ける野生の狼のよう。一般的な騎士に比べ基礎能力に劣るアドは、研鑽に練達を重ねた技術をもつて己より格上の騎士によく相対出来るのだ。とっておき、切り札、反則技とも

呼べる斬撃皇帝は、滅多なことでは使用しない。というか本人いわく斬撃皇帝を使うのは、ノリとテンションで決めるらしい。発動して十秒足らずで半径百キロを不毛の地に変える破滅の能力、この力で枯れた大地は大地母神教の神官がお手上げだと匙を投げるほど。逆に十秒以内であれば百キロも被害は及ばない事実を示している。

……ただし、それでも半径何キロかは確実に不毛の荒野に変貌するが。

駆ける先には決闘祭の舞台となるアルマニア学園。アドはようやく、その舞台の前、二年校舎裏の門にたどり着いた。門を開けるのはさほど苦労しない、苦労するのは決闘祭の監視員をしている騎士たち。学生よりも遥かに経験と実力を備えた騎士を相手にするのはアドでも至難。ゆえに彼らの目を欺きつつ、決闘祭を見物しようと門に手を押す。軽く数トンはあろう重鈍な門扉が今、開かれる。開かれた先にいたのは、長い監獄生活の癒しにして自分を縛っていた少女。ジェイルとチェーンの双子だった。

「……………アド？」

……………俺の決闘祭、最初からクライマックスだZE！双子ちゃんの鎖から脱走した負い目から多少の気まぐささと、どうしようもなさげが漂う。半ば自棄っぱちになって、前世

の記憶にあるライダーの決め台詞を思いっきり口走った。

「……………えつと？……………俺、参上……………なんつつて？」

……………うん、どうしようか？この状況と気まずい空気、例えるなら、自分の墓穴を墓標つきで作った感。なんて無駄な考えをしていたらジェイルとチエーンが現状を理解したらしい。無表情というか真顔だった彼女たちは一転して笑顔に。

「フフフ、アド。ここでもどうしたの？」

「そうだよ。私たちとの約束を破ってまで何してるの？」

あれ、怒っていない？……………これは……………事情を二人に教えれば、何とかなるのでは？他の騎士に見つかるより、ここでジェイルたちに会えてラッキーだったのか。よし、事情を説明して決闘祭の見学にも行こう。

「まったく、アドったら」

「そうそう、アドつてば」

え、え？……………よくよく、二人を観察すると何やら様子がおかしい。おかしいと言うより、うん、うまく言葉に出来ないが仮に表現するなら、めっちゃヤバイ。目の虹彩に光がなく、足どりは幽鬼みたくフラフラとして、俺の本能が『逃げちゃえよ、ベイビー！』つてシャウトしている。

「大丈夫だよ。アド、これからずっと一緒だからね」

「うんうん、ずっと一緒にいようね」

まずい、何がまずいのか明確にわかるわけではないが、確実にまずいことだけは察せる。二人はハイライトの消えた瞳を持ってゆつくりとだが、着実に俺に近づく。あ、これ詰んだかも。

「……………ふう、丁度のタイミングで来れたようですね」

絶体絶命の窮地に陥るアド・エデム。だが、そこでジェイルとチェーンの背後から、ロングスカートを翻し、清楚なメイド服を纏う新たな役者が舞台に現れる。彼女こそリリーシャ女王の第一の側近にして、斬撃皇帝アド・エデムの学園時代の先輩であるマキナ・ジーン・デウスエクス、その人だった。(巨乳)

S i d e m a k i n a

アド・エデム。それは学生時代の私が一目おいていた後輩の名前。彼と出会ったのは、彼が入学した一ヶ月後のある事件だ。学園で起きた連続強盗事件、手練れの騎士が夜中に歩いていると手荷物を奪われるという事件で、それを解決したのがアド・エデムと私だったのだ。学園でも非常に評判の悪い後輩が見事、事件に決着をつけた。それも考える限り最善の決着を。誰にも知られることのなかった真実の終幕。この事件によつて、リリーシャ様はアリスタ様と本当の意味で姉妹となることが出来た。リリーシャ様、アリスタ様はそうしてアド・エデムに恋心を抱いたのだろう。王族ゆえにお二

人の恋は果たされるのは難しい、叶うならどうか我が主たちの恋が叶うことを願おう。

それと私にとってのアド・エデムは、言葉にするなら弟というべきだろうか？ そんな彼が国のためとはいえ取監されるなんて理不尽、認めたくなかった。だが結局、何の行動も出来ずじまい、今も昔も、そんな自分の不甲斐なさに憤ってばかり。アドはアルマニアのため、牢獄への幽閉を受け入れたバカみたいな優しさを持つ青年。そんな彼が脱獄したのだ、きつと何か理由があるに違いない。アドの真意を聞くため急ぎ王宮に通ずる門を目指す。観覧席から二年校舎裏を通って門方面に移動していると、ジェイルとチエーンの二人が目にも止まらぬ速度で、文字通り飛んでいく。自分も負けじと加速して追いかけて、ジェイル、チエーンたちに遅れながらも門が見える位置にまで近づくと、どうしたのか、ジェイルとチエーンが突如開かれた門のところで止まったではないか。門の先に視線を動かそうとすると、堂々とした声がこの周辺に響き渡る。

「……………えつと？……………俺、参上……………なんつって？」

冗談を言うように笑いながら彼はそこにいた、『自分はここにいろぞ』と宣言する言葉を響かせ、ただ威風堂々と立っていた。自分の意思を飾らず偽らず曲げない誇り高い魂

の言葉。その言葉を聞いた途端に安堵の感情が押し寄せてきた。アドは何一つ変わっていないのだと確認できて、張りつめた緊張が消えた。ゆっくりとアドの近くに歩く。

……………ジエイルとチエーンが何やら物騒なことを言っている気がするが、ここはあえて触れないでおこう。まったく、拘束の技術はあの二人が専門ゆえに仕方ないが、アドに対する感情に危険なモノがあるような気がするの、自分の考えすぎなのか？

「…ふう、丁度のタイミングで来れたようですね」

この場でアドを見つけたのは本当に幸運だった。彼がここに来たということも、もしか、決闘祭に何か不穏な陰謀があるのでは？なんて馬鹿げた考えを浮かべてしまふ。実際、アドが外に出ていったのはSSS級のブレイド襲来といった恐ろしい事件。警戒しておかねばならないのは必須条件。アドが何故に脱走したのか、理由を聞いたため、早急にリリーシャ様の前に連れていく。幸いジエイル、チエーンのペアがいる以上逃がすなんてことはあり得なからう。

「アド・エデム、何故あなたが禁断牢獄を脱獄したのか知りませんが、リリーシャ様のお

わす所に行つて説明をお願いしますね。ジェイル、チェーン、アドを拘束してください」
とりあえず、これで一件落着と思いきや話はそう簡単に終わらない。むしろ、更なる
面倒事が上乘せされた。

「ダメ、アドはすぐに牢獄に戻るの。もうアドを離さないんだから」

「そうだよ、幾らリリース様が呼んでいるからって、絶対やくだ。アドとは、これ以上、
離れないんだから」

「なっ?!」

王家に仕えし牢獄の一族の現当主であるジェイル、チェーンはアルマニアの王である
リリースャの命を完全完璧に私事ではね除けたのだ。これは不敬罪に問われる問題。
想定外の事態を打破すべく、双子の説得に挑戦しようとする、まばたきを終えた瞬間
の眼前に鎖が飛んできた。

「!？」

意識の盲点を突いた一撃、チェーンの鎖のアームがマキナの首を絡み取らんと迫ってくる。それを上体を限りなく反らすことでなんとか回避を成功させたマキナ。突然の奇襲にすぐさま対応し、自身のツルギを顕現させて静かに構えた。その姿は常に油断を怠らない野生の獣を幻視させる。

マキナのツルギの形は遊びのない武骨なロングソード、鏢には飾りの一つも無い。それは所有者の実直な精神を反映したものの故か？刀身は鈍く重苦しい光を放つ。鎖の初撃を避けたマキナは味方と思っていた二人を見返す。

「ジェイル、チェーン。何ゆえ、このような蛮行に及んだのか説明いただきましょう」

「だって、アドとこれ以上離れるのは、我慢できないんだもん」

「そうよ、そうよ。アドは寄り道せず、牢獄に帰るの！」

「えっと、因みに俺の意見はどこに行つたのかな？」

アドがジェイルとチェーンたちの会話に疑問を放ると、ジェイル、チェーンはアドにゆつくりと視線を固定する。二人の表情は笑顔のはずなのに、直接向けられていない私ですら、寒気が骨髓を貫いていく。直接視線を合わせているアドの顔なんて、もう真っ青。

「アドは嫌？」

眩しく、純粹で膨大な想いの籠つた微笑みにアドは苦笑いを返している。………仕方ない、ジェイルたちにアドを捕らえさせてリリーシャ様の所に連れていくはずだったが、作戦変更。チェーンたち二人をここで沈める。アドはその後で連れていこう。

「シツ！」

マキナはロングソードを腕力だけではなく、体の駆動部、重心、体幹の全てを巧みに操りジェイル、チェーンを目掛け一閃。それを双子は鎖で受け止める。この場は、まさ

しく騎士という生物の超越種が鎬を削る限界戦線。

「むー、危ないなあ」

「怪我したらどうするの〜」

「あなた方がそのセリフを言いますか、あなた方が」

互いの武器を交わらせながらも、このように気軽な軽口を叩く三人の女騎士。緊迫した状況で蚊帳の外にされたアド・エテム。斬撃皇帝を取り巻く事態は混沌と相成っていた。

S i d e O u t

S i d e A n o t h e r

時をしばし戻しアド・エデムが門を開いた時。別の場所で、彼を想う少女たちが斬撃皇帝の出現を察知していた。

「…そんな！まさか……………」

「……………え？」

「なんやて!？」

「…うそ……………」

二年校舎屋上

ジェイル、チェーンの二人を逃がしたミコトは、吊り橋上の援護射撃をしている中、背後の門の方から聞こえる声に驚愕と疑問をそつと口にした。

「……………まさか……………おまえ、なのか？」

聞き覚えのある声に、ミコトは驚きを隠せなかった。クリアの戦闘をサポートしなけ

ればならない状況。しかし、背後にはアド・エテムと思われる声。ミコトはツルギの熱量を更に増やし、爆発的に上昇させる。後のことなど微塵も考えない。この場を速攻で決着させ、アドのいるであろう方向に向かうと判断を下す。

「……………まったく、この戦いはお前を助けるモノだというのに、ここで出てくるとは。少しは空気を読め、バカモノが。まあいい、待っている。……………次で終わらせる……………」

ミコトの言葉が切れた時、屋上の空気が急に冷えてくる。相対的に真紅に燃える刀身へ、熱が閉じ込められてきた。ミコトの《次で終わらせる》という宣言、これよりミコトの打ち出す一撃は、騎士にとっても常識の埒外。敵であり、的であるカイルを狙い澄ます。

最高にして、自身の持つ最強の一撃を放つ前、ミコトはポツリと呟く。それは祈りを込めた一言で、愛の込められた一言だった。

「……………アド……………」

一年校舎前

一年校舎前に立つ三人の乙女。彼女らも無敵の騎士の出現とその名乗りを感じとつて、喜ぶより先に困惑を顕にしていた。

「二人とも、聞こえた？」

「ああ、当然やろ。あの声を、魂を、うちらが間違えるはずがないやん」

「でも、どうして？なんで決闘祭に？」

「……………聞くしかない」

「……………負けてまうかもしれない」

「辿り着くことすら出来ないかもしれないよ」

二人の友が語る可能性と危険性の提示にアリスタは一瞬、眼を閉じた。そして、すぐさま見開く。その開かれた瞳には明確な答えが輝いていた。

「それでも……それでも、行く………お願い………一緒に来て………」

友にして恋のライバルでもあるアリスタの声に、獣人のシステムと魔族のキュアは同時に笑って応じる。その答えは聞くまでもないとばかりに、散歩にでも行くかのごとく、当たり前のように気軽さがあつた。

「当然！」

「行くう」 「せやな」 「もちろん」

奇しくも別の場所でも同じ言の葉を呟いた者がいると、少女たちは気づかぬまま物語は先に、先へ進みゆく。

「アド（にい）（あんちゃん）」

全ての騎士は尋常ではない感覚器官を有しており、聴覚、視覚などを代表する五感は常人とは、比較にすらならない。しかし、騎士は優れた感覚を持つゆえに、本能的に必要なと判断した情報は自動的にカットしている。だが、必要と判断している内容なら、話は別だ。一年生、二年生筆頭の少女たちはアド・エデムの声が聞こえていた。このことは決闘祭をどのように導くのか。そして斬撃皇帝の行く先は？

乙女たちの戦い

決闘祭に斬撃皇帝が乱入したことで戦場の風向きは大幅に変わった。一年、二年、三年、それぞれの指揮官は彼の登場に驚き、それが真実なのかを確認しに急いで向かう。牢獄に収監されているはずの斬撃皇帝、その彼が何故に決闘祭に参戦したのか？この真実を確かめるべく、三つの勢力が彼のもとに集いつつあった。しかし、誰も知ることはない。斬撃皇帝が決闘祭に参加した理由が単なる暇潰しであるということに。舞台の表も裏もアド・エテムという名の人災に影響し、彼を中心にストーリーは廻り出す。

最強、最悪の騎士、斬撃皇帝と呼ばれしアド・エテム。さて、これから彼が決闘祭で何をやらかすのか？たつた一人の騎士の行動、それはさながら蝶の羽ばたきが起こす嵐のごとき波瀾を喚ぶ。修羅神仏、天魔悪鬼であろうと、予測できない混沌が決闘祭に広がり始めていた。

騎士は刃を持った武装であるツルギ、もしくはそれ以外の形状のアームなどを生まれ持つ。双子が振るう鎖は後者のアームにカテゴリされ、マキナのロングソードは前者の

ツルギに当てはまる。アド・エデムの斬撃皇帝は通常は種子という異様な形状だが、最終的に剣のような形になるため、ツルギとして記録されているらしい。ここで疑問になるのが斬撃皇帝を使えないアドは強いのかと言うことだ、この問いに答えるのは非常に困難と言わざるをえない。彼は技術に特化しており、回避、逃走、受け流しは常人の常識に縛られないほど巧みなモノだ。それでも攻撃に関してには貧弱と断言出来る。つまり、アドが斬撃皇帝を使わない戦闘で選べる選択肢はたった一つだけ。それは逃亡、この一点に関してならアドは最高位の騎士だろうと上回れる。さて、逃走に尖った性能を持つアド・エデムを女性陣は捕まえられるのだろうか。ここにアドが決闘祭に来て最初の戦闘が開始する。

ズツン！

バシツ！

ジェイルとチエーンの操る二本の鎖が空気を切り裂き、アドとマキナ、二つの標的を拘束しようと飛来する。マキナは己のツルギを使い、巧みに弾くことで難を逃れた。だが、アドの場合そうはいかない。彼の所有する斬撃皇帝はたった十秒の使用で大地を枯渇させてしまうことに加えて、単純に破壊力がありすぎる。つまり、騎士の所有する最大武装のツルギをアドは、強力すぎる、という本末転倒な理由で発動出来ない。その

ため彼は手持ちのナイフを振るい、迫る鎖を捌き続ける。アド・エデムの卓越した技術は人理さえ超越し、絶対縛鎖の鎖すらモノともしない。この場にいるアドを除いた三人の乙女は、改めてアドの絶技に舌を巻く。ツルギではないナイフ一本で、このようなことが出来る騎士は世界に五人としないだろう。斬撃皇帝を使用しなくとも、彼はその技量だけでも充分に強いのだと再確認した乙女たちは、アドの美しさすら魅せる無駄の無い動きに魅了されかけた。だが、ジェイルとチェーンはアドを牢獄に連れ帰るために思考を切り替え、マキナも自身の主、リリーシャのもとにアドを連行すべく意識を集中して戦闘を続行。マキナにも鎖が襲いかかるが、ジェイルとチェーンの目的がアドであるためか、アドより鎖の襲撃は軽い。そこでマキナは隙を伺ってアドを捕まえようとするが、アドに近づこうとすると鎖による攻撃の質が急上昇してしまう。これでは迂闊に動けない。片や、ジェイルとチェーンはアドを速く捕まえるか、マキナを先に片付けるかで悩んでいた。すると、いきなりアドが女性陣に声をかける。

「ところでき、決闘祭って今、どうなってるのかな?」

ジェイルとチェーン、マキナの三人は今までの緊迫していた状況を、一切気にしないアドの発言に毒気が抜かれてしまう。ジェイルとチェーンは鎖を手元に引き戻し、マキ

ナもツルギを肩に乗せて戦闘を中断させた。そして、アドはこんな状況にも関わらず、とぼけた顔でナイフをペン回しよろしく器用に回転させている。

「まさかとは思いますが、アド。貴方は決闘祭を見物するためだけに脱走したと？
……………マイペースと言うのにも限度があるでしょう。まったく、良くも悪くも昔
と何も変わらないんだから……………」

「なーんだ！じゃあ、アドは牢獄が嫌だから逃げ出したんじゃないんだね。それならそ
う言ってくればよかったのにい」

「そうだよ、それなら今から決闘祭を見に行こう！あ、でも、終わったら帰らなきゃダ
メだから。……………さてと、その前に……………マキナさんはどうする？」

「行かせるか？アドはリリーシャ様のもとに行ってもらいます。拒否、否定、逃亡の全て
を許しませんので……………悪しからず」

「俺としては一人で見物しに行きたいんだけど、……………ダメ？」

「ダメ（です）」

「ですよー」

アドの樂觀的な声が響いた瞬間に、鎖が、斬撃が戦いを再開させた。しかし、このままでは先ほどの焼き回し。ゆえにジェイルとチェーンは最初にアドを捕まえようと全力を尽くす。二本の鎖はアドを完全に包囲し、捕獲しようと迫り来る。しかし、この窮地にすらアドは諦めを見せない。

「まだだ！まだ終わらんよー！」

己を奮起させる言葉を叫ぶと、彼は鎖から逃れるために空に向けて跳躍した。そして空中に跳んだアドは接近した鎖の上に、立った。のだ。まさしく、あらゆる騎士を驚愕させる凄まじい技術。ジェイル、チェーン、マキナたちが目を見張る超技量。その絶技を魅せきったアドは鎖の包囲から逃れ、この場から離れていった。その速度はまさしく、脱兎のごとし。とても潔い逃走に三人の乙女たちは、アドを追跡することを忘れか

ける。

「……まさか、ツルギを使わずにここまでとは……」

あまりの曲芸じみた動作にマキナは呆然としてしまう、そこにジェイルとチエーンがマキナの方へ近づく。唐突な接近にマキナはツルギを構えるが、ジェイルたちは鎖を構えておらず、どうやら攻撃する気はないらしい。

「ねえねえ、マキナさん。私たちアドを捕まえたいだけなの……でもね、アドは行っちゃったんだあ……」

「うんうん、アドは行っちゃった。どうしてかなあ？何でかなあ？……私たちは、もつと、もーつと、アドを捕らえなきゃ……そう、思わない？マキナさん……」

双子は眩くようにマキナに話しかけているが、二人の瞳はマキナに焦点を合わせていない。マキナはジェイルたちの瞳がまるで底なしの闇のように感じて、思わず一歩だけ後ろに下がる。

「……………私としては、一刻も速くアドをリリースャ様のところに連れていかねばならないですよ……………ところでアドを追いかけないのですか？てつきり、貴女たちならアドをすぐに追跡すると踏んでいたのですが」

「アドを追いかけたいのは山々なんだけどねー」

「今すぐにも追っかけたいんだけど」

「アドが行っちゃったのは、私たちがマキナさんの相手もしていたから、だと思っただ」

「アドを捕まえてあげられなかったのは、マキナさんがいたからって、わかったんだ」

「だから」

二人の声が合わさった。その瞬間、双子の鎖が空中に浮かんで、周囲のあらゆる物体に絡み付く。マキナはこれは不味いと直感するも、鎖によって蜘蛛の巣のような空間が

瞬時に構成される。

「退場、してもらうね…マキナさん…」

何やら『退場』の発音、語気がおかしかった気がする。この違和感について一瞬だけ思考し、マキナはそれがどういう意味なのかを理解した、してしまったのだ。おそらく、ジエイルとチェーンという言葉は決闘祭からの退場ともう一つの意味を含んでいるだろう。マキナは己のツルギを正眼に構え、双子と相對する。これは本気でかからなければ、

「丁重にお断りいたします」

人生から、退場、しかねない。

Side Out

Side アド・エDEM

さて、右手に見えるのはジェイルとチエーン。左手にはいらつしやるのはマキナさん。つまり前門の美人双子の看守、後門の巨乳メイド。とりあえず、私、斬撃皇帝ことアド・エDEMはただいま修羅場の真っ最中です。何とかポーカーフェイスを保ちながら、ジェイルとチエーンの放つ鎖、マキナ先輩の斬撃を必死で回避する。フハハハー、内心じゃガクブルだけどな！しかし、ジェイルたちはまだしも、マキナ先輩のツルギが能力を発動させれば、逃げる暇もあつという間に無くなるだろう。だって、あれはまさしく、ご都合主義、としか言い様のない代物。であるならば、発動前に倒す？無理、無謀、不可能、愚の骨頂。最強の騎士、斬撃皇帝なんて周囲から言われても、発動させられない能力に意味なんてない。ならば、ここは潔く……………逃げよう。

「ところでさ、決闘祭って今、どうなってるのかな？」

会話をしているドサクサに紛れて、ソッコーで逃亡してみせる！どうか、隙を見て……隙を……創って！……………隙がねえええ!!!

「まさかとは思いますが、アド。貴方は決闘祭を見物するためだけに脱走したと？
……………マイペースと言うのにも限度があるでしょう。まったく、良くも悪くも昔
と何も変わらないんだから……………」

グフ……………マキナ先輩の正論に心が痛い……………ごめんなさい……………今も昔も迷惑ば
かりかけて……………申し訳ないと思っではいるんですよ……………嗚呼、先輩の呆れた視線
がグサグサくる。もう、ヤメテ、俺のライフは既にゼロだよ。

「なーんだーじゃあ、アドは牢獄が嫌だから逃げ出したんじゃないんだね。それならそ
う言ってくればよかったのにい」

「そうだよ、それなら今から決闘祭を見に行こう！あ、それでも、終わったら帰らな
きゃダメだから。……………さてと、その前に……………マキナさんはどうする？」

「行かせると？アドはリリーシャ様のもとに行ってもらいます。拒否、否定、逃亡の全て
を許しませんので……………悪しからず」

あれ、ジェイルとチエーンは意外と許してくれたっぽいな。あ、それでも、やつぱり牢獄にはリターンは確定か。……………うん、一応…俺の意見を伝えてみようか……

「俺としては一人で見物しに行きたいんだけど、……………ダメ？」

「ダメ（です）」

「ですよー」

三人が即答の上にハモってまで却下されるとか、もはや、渴いた笑いしか出来ない。こうして笑ってる間にも鎖が、斬撃が俺を仕留めようと襲来する。俺は普通の騎士に比べれば、素の身体能力が劣っている。出来ることなんて小細工だけ。スペックは斬撃皇帝を使わない限り、底辺の底辺。……………というか、三人とも？俺を生かして捕らえる気ある？生死を問わないとか言われたら笑えんよ。女性陣のおつかない攻撃をなんとか避け続けていると諦めに思考が傾き始めてきた。……………うん、もうゴールしてもいいよね？……………そんな時だ、夢、幻覚なのか？俺の視界に、ある男の後ろ姿が投影さ

れた。

その男とは……………《赤い彗星》と呼ばれたジオン軍の猛者。その名をシャア・アズナブル。彼はやけに良い笑顔でサムズアップしながら俺にある真理を告げた。

『モビルスーツの性能の違いが、戦力の決定的差でないということを教えてやれ』

なるほど……………そうだな。……………モビルスーツは今、まったく関係ないけど。とにかく伝えたいことは理解した。要するにスペックが勝敗を決めるんじゃない、つまり俺の技術で……………って、おい！ジェイルとチエーンの鎖、何だかすごい危険なオーラを感じるんだけど！

次の瞬間に、動きを完全に禁じる双つの鎖はアドを目掛けて振るわれた。まさに絶妙としか思えないようなタイミングで鎖は迫る。そんなピンチで、アドはテンションを無理矢理上げるためネタに走った台詞を自棄っぱちに叫ぶ。

「まだだ！まだ終わらんよ！」

ズドン！

明らかに鎖では出せないような音を発して、双子の（ある意味で）純粋な思いの籠った一撃が撃たれる。アドはそれを跳躍によって回避して、いや、回避を越え、その先へ。跳躍し宙に浮かんだ刹那、思考が高速化されたアド・エデムはスローモーシヨンになる世界の中で鎖の上に足を乗せる。ありえない奇跡、起こりえないミラクル。それをアド・エデムは何とか手繰り寄せたのだ。そして鎖と足が触れた瞬間、スローモーシヨンの世界は崩れ、通常速度の世界へと帰還。これが最後に最高のチャンス。アドは鎖に乗った足に持てる全ての力を充填した、そして力が充ち満ちた時、アドはこの修羅場から逃亡するため思いきり跳ね飛んだ。飛び上がりアドは先程の戦場から離れた場所に着地すると、一目散に逃走したのだった。

こうして、アド・エデム。なんやかんやで戦線離脱。

Side Out

S i d e アリスタ・システム・キュア

一年校舎を出て、二年校舎へ続く道を三人の少女たちが疾走する。若葉を芽吹させる街路樹の道に三つの風が疾った。この場にいるのは三人の少女だけ、他に護衛となる一年生は連れていない。一年生の将であるアリスタの敗北は一年生全員の敗北を意味する。だというのに護衛の一人も連れてきていないということとは、どういうことなのか？これは単純に、アリスタたちの戦闘の邪魔になることが理由として挙げられる。この三人のチームワークは、歴戦の騎士のそれに等しいほど。もしも、下手に他の者が混じれば、三人の足を引っ張りかねない。だから彼女たちは他の者を連れていないのである。……………まあ、単純にアド・エテムに会いに行くのに、他の者を連れていきたくないというのも理由の一つなのだが。

「この先にアドにいが？」

「たぶん、……………でも、戦闘のノイズで声が聞き取りづらい……」

「うちの耳でも聞きとれへんなあ、せやけど、三人くらいで戦つとると違う？それ以上はわからへんがな」

キュアとアリスタはアドがいるのか、不安を感じており、システムの獣人特有の聴覚をもつてしても戦闘の詳しい状況は読みきれない。それでも彼女らはただ真つ直ぐに走る。

「ふーむ、アリスタ？別動隊の連中ら、上手くことを運べるやろか？平民、貴族、獣人、魔人の区別なく、ごちゃ混ぜなチームで協力とか……………ちよつと無茶やで…………」

「うん、僕としても心配かな。二年校舎に侵入するスニーキングアタックつて、成功する、しないより仲間割れの方が心配だよ…………」

「仲がわるいのは諦めてる、互いを利用する最低限の協力が出来れば、それでいいし、それ以上は望まない」

表情を変えることなく、たんたんとして冷めたように喋るアリスタ。その態度は同じ一年生の配慮をまったく感じさせない。そんなアリスタの態度に二人の友人は、仕方ないなあと言わんばかりに笑いあう。そんな二人の様子に非常に口数の少ないアリスタが珍しく二人へ問いかけた。

「どうしたの？……………にやにやして…」

「うんにや、別に何でもあらへんよー」

「うん、僕も同じく」

「……………二人とも……………面白がつてる……………はあ……………もう、いい……………はやく、アドのところに行く」

システムとキュアの二人が冗談まじりに誤魔化し、その対応にアリスタがジト眼になり拗ねている。しかし、三者ともに不快感をまったく見せていない。これも彼女らなり

のコミュニケーションなのだろう。そんな微笑ましい掛け合いをしていると、前方に二年生と思わしき 男の三人組が確認できる。おそらく、二年校舎周辺の警備をしている者たちだ。彼らはアリスタたちの存在に気づいていない。

そこでアリスタは並走する二人に目配せをする、システムもそれに応じるように頭の狸耳をピクリとさせ、キュアも同様に目尻を少し上げた。経験、地力などで相手を上回っていないアリスタたちが勝利する方法はたった一つだけ。要するに、狙うは初撃決着・超短期戦。相手が気づいていない不意を奇襲して速効で戦闘を終わらせる。これがアリスタたちが一瞬で選んだ対処法だった。

まず最初に、アリスタは自分のツルギを足元に突き立て膝をつく。次にシステムがアリスタ、キュアを追い越して加速。二人を追い抜き眼にも止まらぬ速度で駆け出した。最後にキュアはアリスタの後方に立ち、己のツルギである深紅の旗を具現化する。

最初にシステムが地面に顔が触れんばかりの前傾姿勢で駆け出した。道の端に生えた木々を巧みに使って、高速かつ無音で敵の背後に忍び寄る。まるで野生の獣のごとき速度、巣を張る蜘蛛のような動作。そこからシステムは流れるような動きで敵の一人を昏倒させた。次いでキュアの旗による攻撃が二人目の不意を突く。そして最後の一人、

彼は油断しきっていた先程の敵とは違い、完全な戦闘体勢で三人の乙女たちにツルギを向ける。システムは己のツルギである鉈を構え、キュアも深紅の旗を槍のように前方に構えた。一番後ろのアリスタは目を閉じることで己の意識を集中させて次の一手に備える。そして、システムがほんの僅かに動く、男はその動きを一つも見逃しまいと凝視する。だが、なんと凝視していたはずのシステム、それに隣にいたキュアが突然、姿を消してしまった。男は唐突なことに驚きながらも、警戒のためツルギを構えて腰を落とす姿勢に。男は唯一姿を消さないアリスタをにらみつける……………そして彼が息を吐こうとした瞬間、警戒の甲斐無く、男は一瞬で意識を失うと共に決闘祭から脱落したのだった。

「よっしゃ、これで一丁上がりつと。にしてもアリスタのツルギつて、ごつつ便利やなあ。刺したとこの周辺に転移できるつて、攻撃力が無いつてとこ差っ引いても余りある能力やないか」

「それでもない……………私のツルギは転移を承諾した人しか跳ばせないから……………」
敵を移動させられない」

「それでも空間操作系のツルギを使いこなせるんだ。僕はスゴいと思うけど」

「……………ありがとう……………そういえば、シス。さっきの動きって何？」

「あ、それ、僕も気になった！シス、さっきのあれって何なの？何か初速から全速力と変わらない速さだったけど……………もしかして、獣人に伝わる特殊な技術とか?！」

「あー、ちやうちやう。あれな、教えてもらたんよ」

システムはカラカラと笑いながら、己のツルギである鉈を肩に乗せて歩き出す。アリスタとキュアはシステムのあとを追いながら問いかける。

「教えてもらった?……………あの技を？」

「えっと、それって僕らの知っている人？」

「知つとるはずやでえ、なんせウチらが助けてもらった人やからな」

「それって」 「もしかして…」

イタズラ混じりに言ったシステムの一言で謎が全て解け、二人はなるほど、と言わんばかりに納得した。そして、システムは先程の体術を教授した師が誰であるかという問いの答え合わせを行う。そう、あの無音の高速移動術をシステムに教えた者、その正体とは

「うちにあの技を教えてくれたんはアド・エテム。ウチらのおんちゃんや」

「アドにいが?!…むゝ……………それって僕たち教わってないんだけど」

「……………同じく」

「そりゃ、うちだけが教わった技やからなあ。技の名前がえーと、センサー、スイゲツとか言うたわ」

「……………後で教えて」

「僕もだからね！」

「わーった、わーった。うちもそこまでケチな女やない。教えたるよ、あんちゃんの教え
てくれた技をな……………」

「へえ、興味深い話をしてますね。俺も混ぜてもらえませんか」

背後から聞こえた声に反応し少女たちはツルギを構えて、バツと振りかえる。振り向
いた先で不敵な笑みを溢し立っていた人物とは、一年校舎で撃退した二年生の指揮官、
エゼル・ウォール・ゴビュルであった。

所かわって三年校舎と二年校舎を繋ぐ吊り橋上での戦闘。現時点で戦闘を続行して
いるのは二人。片方は二年主将であるミコトに仕える侍女のクリア。もう一方は三年
主将である連合国の王族、カイル。…この吊り橋上の戦闘は終始一貫してカイルの優勢

で進んでいた。機械仕掛けのように正確なカイルの剣技にクリアを防戦一方。どうか、直撃を回避するも攻撃に移ることが出来ない。クリアは周囲に浮遊する水塊をカイルに発射した、ただの水と侮るなかれ。これは騎士のツルギによる人智を越えた力。カイルは高速で迫る水撃にステップを踏んで対処、クリアに接近してツルギを振るう。クリアは己の薙刀状のツルギ、深海の純水（アビス・クリア）で受け止めた。カイルのツルギは片刃のロングソード型、薙刀とロングソードが鑢迫り合う。

「はあああああ!!」

カイルの列迫の掛け声に鑢迫り合いが崩れ、クリアが吹き飛ばされる。

「くっ！まだまだああ!!」

クリアは吹き飛ばされるも、宙返りをして猫のように着地。そして、カイルに斬りかかろうと足に力を籠めようとした時、クリアの首筋に悪寒が蠢いた。中断、逃ゲロ、逃げろ。ある意味では馴染みの恐怖。そうクリアは主との鍛練でこの悪寒を味わってきた。そう、ミコトは瞬間的な破壊力だけで言えば、規格外クラスのS評価。

彼女のツルギの放つ炎は、正面から受けてしまえば灰すら残らぬ灼光の焰。ミコトと普段から戦闘訓練を共にしてきたという経験が奇跡的にクリアを救う。クリアは前方へと向けていた脚の運動エネルギーを無理に後方へ変換。その反動か代償として、脚がメキメキと嫌な音を立てる。だが、そのおかげで吊り橋から離れた道路へ移動。吊り橋上のカイルは突然後ろに退がったクリアを追いかけようと一歩踏み出そうと動く。だが、一歩の踏み込みと同時に大爆音が轟き、灼熱の業火球がカイルを包んだ。

ズドガン!!!

この結果はカイルという格上を相手に持ちこたえたクリア、遠距離の狙撃を成功させたミコトたち二人が起こした大判狂わせ。そして吊り橋は熱により焼滅し欠片もない、加えて吊り橋下の川の水が水蒸気を発生させてカイルの姿が見当たらぬ状況。五体満足で生きているのだろうか？

「やりましたか!?!」

クリアが僅かに疑問を載せた声色で周囲を観測する。おおよそで十秒、水蒸気が晴れてくるとカイルの姿はどこにもない。緊張が解けたクリアは、援護してくれた主の方に振り向いた、その瞬間

「やっていない、まあ、惜しかったな」

「なっ……ガッ!?!」

油断を晒してしまったクリア、その隙を突いてカイルは彼女を気絶させる。これにて、吊り橋上の戦闘は終了。勝者であるカイルは悠然と先に進み、敗者であるクリアは地面へと沈められた。だが、ここで疑問が出てくる。何故、カイルはあの炎の弾丸を受けて無事なのか？

それは非常に簡単な答え。焔の弾はカイルに、直撃、していなかったのだ。カイルのツルギには特別な能力がない、可能なことと言えば、近未来を予測するだけ。つまり、信じられないだろうが、彼は戦闘が始まってから決着まで、先程のシーンも含めた数パターンの可能性を予測していたのである。どんなことでも、予測して先に知っていれ

ば、その困難に対処するのは不可能ではない。カイルがどのように焔の弾丸を避けたのか、簡易だが説明しよう。

まず、クリアが回避行動に移った瞬間、危険を予測したカイルは上空に跳躍。吊り橋に炎が着弾した時の爆風で空高く吹き飛ばされ、クリアとミコトの視界から姿を消す。そしてカイルは落下するも音を立てないで着地。水蒸気の煙幕に乗じてクリアを昏倒させたのだ。

遠目からクリアの敗北を見届けたミコトは、忠実なメイドに感謝を心中で唱え、ゆっくりと迫るカイルを見下ろす。吊り橋は突破された、一年を仕留めにいった別動隊は戻つてこない。ジェイル、チェーンなどは撃破されておらず、何よりアド・エデムがいるかもしれないというカオスな状況。ミコトは息を吐いて屋上から地上へ、トンつと飛び降りる。華麗に着地したミコトは己のツルギを腰に佩いて歩き出した。そう、ミコトはカイルを短期決戦で倒し、アドがいるやもしれない場所へ向かうつもりなのだ。先程までは狙撃に徹していたミコトだが、彼女が本来、もつとも得意とするのは、近接戦闘だ。今、この瞬間、ミコトはカイルを倒すため、心身ともに研ぎ澄まされた刃となった。ミコトはカイルのいる方へ歩む、ただその先にいるであろうアドのことだけを想い

.....。

さあ、二年と三年の頂上対決。謀らずしも、二年と三年の最強のカードがここに構築されることとなるのだった。

蒼き瞳の死生観

死とは逃げきれない追跡者だ。それを幼い獣人の少女システムが理解したのは、6歳の時だ。

システムが、死は世界に遍在し万物に宿っていると気づいたのは、己のツルギの真の能力を発動した瞬間だった。死とは生の裏面、生きているモノから死を視ることは普通では不可能だ。しかし、システムの瞳には死が黒い線として視界全てのモノに映っていた。眼に映るモノ全てに死が充満した世界、一步踏み出せば崩れ落ちそうな脆い世界でシステムは一人で生きてきた。彼女が発狂しなかったのは、死を視る能力のオン、オフが切り替えられたおかげだろう。

システムのツルギは視野を広げる能力であり、その広がった視野は概念的なモノであろうと見極められる。物理的には存在しない、死、であろうと、時間、であろうと。そして、逆説的に考えれば、視えるということはそれに干渉することが可能であるという証明でもあるのだ。システムは己のツルギに宿る真の能力を使うことに恐怖を抱いていた。そして、彼女はこの能力を恐れると同じくらい嫌悪しているのだ。

本来は視えないはずの、それ（死）が彼女の瞳にはそれが視えていた。そう、死とは何も特別なモノではない。そこから中で溢れんばかりに潜み隠れた姿なき存在。システムは死をそう定義している。生まれて十数年の少女が、独自の死生観を構築しているという事ははつきり言つて異質としか言えないだろう。

システムは獣人の王族の家系に生を受けた、王族といつても宮殿や後宮で誕生したという訳ではなく、極々普通の家でシステムは産まれた。かつての獣人たちは大山脈を駆けぬける誇り高く強靱な戦士と、周辺国家から恐れられてきた。しかし、獣人の国が大国とされたのは今や昔。ブレイドの被害、他種族との抗争、部族ごとの内紛、などの影響で獣人の数は着々と減つて、現在では国としての体裁を保つのが精一杯。獣人の王族といつてもシステムが産まれた頃には、獣人たちを纏める長のような役目になっていて王族と名乗るには微妙としか言い様がない。まあ、そのおかげでシステムは幼い頃から市井にまざり、一般家庭にいる普通の子供のような生活をしていた。システム自身も王族としての義務に縛られない自由奔放な暮らしが出来ていたので不満はなかったようだ。

彼女は3歳の時、ツルギを発現した。ツルギの能力は視点の強化、初めは誰もがこのツルギを無価値だと判断した。攻撃性は皆無、視点の強化など獣人の身体能力、鋭敏な

五感の前では有って無いも同然。この世界で王族と呼ばれる者は強い騎士が多い。その子孫も強い騎士が生まれる確率が高い。だが、システムは数少ない例外だった。

システムは己のツルギの本当の使い方に気づいたのは、彼女の6歳の誕生日。その日、仲のよい友人たちと登った山で、AA級相当のブレイドにシステムたちは遭遇した。ブレイドから友人たちを逃がすため、システムは自らを囮として山中で壮絶な逃走劇を繰り広げた。だが、いくら騎士とは言え、幼いシステムではブレイドから逃げ切れず、ブレイドに瀕死の重傷を刻まれる。瀕死の重傷による臨死体験、生と死の狭間でシステムは自分のツルギの真の能力の一端に触れ、ズタボロの体を必死で動かし、ブレイドを滅殺することに成功するのだった。

しかし、数秒でも「死」を視るという経験は、幼い少女だったシステムの心に大きな傷跡を作ってしまう。結果として、システムは自分のツルギをまったく、使わないようになり、ひたすら、屋内で勉学に励むインドア系の天才学者として成長した。勉学に打ち込んだシステムはこの世界ではあまり重要視されていない化学を専門にするようになり、特に今で言う機械工学を熱心に研究するようになった。そんな彼女は、やがて世界でも有数の学問機関、アルマニア国立学園の門扉を叩くこととなる。そこで彼女は斬

撃皇帝と呼ばれる男、アド・エDEMと出会うのだが、その話はまた別の機会に。

話を決闘祭に戻すでしょう……………

S i d e システム、アリスタ、キュア

システム、アリスタ、キュアの三名はアド・エDEMの声がしたと思われる二年校舎へ移動していた。ちなみにアリスタのツルギで転移しなかったのかということ、アドの声が聞こえた周辺でした戦闘音を警戒して、二年校舎までを自力で移動することにしたのである。三人の少女たちは二年校舎に行く途中にいた見張りを倒し、先に進もうとした時、その場に現れたのは二年の将の一角、エゼル・ウォール・ゴヒュルだった。

「…………エゼル・ウォール・ゴヒュル、何故あなたが？」

「いや、あなたたちの率いる1年に敗走して、本陣に戻ろうとしてたんですがね。まさ

か、こんなにも早くリベンジの機会が訪れるとは……まだまだ、私も捨てたもんじやないとみえる」

「まさか、あの極重装甲のエゼルと、こないな場所で行くわすとか想像しておらんかったで。これって、まごうことなきピンチやないか」

「どうする？ いっそ、アリスタのツルギで向こうまで跳んじやうとか」

「キュア………私たちが逃げたらアドがいるかもしれない所にまで、エゼルを引き連れて行ってしまう」

「まあ、あんちゃんのお助太刀に行くんや。その前にここでエゼルを倒さんと。向こうで邪魔されるかもしれないで」

唐突過ぎるエゼルの襲来に、少女らはパニックを起こさず冷静に事態を認識し、その上でエゼルを打倒することを決定した。だが、力、経験、技術の差は向かい合っているだけで、ひしひしと伝わってくる。勝てるイメージが浮かばない、難敵と呼ぶに値する

強者。少女たちは微かな勝利の可能性を手繰るために、自分達のツルギを強く握る。

「……………エゼル、貴方を倒す……………」

「二人とも、怪我したらすぐに僕が直すから！」

「三人がかりやけど、卑怯なんて言わんでな」

「はっ！……1年の頭とは言え、三人程度で俺を倒そうだと？……は、あはは……………調子に乗るんじゃないぞぞ！！」

エゼルの憤怒の叫びは、破壊の旋風を招来させ、道の表面にある煉瓦を粉々に粉碎する。砕けた煉瓦自体が煙幕となって、視界が煉瓦の破片で埋め尽くされた。三人は互いの背中をあわせて死角を無くす。土煙の中、どこからエゼルが来るのかというプレッシャーが三人にのしかかる。

「ジャ！！」

エゼルは三人に向けて己のツルギを振るう。すると振るった切っ先から半透明な障壁が突進してくるのではないか。道一杯に広がり迫りくる壁を、アリスタは冷淡な瞳に映す。巨大な壁が三人に直撃する瞬間、アリスタたちの姿が消えた。エゼルはその異常な現象に見覚えがあつた。そう一年校舎で、嫌というほどに辛酸を舐めさせられた現象。エゼルは警戒心を最大限に引き上げてツルギを握る。

「はあああああ!!!」

上! エゼルは上空の雄叫びに反応してツルギの能力を発動する。エゼルを中心にドーム状のバリアが張られた。ガキーン、と硬質な音をたててシステムの攻撃を防いだ。システムは障壁に攻撃を当て、発生した反作用で大きく退く。退き着地した場所にアリスタ、キュアの両名が出現する。その光景を見て、エゼルは神出鬼没な一年生の真実を暴いた。キュアは回復能力のツルギで有名、システムも転移系統の能力者ではない、すると消去法で最後に残ったアリスタこそが瞬間移動の能力者となる。

「まさか、アリスタ様がこのような能力をお持ちとはねえ。いやはや、落ちこぼれのヒメ

サマと聞いていたが、噂なんて宛にならないもんだ」

「……………どうも」

エゼルの感心したような言葉に、アリストは表情を変えず平坦な返事をする。抑揚が無い無造作な応対にエゼルは口を歪ませるが、自粛したのか溜め息を吐いてツルギを煉瓦に突き立てる。その姿は悠々とそびえ立つ山脈、難攻不落の城を思わせる挙動。

「防壁、……………いや、鉄壁？……………」

「…………アリスト、このままじゃ、どうやってもジリ貧だよ。あの障壁を破るほどの力なんて僕たち持ち合わせていないし、エゼルさんをどう突破しよう？」

アリストは通常どおり抑揚の無い声に無表情だが、どこか危機感を感じさせるように顔から一筋の冷や汗を垂らす。横のキュアはエゼルを突破する方法を模索しながら自分のツルギである旗を胸に抱える。システムは二人のように焦燥感を表に出さず、諦めたような素振りを見せる。この場合の諦めたというのは、勝負を指すのではなく、隠し

ていた切り札を温存することを諦めたと言うモノに近い。

「二人とも、下がって。アレ、使うわ」

「!!」

簡素な言葉、主語が入っていない話にも関わらずアリスタとキュアはシステムの言いたいことを正確に把握する。システムは覚悟を決めたような顔つきで、トレードマークの白衣を翻した。

「……………シス……………ごめん、」

「僕が弱いから、……………シスに、こんな……………」

「あ……………アリスタ、キュア、気にせんでえーよ。ウチを信じてドーンと構えとき、必ず勝ってみせるからな」

システムは自分の鉞状のツルギ、千里眼を軽く振って、エゼルと真つ向から対峙する。対峙したエゼルはどこか、不満げにシステムを睨み付けた。これは慢心しているのでも見下しているのでもない。実力差を正しく認識した上での対応。確かに連合国出身者は人間種以外を軽視する特徴がある、しかしエゼルは敵の実力を種族の差別で計りはしない。正しく実力差を把握する、これは刃騎士団にいた頃、常に自分より格上の強者を見ていた経験を元に構成された確かな秤だ。

つまり、今のシステムではエゼル（自分）に絶対に勝利できないにも関わらず、必ず勝利すると宣言している。その発言はエゼルを激しく不快にさせた。

「いいだろう、こっからは容赦しないぞ………1年娘！」

エゼルの咆哮と同時に、彼の背後から巨大な壁が出現する。半透明な壁、それは先程と変わらない、変わったのはそのサイズ。最初に突進してきた壁は校舎と同等、だが、今回は城の壁か、それ以上。いくら、アリスタが転移しようと逃げ場など存在しない。エゼルは「獲った」と確信する。確かに普通なら、ここで少女たちはお仕舞いだっただろう、だが、もしも普通ではない常識外れな不確定要素があったとしたら

その確信は覆される！

ザンツ！

エゼルが勝利の確信と共に放った最大級の攻撃、それは瞬時に消失した。一瞬で消え去った勝利の一撃。それが消えたことを、エゼルは信じられない。何が起きたのだと、正面のシステムへ視線を向けた。システムは鈍を振りかぶった姿勢で、そこに立っている。一見すると何も変わらないが、やがて、エゼルは唯一変わった点に気づいた。それは鈍い光を放つ蒼い眼光、今までの金色の虹彩とは違う蒼の虹彩。その蒼眼がゆつくりと、ゆつくりとエゼルを視界に入れた……………

S i d e o u t

Sideミコト

二年生で最強の騎士とは？アルマニア国立学園は徹底した実力主義だ。例えば、どんな経歴、地位、容姿を持っていようと、学園の生徒になれば残酷なまでに実力しか評価されない。ミコトはそんな学園の二年生で頂点に至った少女。その実力は並みの騎士と比較しても負けず劣らない。ちなみに二年生最強の騎士の選定は、斬撃皇帝、アド・エデムはあまりの規格外ゆえに除外しておく。さて、一方で三年の最強が、誰かと言うのは非常に難しい問いだ。連合の王子、カイルは確かに強い。しかし、三年には、あの双子^ズがいる。他者を捕らえるということに特化した騎士であるチェーンとジェイルはカイルと伯仲する実力者だ。故に三年で最強は誰かという話は簡単には決まらない。これはジェイルとチェーンが学園に来る回数^の少なさも原因している。ジェイルとチェーンが学校に中々来ない理由、これは学園ではアリストクライしか知らないが、彼女らは試験、強制参加の行事以外に行かないのは、アド・エデムの拘束を任されているからだ。そのため、カイルや三年生徒との訓練がほとんど、存在しない。

ここまで、長々と説明をしたが言いたいのは、たった一つだけだ。ミコトとカイルの戦闘は決闘祭における二年生、三年生の勝敗に通じているということ。焔の騎士と未来の騎士の決闘が始まる。

「薄々、こんな気はしていたよ。最後の最後ではこうなるだろうとな、貴方もそう感じていなかったか？この祭りには決闘という文字が冠されていて、決闘より集団戦が肝となつている。そんな祭りで、真つ当な決闘が出来るなんて仕組みたように感じるだろう？」

「この一対一が決定していたと？戦闘は不確定要素で満ちている。これは必然ではなく、偶然に依るものだ。無駄話はやめにして、行くぞ」

叫んだ訳でも、大きな声を張り上げた訳でもないカイルの一言。それが発せられた瞬間、ミコトは、カイルに大上段からツルギを降り下ろす。それを先読みしていたようにカイルは一撃を受け止め、密着状態からミコトに蹴撃。カイルの蹴りはミコトに命中するが、密着状態のためか威力はそれほどでもない。ミコトはカイルの蹴りをわざと受けて、片足となったカイルに足払いを仕掛ける。片足に足払いを受け、カイルはバランスを崩す。それをミコトは見逃すほど甘くない。足に火を纏わせて、カイルをサツカーボールのように蹴り飛ばす。

もし、アドがミコトの蹴りを目撃していたら、ノリノリで某CMのように『超エキサイティング!!』とでも叫んだことだろう。

蹴り飛ばされたカイルは、吹き飛ばされることすら読んでいたのか。体をグルグルと回転させて、衝撃を体外へ逃がす。ミコトもこれで決まるとは考えていない。追撃をしようとかイルに接近し、斬。ミコトの刀型のツルギ、灼熱焰刃（ホムラ）がカイルに向かって振るわれた。この斬撃、吹き飛ばされたカイルには避ける手段がない。ならば、避けなければいけないだけのこと。ミコトの斬撃を、カイルは回転による遠心力を利用した斬撃で跳ね返す。ミコトはその斬撃で大きく後ろに退いた。カイルはその間に着地して体勢を整える。

余人から見れば熾烈な攻防だろうが、本人たちからして見れば、ここまでの単なる小手調べ、戦いの前座程度。カイルもミコトも今の攻防を終えて、ようやく温まつてきたのか、両者から発する雰囲気は劇的に変貌した。これからが、二人の本当の真剣勝負。………両者ともに構えて動かない、止まった二人の間に弱い風が吹いた。二人の間を通った、そよ風は近くの木の葉を揺らす。揺れた葉が、枝から離れて地面に落ちた時、カ

イルとミコトはツルギを打ち付け合い正面から激突した。

S i d e マキナ

鎖で構築された檻、所々に隙間があるように見受けられるが、その隙間に潜ろうとすれば鎖が脱走者を締め上げ拘束する。まさしく、監獄の番人であるジエイル、チェーンに相応しいフィールド。アドを捕獲しに来たマキナは、何の因果か、鎖に囲まれた空間で、双子の少女たちと戦っていた。鎖を足場にマキナの頭上を動き回る二つの影。時おり緩んだ意識を突くように放たれる鎖の一撃。マキナはそれを何とか、避けたり打ち払ったりしていたが、こうも持久戦に持ち込まれると精神力、集中力も削られて隙が増えていく。このままでは近いうちにジエイルたちに仕留められるとマキナは感じ始めた。

「……………（どうする、私のツルギは手加減できるほどの融通は利かない。攻撃に転じれ

ば、確実に二人を倒せるが、二人に怪我を負わせてしまう」

バチツ！

考えこむマキナに向けて鎖が射たれる。正確無比な狙いの鎖をマキナはツルギで弾き、隙の少ない構えを取った。それは双子を倒すためというよりは、思考に集中するための選択。防御に重点を置いた構えのまま、マキナは思考を深めていく。

「(そうなる、ジェイルとチエーンが怪我を治す間は、アドを捕縛していられない。……………アドを捕獲し続けられる人材を見つけないければ。……………いる訳ないでしよ。アドを捕らえ続けられるような封印特化の騎士なんて、ジェイルとチエーン以外に存在しない。……………攻撃しなくても詰んで、攻撃しても詰み。これは、どうしたモノか?)」

マキナは深く考えこみながら、自分のメイド服の砂ぼこりを払う。やがて、戦闘の邪魔になると思ったのか、頭部のホワイトプリムを外してポケットにあたる収納部に入れた。これは隙だらけに見える行動だが、ジェイルとチエーンにつけこまれないように、マキナは最善の注意をして身だしなみを整えている。マキナが身だしなみを整え終わると同時に、轟、と凄まじい音をたてて鎖が翔んできた。

「っ!!」

その時だ、それ、は起こるべくして起きてしまった。その出来事は悲劇といえれば悲劇なんだろうが、言ってしまうえば喜劇の類い。それ、はマキナの身体的特徴が原因になる。彼女ですら予測していなかったアクシデント。

マキナが飛来する鎖を避けた瞬間に、学園までの疾走、鎖の回避などの負荷が積もり積もって、マキナの服の内側から『ブチッ』とイヤな音が鳴る。ぶっちゃけてしまえば、マキナの胸を留めていた下着がこれまでの負担に耐えられず、裂けてしまったのだ。服に関する技術が進んでいない時代では、下着というのは大抵、高級なオーダーメイドと相場が決まっている。マキナの巨大とっていい双丘は、揺れの防止、型崩れ、擦れる等の問題上、下着を必要とせざるを得ない。そして、下着をあつらえる出費というのは、王宮勤務のマキナであろうと懐に大ダメージを与えるほどの金額。つまり、これはマキナからしてみれば、かなりの悲劇だった。

「……………いいでしょう。ここからは加減も手心も加えません。ジェイル!

チエーン！覚悟なさい！！」

マキナは怒り半分決意半分の一喝を双子に叩きつける。その声を聞いてマキナを冗談雑じりに攻撃していたジェルたちの気配から遊び、油断が消え研ぎ澄まされた敵意だけが発露していく。マキナも手加減なんて思考は投げ捨てて、地面を強く踏みしめ、次の攻撃準備に備えるのだった。

—————

余談だが、下着が役目を果たしていない状態で強烈に地面を踏みしめたマキナの胸元はメイド服越しながらも、はつきりと目視可能なレベルで揺れたらしい……………

—————

S i d e システム

瞳の中にある虹彩が蒼く変わったことに平行して、視界が黒い線で覆われていく。それはただの黒い線ではない、存在そのものが不気味に映るセカイのツギハギ。世界をナマス切りにして、下手くそに縫い付けたような感覚に陥る。だが、そんなことは、どうでもいい。とばかりにシステムはエゼルへ特攻を仕掛けた。破れかぶれの特攻を迎撃しよう、とエゼルは壁を出現させて高速で射出した。

これまでの戦闘描写を見ればわかるだろうが、エゼル・ウォール・ゴヒユルのツルギの能力は、壁を創造することだ。エゼルの創り出した壁の強度はそこらへんにある鉋物の比較にならない。創り出した壁は空中を足場にしたり、対象の四方を壁で囲み閉鎖する、などの応用が効く能力だ。エゼルの戦闘は攻防一体、ブレイドとの実戦では防衛戦が中心だった。いくつもの防衛戦での殊勲は彼を最年少で連合最強の刃騎士団に入団させるまでに至る。ようするに学園の生徒レベルで、エゼルの壁を攻略できる者は非常に希有だということだ。それが一年ならば不可能だと断言してもよい。だが、そんな事実を蒼き眼が覆す。

斬っ!!

システムの鈍型のツルギが直撃する寸前、ツルギの刃が壁に接触する。その瞬間、豆腐に刃を通すように、スルリと壁が切断された。切断された壁は空気に溶けるがごとく消滅。その異常現象にエゼルは目を見張る。

「なつ、なんだと？ いったい、何をしたんだ!？」

「簡単な話や、何をしたかて？ 殺し、たんや」

「殺した？ …… 訳のわからんことを …… どんな手品を使ったんだ ……」

「あく、これはな。あんちゃんからの受け売りなんやけど。全てのモノはこの世界に発現した時から、死を内包してる。それが大気だろうと、光だろうが時間でも。存在して（生きて）いるなら、うちは神様でも殺せるらしいで …… 万象の死に干渉して、その意味を殺す。うちの眼は、死が見える、死をこの眼で直視する。故に、この眼の名を《直死の魔眼》 …… ……」

「……………直死の魔眼、だと？」

エゼルは聞いたことすらない、未知の能力に驚愕を示す。

「蹴り穿つ！」

驚愕しているエゼルへ間髪いれずシステムは続けざまに攻撃を放つ。エゼルは直死の魔眼が防御不可系のツルギと認識し、システムが蹴りを示唆する台詞を語ったにも関わらず、彼女の持つ鉈に意識を向けて僅かに後退してしまった。システムの持つツルギに意識を向けたということは、システム自身から意識が逸れたということでもある。エゼルの意識がツルギに向いたことを活かして、一瞬で、エゼルへ六回の蹴りを撃ち込む。

「ガアアアアアア！」

電光石火の六連撃に、エゼルは大きく後方へ蹴り飛ばされる。蹴り飛ばされたエゼルは空中に壁を出現させ、そこに一回転して猫のように着地。崩された体勢を整える。エゼルはシステムの追撃を警戒するが、システムは動こうとしない。むしろ、調子が悪そ

うに目を手で覆っている。それは視界を閉ざすように。エゼルはシステムの能力は何かのリスクがあるのかと分析を開始するのだった。

「(まずい、もう限界なんて洒落にならん……)」

結論を言えば、エゼルの分析は正しかった、死を見る、など正気の生き物が出来る芸当ではない。一步踏み出せば、崩れてしまいそうな脆い世界、周囲に満ち溢れている。システムの精神力は、直死の魔眼を発動している間は、加速度的に削られていく。下手をすれば廃人になりかねない大博打。システムは何か、エゼルを攻撃しようとするが、足が動かない。直死の魔眼を発動して、およそ二、三分。既にシステムの顔には疲労が色濃く出始めていた。エゼルはシステムへ先程の攻撃と同レベルの壁を射ち出す。

「少しは休ませんかい！」

放たれた壁を、殺してシステムはエゼルの懐に飛び込もうとする。

「まったく、先輩に敬意を払え、と教えられなかったのか？確かに、その能力には驚かされた………が、それだけだ。そちらが、殺す、より速く、多く、俺が壁を構築すればいいだけのこと！さあ、根比べの始まりってなあ！」

エゼルの宣言を皮切りに彼の前方に壁が出現する。それは先程のモノよりは小さな代物。だが、先程までとは唯一異なった点がある、それは障壁が幾重にも折り重なっているという点。そう、これは壁を多重に重ねて生み出された重装甲だった。

システムの直死の魔眼はあらゆる防御であろうと貫通する攻撃。しかし、それは一個体のみ。絶対の一撃で決着をつける相手なら、いざ知らず、単純な物量で押しきろうとするエゼルは相性が悪すぎる。

システムは後退しようと、足を動かそうとするが、彼女の意思に反して脚が動かない。精神力が切れかけのせいで、肉体が言うことを聞かなくなっている。動けないシステムへ多重の壁が迫る。

「よつと」

横合いから、緊張感のない声があると同時に、動けないシステムを突然現れた人影が抱えてエゼルの壁を回避した。その人影を見た瞬間、その場にいた全ての騎士が言葉を失う。夕日で照らされた道に現れた黒髪の青年。そう、黒髪なんて珍しい髪色の男など彼らは一人しか心当たりがない。

「まさか、本当にアドなの?」

「……アドにい?」

「どうして、あんちゃんここに……(てゆうか、お姫様抱っこって!?)これは夢なんか、現実なんか?!」

アド・エデムの急な登場に混乱した後輩らを尻目に、エゼルはアドへ語りかける。

「やあ、初めまして……というのが正しいかな?俺と君は互いに面識がなかったと記憶

しているからね。ところでアド・エテム？……………斬撃皇帝はアルマニア王宮で封印凍結に処されているという話だったが。まあ、いいか。とりあえず、何しに来たんだ？……………はつきり言つて邪魔なだけで」

「邪魔しに参った」

エゼルの発言にアドは即座に拒絶の意思を言葉にする。まるで、そう返すのが当然であるかのように。アドは躊躇することも、迷うことなく、瞬時にエゼルを敵に回した。アリスタ、キュア、システムは、何一つ変わっていない、アドへ愛おしそうに恋慕の視線を向けて、顔を朱に染める。恋する乙女たちは、大好きな青年（アド・エテム）の勝利を信じ、胸元で拳を強く握るのだった。

斬撃皇帝

後世、斬撃皇帝を語る文献にはアド・エデムの学生時代は、ほぼ存在しなかったとされている。事実、アド・エデムは一部の例外となる者たちを除いて、私的な交友関係は皆無。二年の初め頃に王宮内にある永劫縛鎖の禁断牢獄に収監されることになったため学園を卒業していない。

彼、もとい斬撃皇帝アド・エデムは、アルマニア王国の要人、危険騎士を幽閉する脱走不可能とされた永劫牢獄を二度だけ脱獄した。一度目はSSS級ブレイドの討伐へ行くために、そして二度目はアルマニア国立学園で行われた決闘祭への乱入だ。この二つは後世の学者たちが議論や分析を盛んに行う話で、様々な説がささやかれている。学者たちは決闘祭に乱入したという記録は偽りで極秘にSSS級ブレイドの討伐に向かわせたとも、実は愛する女性に会うため、牢獄を脱獄したという与太話が冗談交じりに議論されている。その頃の学園に在学中だった第二王女のアリスタ、獣人国の姫君システム、回復能力を持つツルギの使い手キュア、牢獄の番人ジェイル、チェーン。など斬撃皇帝と関わりのある女性がいたことから、この与太話にもある程度の信憑性が発生しているようだ。そう、最強災厄の騎士として名高い斬撃皇帝。彼の逸話や、発言は大平

がお伽話や民謡として語り継がれており、情報に事欠くことはまったくない。しかし、その多すぎる情報のせいで真偽が把握しきれず、考証や考察に多大な労力を強いられるという始末。他にも、斬撃皇帝とは個人を指すのではなく、アルマニアで組織された騎士団の名称ではないかという無茶苦茶な議題まで展開されて収拾がつかない状況にまで陥った。そして、当時のことを知る長寿のエルフたちは、頑なに斬撃皇帝についての話題に触れようとしない。アルマニア王家も斬撃皇帝の情報は部外秘としていて、噂では斬撃皇帝と懇意にしていた女王リリーシャの手帳に斬撃皇帝の情報が記されているらしいのだ。最も、その手帳の閲覧が許される者は王家の騎士以外存在しないのだが。

後世では斬撃皇帝は災厄をもたらす騎士とも、世界を喰い滅ぼし人を救う救世の騎士とも謳われている。英雄であると同時に大地を枯らす災い。だが、忘れるなかれ、斬撃皇帝アド・エデムは英雄、災厄などと呼ばれるような大物ではない。決闘祭に来た理由もテンション上げた勢いそのまま特攻かましただけであって、舞台裏を知っていると事実と外からの認識がどれほどに食い違っているかが、よくわかる。それでは、決闘祭の最後の幕を開こう。騎士たちの戦いは終わりに向けて流れ行く。誰にも止められない速度と熱を持って……………

S i d e アド・エデム

「邪魔しに参った」

ヤベっ、反射的に取り返しをつかないこと言ってしまった。よし、システムちゃんをいったん、下ろしてつと。……まずいなー、誰かはわかんないけど、二年生つてことは同級生じゃんかー。ってギャツ！何あれ、壁が、壁が飛んできたんだだけ。あれか、もしかして俺の立場って二年生の裏切り者!? まずい、二年を裏切つて一年の味方をしたというところが、ミコトちゃんにバレたら………おう、想像したくない。ええい、こうなれば彼を倒してこの場で起きたことを隠蔽するつきやない。いくぞ、壁の隙間を縫つて彼を倒す！

ズガガガガン!!!

……無理無理無理!!! 壁の量多すぎ、何これ弾幕、ルナティック? たーすーけー
てー。……つてアリスたちやんたちが、超キラキラした目で見てるんだけど。これはそ
ういうことですか? この大量に飛んでくる壁を、突破して彼を倒せつて? ……
やつたろーじやんか!!!

意を決して、幾つもの壁の隙間合間をくぐり抜ける。少なくとも被弾イコール即戦闘
不能。走れ、走ろう、走らなければ。一瞬でも立ち止まれば、そこで敗北。負けるのは
いい、これは絶対に勝たなければならぬ勝負ではないのだから。しかし、後輩らの前
で負けるのはダメだ。……だつて、彼女らに呆れられてしまえば、俺は本当に
ボツチになってしまう!!!

いや、同級生たちと交友皆無で、後輩の女子三人としか交友がないんだから既にボツ
チ扱いもしやーないか。でも、だからこそ可愛い後輩の前でくらはカッコつけない
と。

某社長よろしく”全速前進D A!”

真つ直ぐ、真つ直ぐ。立ち塞がる壁を越える、一步一步に全てを注ぎ込む。予測、予測、次の刹那を見切れ。見切り、予測した脅威に対処しろ。避けきれない壁を全霊の跳躍によって回避、跳躍した先の足場に他の壁を利用。地面に着地と同時に疾走する。ゼロコンマの停滞もせず流れるような動作。流動する川のごとき挙動。それがどれほどの技術を用いてなされたかを、理解した目の前の青年は壁を発生させる事を一瞬だが忘却した。

おつ、勝機！これなら、懐に潜り込める。ナイフを片手に前進あるのみ。はつきり言えば俺の誇れるモンなんて小賢しい小手先と使い所の限定された必殺のツルギだけ。この機を逃せば、敗北&先輩としてのなけなしの威厳がパーになる。負けられない、主に俺の尊厳のために！！

だが、懐に潜り込もうとする直前、あと一步半の距離でそれは起きてしまった。アドが急接近した瞬間、まさしくギリギリのタイミング。それはエゼルにとつてもギリギリだっただろう。だが、彼はこの状況を好機とし、笑みを深める。そして距離を詰めたア

ドに向けて、己持つ唯一のツルギ（能力）である防壁の創造。壁の攻撃応用。至近距離に立ち入ったアドに壁が放たれた、接近しすぎたために回避は出来ず、命中するには一拍もかからない。回避不可の敗北が確定した瞬間、負けを覚悟したアドは申し訳ないという気持ちを含めて後輩の少女たちを静かに見つめるのだった。

S i d e キュア

迅く、早く、速く。風よりも速い領域で二人の騎士は熾烈な戦闘に興じていく。疾駆するアドにいを潰さんと、エゼルが放つ群の壁。一片の隙間を見つけることすら困苦を極める窮地を、僕たちが恋い焦がれた英雄（アド）はまるで人波をすり抜けるがごとく突破する。迫る壁を回避し尽くし、勝利を手にしようと足掻く姿は英雄そのもの。しかし、戦況はある意味決まりきった状況に陥っていた。すなわち、アドの劣勢に。ただのナイフしか持ち合わせていない騎士が、ツルギを用いた騎士に勝てる道理など存在するはずもなし。エゼルが連射する壁に、アドはなんとか食いつけている。それでも、このままでは圧倒的な物量の前にアドには敗北してしまうだろう。マズイと齒齧みしか

出来ない自分が恨めしい、あの戦いに介入出来ない自分の弱さが疎ましい。

「なあ、これって、まずいやないか」

先ほどまでアドにいに姫抱きされていたシスは戦鬪前に下ろされ、こちらに無事戻ってきてくれた。シスのツルギの最凶能力“直死の魔眼”は精神的な負荷が恐ろしくかかる諸刃の剣。疲れ果てたシスの肉体と消耗しきった精神を僕のツルギ“聖女の輝き（ラ・ピユセル）”で治療を施す。赤の旗が振るわれシスの求めた治療の力が彼女に注がれる。ようやく、話せる程度に回復したシスは現状を正確に把握していた。

「うん、勝負の流れはエゼルにある。僕たちが加勢することはできないかな？」

「無理とは言わないけど、非常に困難。悔しいけどアドとエゼルの攻防を目で追いかけるのがやっと。私たちじゃあ、加勢すれば即退場すると思う」

アリスタは苦い顔でアドとエゼルの瞬迅の戦鬪を見つめ、ツルギを地面に突き立てる。“遊戯盤の駒（チエスボード）”の効果は突き立てた範囲から十キロ以内の空間転

移。いざとなれば、シスや僕がアドにいの援護が出来るように準備だけはしたのだから。だが、おそらく僕たちが出る幕などない、足を引っ張るのが関の山。

「ただ、見ていることしか出来ないなんて、ウチらに出来ることはあらへんのか！」

シスは自身の無力さを悔しがりながらも、アドの戦闘から目を離さない。目を反らしてはいけない、見届けろ。彼が勝つと最後まで信じて。

そして、事態は動く。回避ばかりだったアド・エデムが攻めに転じた。連射された壁を抜き去り、エゼルとの距離を縮める。三人の少女たちの表情が憂いから喜びに。ようやく捉えた勝機、アド・エデムはナイフを逆手に持ちエゼルへ勝利の一撃を見舞いせんと振りかぶった。勝った！アリスタ、システム、キュアの心が同調する。踏み込んで一歩半、それでアド・エデムは勝利出来ただろう。しかし、エゼルはアド・エデムの全霊の一手を上回った。アド・エデムとエゼルの分かつ半透明な障壁、ダメだ、あれでは届かない。届かせられない。

その時、迫る脅威に目もくれず敵から視線を外すという致命的な行為をアド・エデム

が行った。いったい、何が、疑問を口にするより先に彼の瞳には三人の少女たちを映りこむ。錯覚かもしれない、私たち（僕たち）の妄想かも知れない、けれど、その視線には、まるで共に戦おうと、信じている、とでも言いたげな輝きが込められていた。ならば、応えよう。システムとキュアはアリスタの肩に手を載せて、彼女への信頼を無言で示し、次の一手にかかるプレッシャーを和らげる。この一手で賭けるのは自分たちではなく、自分たちが恋した青年。ここで、アリスタの心中に不安が頭を覗かせていた。アリスタのツルギは転移させる対象の許可がなければ発動することはない。アドがアリスタを受け入れてくれるか？そんな不安からくる足踏み、しかし、友たちの手の感触に励まされアリスタは己のツルギの能力を發揮した。

「アド!!」

アリスタは自分たちの信頼と恋慕の全てを賭けて、アドへの援護の一手を打つ。完璧にエゼルの不意を突いた攻め、実はアドの不意も突いていたということにアリスタたちは気付くこともない。

—————Side. Other—————

これは語られることなき戦闘。本筋に比べれば実にちつぽけな話。それでも、これは決闘祭の勝敗を左右するほどの戦闘。二年校舎に残った二年生たちと、残った一年生総員。実のところ、三年生たちは二年校舎とそこに通ずる吊り橋上で大半が退場。二年も自分たちの校舎内と付近の警備をする者たちを除き、一年校舎へ出向いた者たちは全員が撃退された。故にここがとっておきの正念場。

「行くつぞおおお!!!」

「!!!」

一年生は二年校舎へ侵入後、各自一人一人が二年へ奇襲する。二年生も奇襲に早い対応で負けじと一年生を倒さんとツルギを振るう。だが、一年生より戦力的に強い二年生が次々と撃破され続けていく。そう、一年生はまったく怯まない、恐れない、止まらな

い。魔族も獣人も貴族も平民も各々が、信じられないことに”協力”して二年生を連携で翻弄している。この協力関係は信頼や友情により成立させているわけではない。ただ、二年生との歴然とした力量を認めただけ。一年生たちは、一人一人では勝ち目はゼロ、敗北は必至。だが、互いが互いを利用すれば話は別。歪と言いきれる協力態勢、それでも連携を取れない二年生を効率よく各個撃破する。破竹の勢い、対する一年生も二年生と同等の損害を出していく。最後の二年生が崩れ落ちた時、意識を保っている一年生はいない。まさしく、刺し違えたところだろうか。倒れた一年生たちはポロポロで見栄えがいいとは言えない、それでも彼らたちの顔には全力を出し切った満足感が浮かべられていた。その場にいた監視係の騎士が、無言で一年生たちに賞賛を込めた拍手を贈り健闘を讃えるのであった。

—————Side. Out—————

Sideミコト

カイルとの戦闘、それはミコトの今までに経験した戦闘の全てを掛け合わせても足りないほどの密度を感じさせる攻防。撃ち出す焰弾、灼熱を込めた刃、攻め手の悉くがカイルの剣技に迎撃され、カウンターを受けかける。これが連合国の第一王子、カイル・レギラ・レギオン。彼のツルギ（能力）は未来予知。存在しない未来を超越するには、対処不可能の一撃をカイルに叩き込むしかない。ミコトのツルギは担い手の感情の猛りと共に熱量を急上昇させカイルを討とうと炎上する。

—

余談ではあるが、カイルのツルギの能力は未来「予測」であり、予知ではない。あくまでも、予測は予測。敵の一手先二手先を読んでも、誤差は必ず生じる。その誤差を埋めるはカイル自身の技、未来を予め知るのではなく予め測り対応するのみ。カイルのツルギは補助に限定されていて戦闘向きとは言えない。なのにカイルの高い勝率、そして強さの理由は単純な話、本人が強いからだろう。

—

紅蓮の軌跡を描いてミコトの斬撃がカイルのツルギと衝突する。ミコトのツルギから発した熱波は大気の水分を薙ぎはらった。更に渴ききった空間で赫と銀の剣戟が反

響、ツルギ同士のぶつかり合いが周囲を揺らし破壊し尽くす。一步も退かない二人、その戦いは白熱し互いに全力と言える位階の激突に到達する。背後の二年校舎からとんでもない騒音が轟いているが、勝負に集中しているのか完全に耳に入っていない。

「ぜアアアアアア!!!」

「ダアアアアアアア!!!」

カイルとミコトが裂帛の意気を込め、ツルギを交差させた。刹那の停滞すら存在しない超高速戦闘。カイルはミコトの太刀筋を見極め、ツルギを受け止める。ミコトは止まることができず連撃でカイルを攻め立てた。膠着した状況にミコトは攻撃を中断し警戒怠らずカイルへ話しかける。

「二つ聞いておきたい、カイル。貴方は決闘祭へ勝利した暁には何を求めるのだ」

「ふむ……………話したところで支障はないか。決闘の合間の話として楽しむのもやぶさかではない。目的となる対象は二つほどだ。一つはある騎士を連れ戻すということ、こ

れは第二目標であつてそちらに説明することもなからう。そちらが興味のあるのはもう一つの方だろうか？」

「やはりか、連合国は斬撃皇帝を狙っているという情報があつたが……」

「是なり、此度の決闘祭における真の目的、最優先目標。斬撃皇帝と呼ばれし騎士の身柄だ。我々連合国では、斬撃皇帝の名前は広まつていてもその騎士が誰かまでは判明していない。尚且つ斬撃皇帝はアルマニア国に拘束されている。交渉したが答えは否。かといつて強引な手に訴えるのはこちらとしても望まず。ならばこそ、この決闘祭にて斬撃皇帝の身柄を要求するのみ」

「待て、連合国はあいつの名前を知らんのか!？」

「ああ、ん？あいつ……斬撃皇帝が拘束されてから学園内で貴様の婚約者を見なくなつた。……なるほどな、話は全て繋がつたぞ」

得心したとカイルはミコトを見据え犬歯を露わにした笑みを見せる。斬撃皇帝とい

う存在は大衆から貴族、各国の重鎮たちに広まっていた。しかし、それが誰なのかまでは掴めていなかったのだ。しかし、カイルはミコトの零した一つ一つの証言から斬撃皇帝の正体に行き着いた。

「あいつを、アドを渡せ、と?」

「そうだ、アルマニア国の権威、国力は確かに連合と引けをとらん。されど、規模が大きく異なる。アルマニア国よりも連合国の版図は非常に広い。つまり、それだけ守らねばならん国土が多いということ。強大な力を持つ騎士を活用せず縛り付けておくだけならば、斬撃皇帝はこちらがより効率的に活用しよう!」

カイルの言葉は己の国のためなら、アド・エテムを道具にするという主張。あまりに身勝手、なんと傲慢。ミコトは怒りに身を任せカイルを罵ろうとする。だが、そこで彼女はあることに気づいてしまった。カイルは自身の鏡に他ならないと。自分たちの主義主張には一切、アドの意思が考慮されていない。カイルを身勝手だと、どの口が言える。自分に彼を責める資格は存在しない………けど、それが止まる理由にもならない。

「そうか、カイル。お前はあいつを何一つ理解していないのだな」

「ん？何を言うかと思えば。理解する必要がどこにある。騎士とは力、権力の象徴。情報として知っておくことはあっても、理解するなど”時間”の無駄だ」

「……ああ、だったら、貴様と私は違う。……それでも、そちらがアドを理解し救うというなら、話は違っただろうな。……行くぞ、カイル。次で終わりだ。連合国の思惑にも、貴様との勝負にも!!」

ミコトはようやく、自分の答えを見出した。すなわち、アド・エテムともう一度再会を果たしという願い。謝罪も赦免も全て後回しだ。ごちゃごちゃと損得勘定で迷うのはお終い。貴族として生まれた自分が”馬鹿なことを”と絶句している。それでも、理屈で動くよりも感情の赴くままに行動しようと己の意思で決めた。思考放棄、まさしくそうだ。下策、言われるまでもない。愚行、自分が一番よくわかっている。だけど、この選択は自分が決めたことだ、この選択に生じる失敗も成功も失墜も栄光も全て、我が

身が抱える、そう決めた。

「何を???!」

カイルはミコトの宣言の後、カイルは己の予測を越える事態が起こると直感した。周囲から熱が消失しミコトを基点に収束する。熱を支配するミコトのツルギ ”灼熱焔刃（ホムラ）” このツルギには隠されたもう一つの力があつた。そう、極限状況。自己という最も重い存在を崩しかねない葛藤を越えたことによる覚醒。それがミコトを更なる騎士の高みへと押し上げた。隠された能力、その正体とは、”自分を炎という現象に変換する” というモノ。生物という軀を破砕し、炎という生物を超越した自然現象への昇位。名付けるならば、この能力の名は、”気炎万丈”。

「何だと、ミコト。貴様、それほどの力を温存して!」

「温存していたわけではない、これは私だけでは届かなかつた力だ。これまでの人生で積み重ねた研鑽、私を支えてくれたクリア、そして最高の難敵として立ち塞がったカイル、お前たちがいたから私はこの領域まで来れた。だからこそ、絶対に勝つん

だアアアアア
!!!!

「(効果範囲は……推定威力は？まさか、予測しきれんだと!!!)」

ミコトの咆哮が炎の津波を召喚する、この攻撃を回避しきれないカイルは、一か八か全力で背後に跳躍しようとする。その回避行動を無駄だとあざ笑うように荒れ狂う焔の奔流がカイルを炎獄の真っ只中に包み込んだ。——炎は全て、消え去り周囲は静寂に。炎から元の実体に戻ったミコトはガクリと倒れ落ちる。同時に具現化されていた”灼熱焔刃”も主人と同じように薄れさっていく。しばらくして、カイルとミコトは監視員の騎士たちに医務室へ緊急搬送されることとなり、こうして二年主将、三年主将の決闘は相討ちで決着と相成ったのである。

S i d e O u t

Sideアド・エテム

俺、オワタ。……………って、フアアアアア!! いつの間にか敵の背後にいるんだけど訳わからん、どーいうこと!?!ん、もしかして、アリスたちやんのツルギのおかげか! ナイスアシストだけど、せめて一言声かけてから能力使っておくれYO! いや、それよりも最高のチャンスを上回る大チャンス。死角からナイフの柄を使って敵の後頭部、延髄へ向かって、強烈な一撃。ゴズツ、鈍い打撲音が手の平の中でエコーする。糸の切れた人形のように敵の青年は膝から大地に倒れ落ちた。

「……………」

やったね、後輩の手助けで勝ったようなモンだけど、最低限の威厳は守りきれたぜ。なんとか、綱渡りの戦闘を勝利で収めた達成感を、無言で右手をぐつと空に上げガッツポーズで示す。いやもう、本当によかった。つと、アリスたちやんたちにも感謝をしなければ。後輩たちに親指を立てての勝利報告。おつと、少しニヤけてしまった。ポーカーフェイス、ポーカーフェイス。って、わあ! 後輩たちが感極まったように抱きつい

てきた。ダメだよ、三人一緒に抱きついてくるなんて、三人の柔らかな体が密着して匂いやら何やらで邪念が。邪念が。

「……勝つこと、信じてた……」

「ウチもや、あんちゃん。信じとつたで」

「僕もだ、アドにい。勝ってくれるってわかってた」

「ありがとう、みんな」

ダメだ、気の利いたセリフでも言おうと思っただけど、特に考えつかなかった。まあ、今は気持ちを言葉にするより、無言でいた方がいいのかも。下手に喋ってボロが出たら俺としても困っちゃうし。

「それよりアド、どうしてここに？」

「そやな、確かあんちゃんって、あの永劫牢獄に収監されとるっちゅう話だったはず。なのに、どないしてここにおるん？」

「あつ、それ、僕もそれ気になる!!」

え、え、いや、そんなキラキラした眼で見られても大した理由じゃないZ E!! 実は”暇だったから、監獄抜け出して決闘祭を観戦しよっかなあ” ってだけ……………うん、死んでも言えない。せつかく守った先輩の威厳が粉碎・デストロイされる。どうにか、話を誤魔化して。あつ、こりやダメだ。完全に聞く体勢だもん!

何か、何かないのか、この空気をまるごと消し飛ばすようなスーパーハプニング!!

「まだだアアアアアア!!!!」

……………え、マジかよ、ナイスタイミング!? 奇跡は起きた、あんた神か!! クリーンヒットしたってのにまだ動けるなんて、敵ながら天晴れ。って、ヤバイ。彼は、おそらく残っ

た全ての力を後先考えずに発動させてる。俺の嫌な予感は見事に的中、馬鹿馬鹿しいほどに巨大な壁が天に覆い被さる。避けられない、いや俺一人なら避け切れるけど、後輩たち全員を逃せない。運の悪いことに、アリスたちやんはツルギの顕現を解除した後だし。……………しやーなしだな。緊急事態つてことで”使うか”。リリーシャ先輩とかマキナ先輩、ジエイル、チエーンとかに大目玉喰らいそうだけど仕方ない。

右手を大きく開いて、己の深奥に埋もれたツルギを引き抜く。手の平に出現したのは、拳より少し小さな種子。これが武器だということは、百人が百人あり得ないと言うに違いない。されど、これこそが星喰らいの魔剣。大地の恵みを糧に万象一切を斬滅する破壊のツルギ。使えるリミットは十秒未満、躊躇いは一瞬、背に庇った後輩たちを守るため、俺は右手で種子を握り潰した……

S i d e O u t

—————

アドが己のツルギを発動させた同時刻、世界中の強者、隠れていた実力者たちに、名状しがたい感情が疾った。遙か遠方から感じられる異質な気配。ツルギという物理法則から外れた能力を持つ騎士ですら、戦慄を隠せぬ巨大な力の波動。その気配が生じたのは、おそらく十秒未満。歴戦の騎士たちは、臆げではあれど、これが一体何なのかを自らの魂で理解していた。そう、これは“単純な力”だ。理屈では説明の仕様がなない。“あれ”はあらゆる存在の規格に収まらぬナニカ。騎士やブレイド、世界を敵に回しても、その全てを呆気なく蹂躪し尽くせるほどの莫大な力。これを感じた騎士たちの反応は実に多様、ある者は自身より強い強者の気配に笑みを浮かべ、またある者はこの力の持ち主は世界の脅威となると確信し、他の者は嫉妬や尊敬、様々な感情を発露する。斬撃皇帝の気配の片鱗に反応した多くの騎士たち、彼らは知らない。実は、この力の持ち主がとんでもない稀代の大バカ者であるということに。

—————

天を貫かんばかりに、高く高く伸びた刃。地面に柄の延長線が刺さり、大地の恵みを

刀身の餌とする。周囲の土地が一瞬で干上がる、いや、それは表現が正しくない。”干上がる”のではなく”朽ち果てていく”。土は枯れて砂漠の砂のように粉塵のように変容を遂げた。少なくとも、この土地は数百年そこらは草木の生えぬ不毛の土地と成り果てるだろう。それに伴って地盤が急速に脆く崩れやすくなる。次に学園の校舎が地盤の突然の緩みにより、地面に”沈んで”いく。地盤沈下、脆くなった地盤の上の建築物が地に沈んでいく現象。沈んだ校舎はバキゴシャと轟音をたてて崩壊していく。たった数秒、それだけで甚大な被害が発生し始めた。けれど、破壊はこれだけでは留まらず現在進行形で広がっていく。これは攻撃で生じた損壊ですらない、ツルギの発動による被害のみ。

ゴゴゴオオオオオオ

宙を切り裂きかねないほどに天高く伸びた巨剣、このツルギの名こそ、”魔剣・斬撃皇帝”。未来に語り継がれる厄災、星喰らう魔剣。アド・エデムを最強の騎士として歴史に刻み込んだツルギ。そのツルギがエゼルの最後の一撃を迎え討つ。それは正しく

一振り。剣術、剣技の一切ない、ただの振り下ろし。それは、轟風と破壊の波動を学園から国内に放射し山を、川を、天を”両断”した。空に亀裂が刻まれ、蜃気楼のような歪みが見て取れる。膨大過ぎる物理的な力が、空間に軋みを創り出したのだ。エゼルの攻撃は余波の余波で粉微塵に吹き飛ばされ、エゼル本人は斬撃皇帝の振るわれた瞬間、大地にしがみつき何とかその場に留まれた。けれど、既にその身は満身創痍、立つことすら出来ず地面に這いつくばったまま、アド・エデムを睨みつける。

「これほどの、力を……………もしや、貴様がアルマニアの斬撃、皇帝？」

「……………うん……………まあ、正直な話、俺はそこまで大層な騎士じゃないんだけどさ」

倒れ伏したエゼルは、アド・エデムの言葉に苦笑する。己を負かした騎士の謙遜とも皮肉とも取れる発言に悔しさではなく、『これが自分を倒した男か』と妙な納得を味わう。

「確か、あんたは投獄されているという話だったか？」

「脱獄した。まあ、うん、色々あつてね」

「へえ、一体何があんたをそこまでさせたのか興味がある、けど俺は敗者だ。詮索は止めとく」

「そうしてくれると、ありがたいよ」

心底ほつとした面持ちのアドに、エゼルは一つだけ最も疑問に感じたことを問う。最後の一撃、巨大な壁をアドは回避しようと思えば出来たはずだ。なのに、それをしなかった、背後の後輩たちを庇って……

「最後の一撃、後ろの後輩たちを庇つたんだらう？あんたつていう騎士がわかってきたぜ。てめえのことなんか、おかまいなしに戦つて自分が一番ワリを食う。あんたほどの騎士が投獄されているのは、国のためか誰かのためか。どっちでもいい、聞きたいことはこれだけだ。自分のためではなく誰かのために戦い続ける、んなことをいつまで続けられるつもりだ……？」

愚か者と蔑むように、罵るようにエゼルはアド・エDEMへ問いかける。力強い視線は、アドの眼を貫き反らすことを許さない。これは問いかけるといふよりも問い詰めると言ったほうが正確か。それに対するアド・エDEMの答えとは……………

「無論、死ぬまで……………」

アド・エDEMは微塵も迷わなかった。誰かのために戦う、そして、それを死ぬまで貫き通すという言葉。問いをしたエゼルも、背後にいた三人の少女たちも圧倒する覚悟の返答。少女たちは、気高く立つ青年の背中をただ見つめていた。不転、退かぬという覚悟を生涯貫かんとする強烈な自我。そう、斬撃皇帝という規格外のツルギが彼の強さの根幹には存在しない。ただ、誰かのために力を使う尊く誇り高い、その魂。安い自己犠牲では断じてない、”死ぬまで”という言葉は己も他者も救おうとする断固たる意志。アリスタ、システム、キュアはアドを強く抱きしめる。恋する乙女たちは焦がれ恋した青年に触れていたかっただろう。されど、現実残酷にも彼女らとアドを引き離

す。無音かつ瞬時に飛んできた鎖があつという間にアドの首に絡みつき、釣りの要領で釣り上げられた。アドから引き剥がされた少女たちは鎖が引かれた方に向き直る。そこには、腕組みをしたメイドのマキナと、牢の番人であるジェイル、チェーンの子姉妹、最後にアルマニア国の女王リリーシャがいたのだ。

S i d e マキナ、ジェイル・チェーン、リリーシャ

ここで少し、時計の針を戻してみることにしよう。時はアド・エテムが斬撃皇帝を使う直前、ジェイル、チェーンとマキナの戦いが熾烈さを増した頃のこと。

マキナはツルギに意識を向け、刃を人差し指で即座になぞる。すると、ツルギの形状が変形していく。直剣型のツルギが、小型のナイフいやクナイに形を変える。サイズが小さくなり、こういうのも何だが、ちっぽけな武器となってしまった。しかし、ジェイ

ル、チェーンの子は欠片ほどの油断も見せてはいない。空中に構成された鎖の足場をサーカスの空中ブランコのように飛び回る。相手の本気を感じたジェイルとチェーンはほぼ同時にマキナの頭部に鎖を放つ。腕のしなり、腰の回転、騎士という常人を越えた腕力から撃たれた鎖、そんな脅威の前にマキナは即座に姿を消失させる。残像すら残さぬ目視不能の俊足、片手に構えたクナイを手に、マキナはジェイルの背後に出現する。空間転移とさえ思いかねない超速度歩法。クナイを振りかぶるマキナに対応するため、ジェイルとチェーンは鎖を引き絞って鎖の監獄を狭める。極限の害意が激突する戦場、もはや彼女たちは止まらないだろう。もし、彼女らを止めることが出来るとすれば、この争いの原因でもある斬撃皇帝アド・エデムか……

「それまで!!」

このアルマニア国の女王、リリーシャ・アルマニア・ブリエスタしかありえない。

途端、ジェイル、チェーン、マキナたち全員の感覚器官に狂いが生じる。視覚に歪み、聴覚に異音、嗅覚の鈍化、触覚の異常、平衡感覚の揺らぎ、様々な感覚機能の狂いに三人は静かに跪く。マキナがツルギの顕現を解くと、ジェイル、チェーンの両名も鎖の顕

現を解除する。戦闘は終わり、そこに威厳を以て登場したのは彼女たちの王であるリリースャだった。

「双方、今がどういう状況か、知った上での愚行かしら？揃いも揃って、何をしているの。マキナ、チエーン、ジェイル。アドを放って戦闘をしている場合ではないでしょうに」

「申し訳ございません、リリースャ様。今回の処分は如何様にも」

「ごめんなさい、リリースャ様」

マキナは跪いたまま、リリースャに頭を下げる。チエーン、ジェイルたち双子も揃って謝罪をした。リリースャとしては、マキナの行動、ジェイルたち双子の王命無視など詰問したいことが山ほどあったが、野放しで彷徨っている事態を解決すべく三人を連れてアドを捕獲しに行こうとした、その瞬間……………

大地が朽ちた、時間の流れを一気に浴びたかのように若草、芝生や雑草ですら枯れ落ちていく。柔らかな大地から養分が根こそぎ収獲された、いや収獲という表現では少し手ぬるい。

これはもはや、篡奪だ。圧倒的上位者からの無慈悲な搾取。暴君が民草に強いる法外な重税。土から栄養が消え、土は砂漠の砂粒ほどになってしまった。同時に不安定になった砂の上にある校舎や建物が砂礫に沈んでいく。枯れた大地が人の建てたモノを呑み込んでいく様は見ている者に根源的な本能的な恐怖を与えた。異常現象は数秒程度で終了するのだが、この現象が起きたと同時にこの場の全員は一斉に駆ける。この現象を彼女らは知っている、誰が起こしたのかも知っている。

けれど、何故にこの現象を起こしたのかわからない。思考を続けるも答えは出ないまま。天高く伸びた魔剣がこの事態の犯人を明確に示している。その巨剣は空に向かつて振るわれた、暴風が発生し、竜巻が弊害として顕れて建物を校舎を付近の街に襲来する。斬撃皇帝が振るわれた、この事態を止めるために、四人の女性たちは土の荒廃具合がより酷い方向へ進みアドを発見した。三人の一年少女たちが抱きついているようにだが……それどころではない。

「ジェイル、チェーン！アドを捕獲なさい！！」

「うん！！」

双子の鎖がアドを捕らえようと宙を舞った。銀色の光の軌跡がアドの首に絡みつく。後はそのまま、一本釣り。捕獲されたアドはリリーシャたちの中央に座らせられる。

「…………お姉…………さま」

「ええ、アリスタ。よくぞ、ここまで…………と言っておきましようか。二年、三年を倒してこの場に辿りついた、とても誇らしい。だけど、この事態はどういうこと？」

「それは、」

「この話は後で纏めることにしましょう、先にすべきことを済ませるわ。此度の決闘祭の勝利学年は、一年。貴方たちの率いる学年の勝利よ」

「ええええ!!」

「なんやこの急展開! あんちゃんが助けてくれた思ったら、とっ捕まっておるし。いつの間になら、うちらが勝ってるってわけわからん!」

「これって実は全部が夢、なんてことはないよね? 僕らの目が覚めれば決闘祭はまだ始まる前ってことは……」

突然の勝利宣言を聞いて、動転する一年少女たち。その中でも一人冷静なアリスタはリリーシャから目をそらさない。黙してリリーシャを見つめ続けた。

「先ほど、二年の大将であるミコト、三年の大將カイルが相討つたと報告がありました。二年はこれで全滅、三年はチエーンとジェイルが残っているけど、アドの護送で王宮に行くから三年で戦闘可能な生徒はゼロ。一年で最後に残ったのは貴方たちよ。ゆえに決闘祭の優勝学年は一年生、貴方たちの勝ちよ。後日、王宮に来なさい、相応であれば一年生全体の要求と、貴方たちの求む一つの願いに応えましょう」

「……それより、なんでアドが連れて行かれるの？……アドの収監はアドの意思によるモノで、アドが出ることを望めば、出ることは許されるはず……」

普段は喋ることすら珍しいアリスタが、持てる全ての言葉を使ってリリーシャにアドを連行する理由を聞く。自分の妹の必死の問いかけにリリーシャは感情を抑え冷静を装ってアリスタへ答えを返した。

「今回の決闘祭でアドが牢獄から出ることだけなら問題はないわ、けれど無断となれば話は違う。許可を得た上で牢獄から出るなら釈放となるけど無断なら脱走としかありません。前回のSSS級ブレイドの討伐には恩赦が出せたけど、今回はどうにもならない。そして、斬撃皇帝の使用。これが一番の罪状です！学園を中心に都心の大地や草木が枯れている、畜産や農業にとっては甚大な痛手よ。だから、アド・エデムの収監申請による一時拘留を破却し、アドを正式に永劫牢獄への終身禁固刑とします！」

「そんない！」

アリスタたちは一斉にアドへ近づこうと足を一步踏み出し、すぐさま凍りついた。チエーンとジェイルの禍々しい殺気、マキナの鬼気迫る闘気、リリーシャの有無を言わ

せぬ王としてのオーラ。それが三人の少女たちの足を封じる。彼女たちは再度、アド・エデムを救うことに手が届かなかった。リリーシヤたちが去って、取り残された少女たちは大粒の涙を流し、敗北の苦味を嘔み締める。枯れた大地に悲しみの雫が染み込み、涙が枯れた後に少女たちはもう一度立ち上がった。

”もう、繰り返してたまるものか”

二回、アド・エデムが連れて行かれる場面を、指をくわえて見ることしか出来なかった。弱い己たちと無情な世界への涙は流し終わった。アリスタ、システム、キュアの三人は後日アド・エデムとの面会許可をリリーシヤに望む。こうして、三人は決闘祭で彼女たちは今の自分に来ること出来ないこと、自己の限界を見極めた。自分たちが恋する青年の安らぎのため、少女らは互いに切磋琢磨しまた一步、強き騎士への道程を進みゆくのであった。

Side チェーン、ジェイル

捕獲したアドについた首の鎖がギシギシと絞まる。アドは苦笑した様に微笑み、首元の鎖にタツプするが、鎖が緩む様子は一切ない。では、チェーンとジェイルは怒っているのかと言えば、嬉しげにニコニコと笑い上機嫌そうに足取りも軽そうだ。首に巻きついた鎖を見て、さらに笑みを深めている。双子たちは脱獄したことには不満げだったが、アドが終身刑となったことによる歡喜に不満が塗りつぶされ、喜びに打ち震えていたのだ。リリーシャとマキナは決闘祭の終了を告げ、諸々の後片付けをするために一旦別れ、ジェイルたちはアドを牢獄に連行していた。永久にアドを縛り続けていられる、そう考えると鎖の締め付けが強くなり、口角が緩んでしまう。アドの顔色もそれに応じて悪くなる一方。三途の川、一歩手前というところか。

「アド。もう大丈夫、絶対に離れないからね……ずっとずうーつと一緒だから。一生逃がさないから、アナタが死ぬまで死んでも死んだ後もその先、生まれ変わったのだとしても」私「が捕らえ続けるから。……大好きだよ、」アド・エデム」

首に絡みつく鎖をジェイルとチェーンの手がゆっくりと穏やかに撫でる。その仕草は獲物を捕らえた狩人の様にも、恋人と手を繋いだ女性の様にも見えた。なんにしろう、首に鎖がついたアドの右手にはジェイル、左手にはチェーンが抱きつきながら、満面の笑みで牢獄に向かう。それにしても、鎖が無ければ恋人に見えると思うのは野暮なのだろうか？

S i d e O u t

—————

ついでに、斬撃皇帝の影響でアルマニア国の首都アルマニアは、土壤に深刻なダメージを受け、農業、畜産といった産業が軒並み崩れることになった。だが、土地から恵みが出ないのであれば、土地を使わない産業へと改革を行えばよいと、リリーシャ女王は

決断。ツルギの研究や剣結晶の調査。科学技術への挑戦。機械工学に国家を挙げて熱心に取り組んだ。当時、アリストタ第二王女の親友でもあったシステム殿の科学技術もあつてか、アルマニア国は科学、機械工学の分野で世界を席巻するほどの技術大国として大きく成長を遂げる。斬撃皇帝の影響で失業した人々もその多くが救済され、リリーシャ女王は賢王として後世に永く永く語り継がれた。

—————

S i d e アド・エデム

「無論、死ぬまで」

……………うん、感無量です。人生で一度は言ってみたい台詞が言えたんだ。決闘祭に来てホントによかったー!! まあ、思ったより地面がエライことになってるけど、

気にしない方向で。大丈夫、大丈夫。こんなファンタジーな世界なんだから、地面を元に戻すくらいなんとかなるでしょ。それより、後輩たちの抱きしめを一瞬でも長く楽しまなければ。えへへ、みんな柔らかい。いいのかなあ、こんなにも幸せで、そのうちにしわ寄せでトンデモない不幸が来ないよねえ？考えすぎかな、アツハハハハ、グエツ !!

突然、視界がブラックアウト。首に急激な負荷がかかったと感じた瞬間、フワツと体が宙へ放り出された。うん、首からゴキつとか嫌な音がしたのだが、気のせい気のせい。そして、意識を取り戻したと思ったら、ジェイル、チェーンにマキナ先輩、リリー先輩が見せる幻なのかな。いや、首を現在進行形で締めている鎖の冷たさが『これは現実だ』とシャウトしている。なんだか、リリー先輩とアリスちゃんの話をしているっばいけど、酸欠のせいかな。会話が頭に入ってこない。ジェイル、チェーン、少しでもいいから鎖緩めて。と考えている間に話が終わって、リリー先輩とマキナ先輩、ジェイルたちは王宮に向かう。途中、リリー先輩たちは別れ、ジェイルとチェーンたちだけになる。首の鎖に締め付けが秒ごとに増し増しで強くなるので意識が消えそう、鎖をタップしてギブアップを示せどジェイルたちは気がついていないようだ。もう、ダメ

……。とにかく、意識が消える前に、脱獄は頼まれても二度としないと誓いました、マール。

Side Out

Other Story 大地母神教

アルマニア国に住まう大地母神教の教徒が、記した書状は大地母神教を大きく動かした。大地の恵みを幸福の源とし、神の祝福とする大地母神教は、ツルギよりもアームの持ち主を重要視していた。アームの能力は、総じて土地を耕したり土壌の回復。他にも汚れや汚染の浄化、怪我の治療など、牧歌的で生活の中で有用なモノが多い。平和な時代ならこの力は喜ばれたろうが、現代はブレイドという怪物との戦乱に明け暮れていた。ゆえにアームというモノは、ツルギよりも存在を軽視されてきた。騎士の中でアーム

ムを使う者は基本的に非常に少ないという現状。そうした意識の改善、戦闘を避け穏やかに生活をするという教義に基づき、大地母神教は成立している。いちおう、アームにも攻撃に転用出来る能力は存在するのだが、大地母神教は専守防衛、積極的な戦闘は行わない宗教だった。今までは。決闘祭が終わって一週間後。アルマニア国に大地母神教から、直訴状が送られた。その内容とは、『斬撃皇帝アド・エデムの危険性を再認識した。エルフの住まう大森林にて行われる裁判に参られよ』とのことだった。直訴状には、大地母神教を国教とするリーフ連邦の国璽が押されていたのである。これを聞きつけた連合国はリーフ連邦に行われる裁判に参加する意を表明、同様に剣神教も参加することを宣言した。

これより、起こるは斬撃皇帝の罪を裁くという名目の元に行われる醜悪にして無様な権力争い。熾烈な頭脳戦、錯綜する思惑、裏切り。想像を越える裁判の末、最後に笑うのは、アルマニアか、連合国か、リーフ連邦の大地母神教か、それとも剣神教か。

宗教争乱

かくて賽は投げられた

法律とは、社会に敷かれたルールであり、それから逸脱した者は裁かれ罰せられる。古今東西、法律には人、権力、社会の意思が介入してきた。もちろん、全てが、そのようなわけではない。正義に従って法律による裁きが執行されたものもあるが、そういった事例は100%ではない。権力や利益が絡めば、司法、正義は容易く歪められてしまう。正義とは定義不可能な存在、個々人の価値観が違うのだから正義という価値観に同一のものが無いというのは至極当然な話。だが、それを踏まえた上で法律とは、実体なき正義の指標となるものことなのだ。

法律が正義なのではない、正義とは人を救うということだ。そして、正しさだけが人を救うわけではない。時として正しさは、力なき者を傷つけ搾取することにもなるだろう。正義と正しさはイコールではないのだということも多くの人々は知らない。悪の反対は正義だと誰かが言った、ならば正義の反対は？この疑問に対する答えを人類は未

来永劫、出すことはないだろう。それでも、敢えて言葉にするならば、正義の反対は別の正義なのではないか……

一つ一つは正しいことであろうと、それが重なり組み合わさってしまえば誤りが生じる。正義という概念は、人類には速過ぎた理想なのかもしれない。具体例として引き合に出すのは、宗教についてだ。宗教とは、苦しむ人々の救済のために生み出された考え。しかし、歴史を紐解いていくと宗教が引き金となり、大きな争いや戦いが勃発したケースが後を絶たない。価値観の相違、正しさは自分たちにある、だから相手は正しくない。支離滅裂な思考、正しさを正義を求めたことによつて出てきた間違い。果たして、最も罪深いのは何なのか？

これより語られる物語は、正義という幻想に酔った者たちの茶番劇。正義、政治、権力、罪、罰、リーフ連邦と呼ばれる大森林の中にある国を舞台に行われる斬撃皇帝の裁判、今、多くの要素が絡み合う究極の三文芝居が始まる。幕が上がる前に、これだけは肝に命じていただきたい。何度も言うようだが、斬撃皇帝の物語は英雄譚ではない。結

局、これは単なる喜劇に過ぎないのだ。

宗教争乱編・開幕

S i d e アルマニア王国

決闘祭が終わってから、数日が経過した。学園付近にある市中の混乱は日に日に増す一方、アルマニア王国、首都アルマニアの一角で突然起きた地盤沈下、壊滅的な土壌枯渇。アド・エデムが発動させた斬撃皇帝の代償として土地が枯れ、市街地は混乱に包まれた。王宮内の文官（政治家）、近衛騎士たちは、この災害に等しい被害の処理や復興計画の作業に追われていた。街の住民たちに死傷者はいないかを、戸籍を確認する作業や、瓦礫の山となった住居などの片付け。各国から山ほど送られてきた、こちらの被害や現状を探ろうとする書状の数々。土に関係する職業は軒並み、大きな被害を受けている。斬撃皇帝の発動によって、アルマニア王国は甚大な被害を被ってしまう。けれど、

斬撃皇帝の発動時間が僅かだったことが幸いしたのか、被害は学園から半径5キロ弱くらいに及んでおり、首都のアルマニア全体にまでは広がっていない。それに王宮の迅速な対処や被害を受けた人々に対する支援のおかげで、首都アルマニアは復興を始めようとしていた。

——王宮内、リリーシャの執務室——

カリカリ、ポン。カリカリカリカリ、ポンポン。

この執務室の主人、リリーシャは机に向かって座り、山積みされた書類をひたすら書き上げ捺印し続ける。ここ数日間、満身に寝ていないため、リリーシャは眼を閉じたり開いたりを繰り返しながら、重要書類を書き綴っていた。アド・エデムの斬撃皇帝発動で一番ワリを食った人物は、リリーシャを置いて他にはいないだろう。復興事業の検討、支援状況の確認、各国への通達、リリーシャにしか出来ない特別な仕事のせいで、彼女は疲れ気味だった。人理を越えた騎士に多大な疲労を与えたのだ、その作業の量はあり得ない数であると認識してもらいたい。

「私、今まで政務はある程度こなしてきたけど、ここまで忙しくなったのって初めてよ。やっぱり、政務や書類仕事が容量よくできる人材を育てていけないと………マキナ、紅茶をちょうだい」

「はい、温度は熱め、砂糖二つでよろしいですか？」

「ええ、お願い」

リリーシヤの側に侍っていたマキナが濃い目に入れた紅茶を、音をたてずにソーサーと共に置く。置かれた紅茶を流麗な所作で口にした。マキナは、ほっと一息ついたリリーシヤの机に容赦なく追加の書類の山をポンと乗せる。置かれた山積みの書類を目にしたリリーシヤは、観念したように紅茶を端に置いて本来の仕事に戻った。決闘祭の最後に突然、登場し場を荒らすだけ荒らして捕獲されたアド・エテム。彼が斬撃皇帝を発動させたことで、大地が極端に脆弱化。斬撃皇帝発動の中心であるアルマニア国立学園は、学園を再建設するためしばらく休校となってしまった。学園付近の城下町、学園から大して離れていない王宮も相応の被害を出し、騎士団とギルドのメンバーたちが

協力して街の再建に力を入れている。そうした中で、アルマニア王国の女王であるリリーシャは首都の荒廃した大地をどうするかで頭を悩ませていた。

「アドの斬撃皇帝を発動させた大地は確か戻ることにはないのよね。ねえ、マキナ。いつそ、どこかから土や土砂を大量に運んでくるというのは、どうかしら？」

「運ぶ際の費用が掛かりすぎることには眼を瞑れば、実行可能ですね。大地母神教の神官いわく彼らが百年間、祈祷やアームを発動させ続ければ、大地は元に戻るかもしれないと言っていました。彼らに任せるとするのは、如何でしょう？」

マキナは主人をからかうようにクスクスと笑いながら、冷めた紅茶を下げ、新しく入れ直した。

「冗談でも面白くないわよ、マキナ。大地母神教の信者とツルギを使う騎士の確執はわかっているでしょう？ 相手が敵愾心を燃やしているから、こちらも敵意を持つてしまふ。負の連鎖は留まるどころを知らないわ。………面倒ね、我が国は宗教の自由を標榜している。だから、大地母神教が国内で布教活動することに口出しできない。しか

し、彼らは信者たちを通して政治にちよつかいを入れてくる。うちみたいな多国籍国家は、多くの異なる人種、種族、文化が入り乱れているから、他国の影響を受けやすい。リーフ連邦の裁判の件、どうなっているの？」

「ご覧になられますか？リーフ連邦から連日、アド・エデムを裁判に召喚するという旨の文書が送りつけられています。大地母神教を信仰する国民たちが、国に対し反感を持ち始めていると方々に散らした密偵から連絡されました。更に街では、以前まで英雄扱いされていた斬撃皇帝が、悪逆非道の魔王へ早変わりです。周辺諸国からの圧力も、無視できないほどに……」

「わかったわ。マキナ、リーフ連邦、周辺諸国へ通達を出してちょうだい。」現在、わが国では斬撃皇帝が出した被害の処理で忙しい。ゆえに一週間の時間を頂く。一週間後、リーフ連邦の裁判へ斬撃皇帝アド・エデムを出頭させる」とね

「一週間ですか、街や王宮の機能を修復させるのであれば、一月程度は時間を要求できませんか？」

「ええ、渡した当日の夕刻にきつちりと終わらせたご様子です。それと、こちらの書類をどうぞ。アリスタ様の友人が作る剣結晶を用いた工業品を被害地の新たな産業にしてはどうかと意見を頂きました」

「工業か……今まで農業をやっていた市民がいきなり、工業をしたがるかしら？まあ、その辺はゆつくり考えていきましょう。アリスタは今、どこにいるの？」

「永劫牢獄でアド・エデムに面会しておられます。ご友人方と一緒に」

「……アドのところ？……ズルいズルい！私だってアドに会いたいのにく、最近ずっと会ってないのよ。今すぐ私も行く！」

「この山積みの書類を片付けてからにしてください！」

部屋の出入り口前を陣取ったマキナ、それを突破しようと試みるリリーシャ。この二人の壮絶？な戦いは引き分けとなり、互いに疲労を深めるだけに終止したらしい。ちなみに仲裁に入ろうとして、コテンパンに打ちのめされた近衛騎士たちは『やはり

……天才か……』とボロボロの体でマキナとリリーシャを称賛したという。

——永劫縛鎖の禁断牢獄——

斬撃皇帝アド・エデムを収監している牢獄内。首都アルマニアが混乱に陥っている中で、アド・エデムの生活に変化が訪れたかと言えば、まったく変化は無い。以前と同様に牢獄内で、幽閉されて日々を送っている。変わったことといえば、彼の処罰が終身刑になったことと面会にくる人が増えたことくらいだ。……さらつと、流せるような内容では無いのだが、終身刑についてアド・エデムは気にはしていないらしい。日がな一日ぐーたらすることを至上とする彼（バカ）は現在、裁判に呼び出されているという事実を知らない。リリーシャがアドの面会及び説教をしに来た時、リーフ連邦から召喚申請が来ていると説明していたのだが、説教で疲労困憊していたアドは、その話を聞き逃してしまったのだ。結果、アドは自分が宗教と国家、様々な思惑が交わった裁判の中心にいると認識していないのである。こうして、事態は本人（アド・エデム）が認知せぬまま、着実に進行し続ける。

「ヤッホー!!おじやまするでー」

「ちよつと、シス。もう少し静かにしたほうがいいよ、僕たちこれでも面会をしにきてるんだから。すみません、ジェルさん、チェーンさん」

「……………」

「いらつしやーい」

薄暗いジメジメとした監獄の空気を吹き飛ばすような明るい声で来訪を知らせたシステム、そして後からシステムを嗜めるキュア、無言で牢獄内に入ったアリスタ。この三人を笑顔で歓迎するジェルと、チェーン。牢獄内は以前と比べて、少し賑やかになったようだ。……………王家の関係者以外の面会を禁じている永劫牢獄に、何故システムとキュアが入れるようになったのか。決闘祭の顛末を知っている方ならわかると思うが、一年の大将であるアリスタは、一年の勝利した際の褒賞として永劫牢獄の面会権を姉リリーシャに求めたのだ。いくら、アリスタの友人とはいえ他国の者に王家の権利の一つを預けることに、リリーシャは良い顔をしなかった。けれど、妹の初めてとも

言える我が儘、リリーシャはアド・エデムの面会のみに権利を限定することでシステムとキュアの、永劫牢獄での面会権利を許可したのである。

「システムちゃんと、キュアちゃんが来るようになって、ここも大分賑やかになったね」

「ほんとにね。皆、来てくれてありがとう」

ジェイルと、チエーンはシステムとキュアを気に入ったのか、にこやかな態度で新たな面会者を迎え入れる。そして、ジェイルたち二人の鎖で縛られたアドも、システム、キュアを歓迎しているようだ。そんな中、この牢獄の収監者アド・エデムも通常運転で少女たちと談笑していた。

「まさか、決闘祭で優勝して要求したのが、俺の面会権つて。本当に良かったの？もつと、良いものが頼めたんじゃないかな？」

「……………」

アリスタがアドの意見に対し首を横に振って否定を示す。アリスタの心情に共感したのか、キュアとシステムも首を横に振った。彼女たちは自分の恩人にして特別な感情を持つている青年（アド）に会えるようになったのだ。彼女たちは後悔などしていないが、アドはそれに気がついていないみたいだ。

「うちらはあんちゃんに会いたくて来たんやで、せつかく来てくれた後輩ほつといて何縛られとんねん。何かこう、歓迎してくれへんの？」

「鎖で縛られてる先輩、前にして中々無茶振りするね。システムちゃん」

「へへへ、ダメだよ。アドがもう二度と逃げないように封じておくのが、私たちのお仕事だから。アドってば、牢獄から勝手に脱走しちゃうんだから」

「ジェイルの言う通りだよ。まったく、落ち着きがないんだから」

「ねえ、アリスタ。脱走って、落ち着きがないの一言で済ませていいものかなあ？」

「…………たぶん違うと思う」

「あ、やっぱり」

アリスタとキュアは、ジエイルとチエーンの何処かズレた思考に戸惑いつつも、とりあえずスルーしておくことに決めておいた。迂闊に突けば、面倒な事件になると直感したのかスルー決め込むことにしたらしい。ほっこりとする空気の中で楽しそうに話している女性陣たち、彼女らの会話に時折参加するアド・エデム。薄暗い牢獄の中は、何処か優しく暖かい雰囲気に含まれていた。

「そんでな、今は壊れてもーた学園の復旧が済むまでは休校っちゅうことになつとんで。まあ、専門の騎士が取り組みば、二、三ヶ月くらいで元通りやろ」

「なるほど……………ん？　そういえば、俺が壊した校舎を直す費用って、どうなってるの？」

「そうだね、決闘祭で損壊した校舎とかって壊した人が支払うってことになってるけど、

アドには牢獄の中で払おうにも払えないし。……アリスタ、校舎の復旧費はどうしているの?」

「……………その費用なら、私の個人資産から出した」

え? アドの顔が凍りついたように固まる。思考回路が軒並み停止し、今までのアットホームで明るい空気が、氷河期並みに冷え込んでいく気がした。それもそのはず、自分がノリで発動させた斬撃皇帝の被害の修理費を可愛い後輩に払わせていたのである。後輩たちに格好つけるために発動させた斬撃皇帝が、自分の威厳を木っ端微塵にしたと気づいて、魂が抜けたように落ち込んだ。そんな、落ち込むアドに気づかず、女性陣たちの会話は更に盛り上がっていた。

「あー、なるほど。そういや、アリスタは王族の執務を結構やってたからな。あれくらいなら、余裕で払えても、おかしくないか。……………って、何か一言言ってくれや!! 一言言ってくれれば、ウチだって、なんぼでも金を出すんに!」

「そうだよ、一人だけ抜け駆けして。僕らだって、アドにいののために何かしたかったの

に。……そういえば、学園近くにある街の一角も被害出てたよね。……アリスタってば、もしかしてそれも？」

「うん、それも」

アリスタのあつさりとした回答を聞いて、システム、キュアがムツとする。二人は、互いの顔を見合つてニツコリと微笑んだ。その時、アリスタは嫌な予感を察知した。システムのしなやかな手が小柄なアリスタの身長に見合わない大ききの胸へ音も無く動く。同時にキュアも、アリスタの細い腰に抱きつこうと忍び寄る。二人の不埒者から、身を守るべくアリスタは後ろに退がった。無表情であるから判断しにくいのが、好意を持つている男性の前で、同性の親友たちとはいえイタズラされることを疎んじたのだろう。こうして、少女たちの半分お遊び半分本気のじゃれあいがある火蓋を切った。

S i d e アド・エデム

おらあ、アド・エデムである。ただいま、収監中である。ついこの間までは監獄に拘留されているだけだったが、今や無期懲役の実刑判決。これで、ワンアウト。ノリで斬撃皇帝を発動させたばっかりに学園や街をぶっ壊してしまい、修理費などで借金まみれになったと思っていた。ツーアウト。ところが、その借金は無くなっていたのだ。心優しい後輩が代わりに払ってくれたおかげで……スリーアウト。チェンジ。俺、アド・エデムは幽閉されている男から、年下少女のヒモにジョブチェンジしました。

なんてこった……………

何やら、アリスたちやん、システムちゃん、キュアちゃんたちが百合百合しいことをやっているが、シヨックが強すぎて、それどころではない。嘘だろ？これまで相談事や困ったことがあれば、頼れる先輩をやっていたのに、いつの間にかヒモだよ、ヒモ。落差ばねえ……切実にタイムマシーンが欲しい。

「ずるい、アリス様つてば、アドのお世話しちゃうなんて。私たちだつて、アドのためなら、いくらでもお金出すのに」

「私も私も。だって、私たちお金ほとんど使わないもの。お金くらいでアドのお世話が出来るなら、すぐにでも出すのに〜」

「そうそう、それだけじゃなくてもっともっと、色々な面倒を見てあげるの。ごはん、お着替え、眠るのだって、どこかに行くのも、何かを見るのも、息をするのだって……全部ゼーんぶ面倒見てあげるの」

「チエーンと同感。アドの全てのお世話をしてあげたいね。アドの生きることの全てを私たちが面倒見てあげる。私たちがいなくちゃ生きていけないほどに。ずっと、ずっとずっと。考えただけでも、楽しくなるね。チエーン？」

「うん、すごい楽しみだね。お姉ちゃん」

少し現実逃避をしようとしている間に、後輩少女たちの中へジェイルと、チエーンも混ざっていった。まずい、このまま話が進行し続けられればトンデモないところに着地してしまう。

「みんな、話がおかしくなり始めてるよ。俺も、自分の面倒は自分でみれるからさ、この話はここでおしまい。あと、アリスタちゃん。お金は後で絶対に返すから命に代えても返すから」

「……………別にいい。どうせ、余ってるから。それより、アドは自分を大事にして」

ポツリポツリと話すことが苦手なアリスタちゃんが、自分の意見をはつきり言っていることには感動しちゃう。それも、俺を案じてくれる言葉だ。一、二もなく、頷いてしまいたいが、ここは引けない、引いちゃいけない。なんせ、俺がクズ男になるかの瀬戸際だからね。

「それでも、きつちりお金は返すから。アリスタちゃん、先輩の言うことはちゃんと聞きなさい」

「……………」

「なーんか、あんちゃん。ごつつ必死やなあ。ウチらのはあんちゃんに恩が溜まつとるん

や。これくらいでも、まだ足りひんわ」

「そうだよ、僕らがここに居られるのはアドにいいのおかげ。ちゃんと恩を返したいんだ」

おう、俺の後輩たちマジ天使。いや、恩って言っても、そこまで大層なことしてないはずなんだけど。うーん、やっぱり後輩からお金を借りっぱなしってのも格好がつかないしなあ。ここはビシツと

「三人ともく、面会時間終わりだよ」

「……………」

コクリ

アリスたちちゃんが静かに頷いたのを見たシステムちゃん、キュアちゃんは、これ以上この場にいられないと察したようだ。

「え!? もうかいな。思ってたより、ずっと短かったわ。しゃーなし、あんちゃん。また来る

から、楽しみにしててや」

「アドにい、また来るから、その時こうやって話をしようね」

「うん、みんなと話が出来てよかったよ。また、来てね」

バイバイ、名残り惜しげな顔の後輩たちを静かに見送る。………やべっ………ピシツと言うタイミング逃したー!??!? やってしまった………仕方ない。次回にみんなと会う時に言うことにしよう。いや、今でしょ!と行きたいところだが、今度脱走したら俺のクビがフライ・アウェイしかねない。

「アド、楽しかった?」

「アド、嬉しかった?」

「ん? ああ、それはもちろん。こんなに後輩たちに慕われているってことは喜ばしいかな。うん、今度面会に来てもらった時にはちゃんとお金を返すって言うっておこう」

………」

最後に小さく付け足した言葉は、ジェイルやチェーンでも、アリスたちにもない自分自身に向けて呟かれたものだ。鎖に縛られている男がヒモって、洒落にしても笑えないし。

「そっか、それならよかつた。アドが望むならなんでも用意してあげるね。………それが、どんな物でもどんな者でも」

「欲しい物、欲しい者。何でもあげる、アドが願うなら何でも叶えるから。だから、ねえ、アド」

ジェイルとチェーンは一拍置いて、斬撃皇帝の担い手たる青年に宣言する。

「大好きだよ」

見惚れてしまいそうな麗しい笑顔と焦点の合っていない暗い深淵の瞳が青年に向け

られる。ジェイルとチェーンの言葉を聞いて、アドはとりあえず笑っておくことにした。アドは、ここで下手な言葉を返すと、バッドエンド直行になるということを本能的に感じ取ったのだろうか。無意識的な、条件反射の行動。ひよつとすると思考が一切関係していない、これらの行動は、実は生物の本能が刹那に選択する最善手なのかもしれない。

Side Out

Side 剣神教

斬撃皇帝こと、アド・エデムがリーフ連邦の裁判に召喚されたという情報を入力した剣神教の幹部たちは、その裁判に参加する意思を表明していた。大地母神教を国教とするリーフ連邦。そこで開かれるアド・エデムを裁く裁判。アド・エデムの身柄もとい斬撃皇帝という規格外のツルギを狙っていた剣神教にとって、これほどに好都合な展開が

訪れるなど予想だにしなかったろう。しかし、劍神教と大地母神教は不倶戴天の宗教。互いに互いの価値観を受け止められず、両方が相手を敵視していた。つまり、リーフ連邦の裁判に参加するということは、敵地に乗り込むのと同義。ゆえに劍神教では強力なツルギを持つ騎士たちを厳選して裁判に赴くことを決定した。裁判に向かう騎士たちが決まった今、彼らは出発前最後の会合を開いている。

「それでは、この会合の進行を務める劍神教、教祖ソードス・レイピア・エイルの名の下に、最終決定を宣言いたします。リーフ連邦で行われる裁判に我らは赴き、最強のツルギ、”斬撃皇帝”を奪還するのです!!リーフ連邦は、長年劍神教徒を敵視する大地母神教の本拠地。連れていく数人の幹部と戦鬪力の高い騎士の皆さんは、妙日中にリーフ連邦へ行くための準備を整え私と共に、アルマニアから出立します」

長いテーブルの上座には一人の青年が座ったまま、落ち着いた声で下座に座る自分より年が上の男女たちへ通達する。劍神教の教祖であるソードスより年が上な面々は、他にもいる。しかし、劍神教では年功序列は存在しない。ツルギの強さこそ、神が与えた祝福の寡多。ゆえに劍神教は、個人の性質や嗜好よりツルギの強力をこそ尊ぶ。ツルギこそ、神が与えた至高の輝き。そのように信じて憚らないからこそ、アームに重きを

置く大地母神教の教義を断固として認めないのだ。ソードスが話を終えた時、一人の女性の細い腕が高く上げられる。

「……………サリーさん。何か発言したいことでも？」

ソードスは整った面貌を僅かに歪め、手を挙げたサリーと言う女性に発言を促した。

「なんじゃ、ソードス。そのような苦虫をたらふく食したような顔しおって。仮にも自分の”乳母”であった乙女にする態度ではなからう。ちつとは愛想よくせんか」

手を挙げた女性は幼かった。身長や体つきなどそこらの幼児とまったく変わらないだろうし、雰囲気や顔からは女性らしさより幼いという印象を強く持たせる。しかし、この会合に参加していた者たちは知っていた。この場にいる誰よりも、この小柄な女性が年長者だと言うことに。

「ご自身の年齢を鑑みて発言してください。この中にいる全員で貴方が最年長者ではありませんか。それを乙女などと、ご自重ください」

「女性に年齢の話をするなど、ぬしもいい性格するようになったではないか。おぬしもいい年齢じゃ、小姑みたくグチグチ言いたくはないが、その性格直さんとモテンぞ」

「モテる、モテないの話は関係ないでしょう。まだまだ私は未熟の身、女性と関係を持つのは、剣神教が落ち着いてからにしますよ」

「知つとるか。女より仕事を優先する男は”早い”らしいぞ」

「早い……？それは……ああ。まったく、貴方という人は……そんな下世話な話をする人が乙女を自称するなんて世も末ですね。貴方が乳母をやっていたということが、我が生涯の唯一の汚点です」

「汚点じゃと、おぬしの最大の欠点と汚点は、腹の黒さだろうに。何でこんな子に育ってしまったんじやろうか」

「乳母の教育の賜物でしょう」

サリーの悪態に、すぐ皮肉を返したソードス。周囲は二人の口喧嘩を止める様子もなく、黙って諍いが終わるのを待つ。二人の頭が冷えたところで、口喧嘩は終了しソードスは周囲の教徒たちに会合の終わりを告げた。リーフ連邦へ行くための準備をする者、ソードスたちがいなくなった後の職務を代行しようとする者。ソードスとサリー以外の全員は会合に使われた部屋から慌ただしく出て行った。残された二人は、対面する形で座り直す。

「ソードス、おぬし先ほど世も末とか言っとたの」

「ええ。それが何か？」

「なに、おぬしも鋭いところを突くな、と思っただけじゃ。世も末？まさしく、そうであろう。ブレイドという人類いや生命の天敵がのさばっておる世界で、我々は何とか生存しておる。しかし、それが綱渡りであるということはおぬしも重々承知のはず。我々は早急に強力なツルギを持つ騎士を集めねばならん。ブレイドが存在するせいで、人類の

生存圏は大きく狭まったまま。ブレイドも年々強さを増していつておる。このままじゃと、人類はいずれ滅びを迎えるであろう。それが百年後か十年後か、わからんがのう」

「わかっていますよ、そのために我々剣神教は強力なツルギを持つ騎士を人類救済のため手にしなければなりません。アド・エDEM。彼のツルギはデメリットに目を瞑れば、間違ひなく最強と断言できます」

「ならば、確実に騎士アド・エDEMを我ら剣神教に納刀させねばならん。……………任せただ、我らが教祖どの」

「承りました、それにしても何時もこんな具合で話をしていただければ、貴方は素直に尊敬に値する人物なのですが」

ソードスは額に手を当て嘆息した。

「やかましいわい……………そういえば女剣派の騎士たちはどうなっておるんじや

「？」

ソードスの言葉に条件反射で反発したサリー。彼女はソードスに向かって声を荒げたが、彼が特に反応しないところをみると、仕方ないと言いたそうに口をつぐみ別の話へ移行する。

「女剣派？ああ、そういうえば、彼女らも裁判に参加するのではたっけ。問題ありませんよ、女性優位の思想を取り除けば、彼女らと我々は同じ教義を掲げています。女剣派も大地母神教とは折が悪い。味方ではないですが、敵になることもないでしょう」

そういうもんかろう？とサリーは首をかしげていたが、ソードスが部屋から出ていくと、リーフ連邦へ行く旅支度をするのと、もしもの時に備え鍛錬をするためにサリーも部屋から出て自分の部屋に戻っていった。

こうして剣神教は救済を願い、アド・エデムを手にするために動き出す。その願いが、信仰が正しいのだと、ひたすらに信じて。

独善に満ちた聖職者たちは自分たちが信じる救済を夢見て歩み続ける。

信じるということ

この世界には二大宗教とされるものがある、それは剣神教と大地母神教の二つのことだ。この両者は互いの教義を容認できず、たびたび小競り合いを引き起こしていた。両方とも、最初期はブレイドという人類の敵を撃退することに重きを置いた教えだったのだが、次第にアームとツルギ。どちらがより優れているのかという論争が発展したり、大地母神教が撃退から専守防衛に重きを置き始めたことなどがあって、剣神教と大地母神の二大宗教は決別を余儀なくされた。

大地母神教は、エルフが多く住むリーフ連邦を拠点に様々な国へ布教を始めた。剣神教も多くの国を回り、才と力あるツルギ使いを納刀（入信）させた。ツルギを使う騎士とアームを使う騎士のどちらが戦士として優れているのかと問われれば、ツルギを持つ騎士に軍配が上がる。ツルギは純粹に戦闘に特化した能力を持つ場合が多くブレイドと戦う騎士のほとんどはツルギ使いだ。一方、アームを使う騎士は純粹に戦闘に長けた能力である場合が非常に少ない。特定条件、地形などではツルギ使いに勝るとも劣らぬ

戦果を出すものの、一般的なアームの能力は生活や生産に優れていた。

ある時、剣神教の内部で分裂が起こる。女性騎士を中心とした一派が分裂、その分裂を機に剣神教から独立して生まれた一派を女剣派と呼んだ。女剣派は、騎士になるべきは女性であり男性騎士は戦わず優秀な女性騎士の子供をつくるためにあれ、とする教義を掲げていた。他にも女剣派は、女性の社会地位向上、男性騎士を戦場から退かせることを主な目的として活動している。しかし、男性騎士を戦場から退かせるという考えが剣神教には認められず、女剣派は剣神教と袂を別った。現在、ブレイドによって人類は大きな被害を受け危機的な状況にある。そんな時代で戦える騎士を女性のみ限定するという思想が受け入れられなかったのだ。これが平和な時代、もしくは騎士になれるのは女性だけということがあれば、女剣派は大きな支持を得ただろう。しかし、ブレイドによって人類の生存圏が限定されている時代で、そんな選り好みをする教義は認められるはずもない。結果、女剣派はギルドで細々とブレイドを討伐し、日々を暮らしている。

Side 女劍派

女劍派の騎士たちはアルマニア王国の近郊にある屋敷を拠点にして活動を行っている。朝一番、屋敷のパーティーでも出来そうな大広間の中、そこには多くの女性が跪き祈りを捧げている。その中にちらほら女性より少ないが男性も混ざって祈っていた。女劍派は清廉な女性こそツルギという規格外の武器を扱うに相応しいという独特な考えを持っている。彼女たちの中に混ざって祈っている男性は多くが元騎士。彼らは戦鬪で大怪我を負い戦えなくなつた者や戦場の恐怖に耐えられず逃亡した者たちが多い。女劍派は女性のための組織でもあるが、同時に騎士の道を捨てた男性の支援もしている。ついでに、女劍派は男性との交際を積極的に認めてはいるが、入ってくる多くの女性は男性に対しトラウマを持っていたり精神的な事情もあつて男性を敬遠している節があつた。

女剣派の信者たちは、多くが女性騎士である。彼女らは美しきとしなやかさを見せて、か弱さを欠片も見せない女性ばかり。そんな彼女らの前に立つ一人の女性は美しい顔を悲しげに歪め、大音声の宣言をしていた。

「……みんな、これより私たちは為さねばならないことを為しに行く。同行を許可された者は私たちと共に本日、リーフ連邦に発つ。残った者たちはこれまでと同じように過ごし待っていてくれ」

『はい!!!』

集められた多くの男女が大きく返答を返す。その声の先にいるのは女剣派の教祖である、エル・フォレスト・グリーン。そんな彼女の側近である数名の女性騎士たちは、大きな荷物を背負って待機していた。これより彼女らが行くのはリーフ連邦、大地母神教が国教とされる謂わば敵地。そんな場所に赴く女性たちの顔には不安や悲愴の陰りは一切ない。あるのは、ただ為すべきことを為すために進み続ける信仰厚い教徒としての覚悟だけ。

「みんな、リーフ連邦は大地母神教の本拠地だ。かなりの確率で危険が伴うだろう。それを承知でついて来てくれることに感謝の念を禁じえない。皆の覚悟に因應するため、今回のリーフ連邦で行われる裁判で我々の目的を遂行しよう」

「エル、あまり気を張りすぎないようにね。それは貴女の欠点だから」

「……マユ………まいったな。気を張っているつもりはなかったんだが。まだまだ未熟ということか。これからも修練あるのみだな」

「エルもマユも、難しく考えすぎだよ。もっとリラックスしていきな」

「君はリラックス、というか気を緩ませすぎだぞ、ウィーン。……今回の行動は私たちの信じる教えを貫くための聖戦だということを忘れないでくれよ」

青い髪をかきあげ、エルは周囲の女性たちへ改めて己らがリーフ連邦に向かう理由を論じた。

「わかっていると思うが、みんな。私たち女剣派が戒律に従って私たちは罪人に相応しい裁きを与えるため、リーフ連邦に向かう。人々へ横暴をふりかざす魔剣の生を許してはならない！……ゆえに我らが為すべきは、斬撃皇帝、アド・エデムの断罪である！これが正義である！」

『おおおおおおお!!!』

エルの言葉に集められた男女は熱狂する。正義を為すという明確な指標に魅せられた教徒たちは、これより旅立つ者たちを口々に褒め称え抱き合い激励を送った。若くして教祖に任じられたエルは、信者たちを一步離れた場所で穏やかに見守る。戦いに恐れを抱く男性も、男性に対し忌避感を持つ女性もこの瞬間だけは個人的な感情を呑み込んで志を同じくしている。普段は男女間でたびたび、いざこざが起こるといふのに火急の時を迎えることで信者たちは一致団結しようとしている。

「これなら、我々の目的を遂行出来るかもな」

「かもって？随分と弱気な発言じゃない。私たちの教祖をやり始めて貴女がそんなこと

を言うなんて初耳よ。これは明日に雨が降るかもしれないわね」

「茶化さないでくれ、マユ。今回の活動はいつものブレイド退治とはまた異なる困難さだ。裁判ということもあり敵は高度な策謀を張り巡らせる人間たちだからな。……それに私たちの立場はアド・エデムを裁くスタンスであるがゆえ、確実に剣神教と正面から対立するだろう」

「えー、なんでえ。あんな危険なツルギに価値なんてないでしょ？ いくら、威力が強いからって、被害がデカすぎて使い道なんてほとんどないし」

「ウィーンの言う通りだ。斬撃皇帝の欠点は威力という長所に勝る短所。すなわち、大地を枯れ果てさせるということにある。これではいくら威力があろうと使い道など皆無、しかし、ある想定でのみ斬撃皇帝は強く求められることがある。……何だか、分かるか？」

「……………SSSS級ブレイドの撃滅？」

「その通り。というより、あんな災害クラスのツルギの使い所なんて同じ災害クラスの敵を倒す以外に使うことなどないさ。……人を守るために大きな被害を出すツルギ、本末転倒としか言いようがないな。そして、何よりそんな危険なツルギを男性騎士が所有しているということが問題だ」

「ええ、男性は力を欲した末に傲慢と慢心に溺れる。謙虚さと清廉さを持つて行動が出来ないのよ。女性と大きく異なる部分ね。私たち女剣派は、いづれ、男性騎士の暴走が起これると剣神教に忠告してきた。なのに、剣神教は再三にわたる忠告を聞こうともしなかった」

マユの口から静かに語られる言葉には隠しきれないほどの怒りが滲み出ていた。

「ああ、皆。今回の裁判で斬撃皇帝を必ずや裁かなくてはならない。剣神教やアルマニア王家の妨害があるやもしれないが必ず成し遂げよう」

「ねえねえ、エル？それじゃあ、もしかすると剣神教と王家が手を組むかもしれないよ」

「充分にあり得る話ではある。だが、この二つの勢力の狙いはアド・エデムの身柄。最後まで協力することはないし、運が良ければ互いに足を引っばるやもしれん。あまり、気負うことはないさ」

「ふくん、あ、そうだ！いいこと考えたよ、私たちがリーフ連邦に行ったら大地母神教と組めばいいんだよ。アド・エデムの処刑を要求しているのは向こうも同じだし、協力出来ると思わない？」

「駄目だ」

ウィーンの快活な笑みと共に大胆なアイデアが提案された。しかし、そのアイデアを聞いたエルは顔をしかめてウィーンの家を却下する。

「アド・エデムの処刑に関して大地母神教と私たちは目的を同じくする。だが、大地母神教とは協力出来ん。協力をすれば確実にアド・エデムを処刑にすることが出来るが、私たちの立場は完全に無くなる。大地母神教はツルギを否定しアームを神聖視する宗教

だ。もし、協力をしたということが知れ渡れば多くの騎士たちが私たちとの関係を断つ。そうなれば女剣派は廃れ朽ちていくだろう」

「うええ〜」

エルの深刻な声色の説明に顔を青ざめてウィーンは肩を落とす。女剣派が潰えた未来を予想してしまったのか、その顔には憂鬱げな陰りが伺えた。

「味方の援軍なし、敵は増援の可能性あり。困難極まる状況だが、君たち、私たちならば出来る」

弱気になりかけ、士気が下がり始めていた雰囲気を祓うように女剣派の教祖、エルは信頼を込めた一言で周りにいた女性たちを勇気付けた。彼女らは自分たちの信じる教えの下に権謀術数が舞う戦場に赴く。

美しき女騎士たちの瞳は、まだ見ぬ戦場に向けられてた。

Side 大地母神教

木々の生い茂る森の中、木漏れ日が差し込み鬱蒼とした草木を照らし出していった。推定でも樹齢百年はするであろう木々が、この森には溢れるほどに立ち並ぶ。この場を見れば、ここは秘密の集落と考えるかもしれない。しかし、ここは村や集落ではない。れっきとした国なのだ。森の中に作られた特殊な国家、この場こそがエルフたちの暮らす“リーフ連邦”である。さて、ここで連邦と付いた国家の特徴について簡単に説明をしよう。連邦とは、二つ以上の国、もしくは州の併合し同一の主権を持った国家の名称。この説明から分かるようにリーフ連邦は単純な一国家ではない。大半のエルフの多くはそれぞれがそれぞれのコミュニティを形成しているケースが多い。つまり、リーフ連邦は遙かな昔にエルフたちが集まって出来た共同国家なのだ。

また、それが大地母神教の成立に深く関連している遠因でもある。エルフたちには、自身のコミュニティに独自の掟や、しきたりが定められており、それが原因でエルフたちは昔から争ってきた。しかし、同族であるエルフたちとの争い、他種族の森の資源を狙った侵攻、リーフ連邦の付近に出現する強力なブレイドたちの対処。数々の問題が積み重なっていくうちにリーフ連邦は国家という体を保つただけで必死なほど疲弊した。疲れ果てた国家と民草たち。そう、エルフたちは早急に心と思想を纏める必要があった。

幸いなことにエルフたちの多くは大地を尊ぶ民間信仰を信じていた。コミュニティ間で儀式や教義に細かな違いはあったが、それほど大きな違いもなく数年の歳月を経て大地母神教というリーフ連邦の国教が制定された。ただ一つ、誤算だったことがあるとすれば、大地母神教が想定していた以上に権力を持つてしまったことだろうか。初期は単なる思想統制のための一つの策だった宗教が発足して、たった二年で国民たちから強い支持を受け連邦の議会より強い権力を手にしてしまったのだ。今や大地母神教は政治に深く関わっており、政策を一つ発布するのにも大地母神教の確認と許可が必要なほ

ど。また、大地母神教の教義には大地を重んじる他に、子供を産み育てる女性を優遇していることが多々、見受けられる。そのせいもあってか、現在のリーフ連邦では女尊男卑の風潮が広まりつつあった。

ここまでの説明を統括すると、リーフ連邦では議会といった政治的役職より大地母神教の神官といった宗教家の権力のほうが強まっている。つまり、リーフ連邦は複数国家の集合体というより宗教国家という側面が力を持っていることになるだろう。

場面は変わって、リーフ連邦で最も重きを置かれているであろう場所、大地母神教の総本山である大神殿。そこは樹齢千年を優に超える大樹の枝に基盤を敷き、その上に木製の建造物が建っている。端的に言って奇怪な建築だ。想像しやすいもので言うとツリーハウスが一番近いが、ツリーハウスというには規模が違いすぎる。見上げるほどの高さに前方を埋め尽くすような大きさ、流石は大神殿とでも言うべきもので、ハウスと

呼び難い外観だ。何より目を引く特徴は、この巨大な建造物の全てが“木”で造られている点にある。土や鉄といった材料を使うことなく、木だけで大地母神教が誇る大神殿は造られているのだ。常識的に考えて建築学の常道から外れた建物。しかし、その建物は破綻することなく依然として建っている。

大神殿が壊れることなく、崩れることなく建ち続けている理由は、大地母神教徒のアームの力とも、エルフの使う魔法によるものなどと様々な説がまことしやかに囁かれていて、事の真実を知るのは大地母神教のトップのみである。

大地母神教が誇る大神殿、その中心部。巨大な広間で三名の修道女が黙礼して控えていた。その光景は、神聖さを魅せる宗教画（イコン）のようだ。この女性たちの特徴は総じて耳が長い、顔立ちが整っていることが挙げられる。その特徴からして彼女たちの種族はエルフであることが推測できた。何故なら、この世界において長い耳と容姿端麗な者は大概、エルフと呼称されるからである。もつとも、肌色が黒ければダークエルフ

だとか、人間や他種族との間に生まれた者はハーフェルフだとか呼称に差異はあるが大方はエルフとされる。祈りを捧げる三人の乙女たちは合わせたかのように三人同時に立ち上がり、閉じられていた双眸をそつと開く。

「……二人とも、遂に時は訪れました。明日妙日中には神敵たる騎士、アド・エデムがこちらに連行されてくるそうです。生きる者全てに恵みをもたらす大地を滅ぼす大罪者に然るべき断罪を……」

眼を閉じたエルフが自身の金髪を靡かせ、ゆっくりと立ち上がる。瞳に光を写さない盲目のエルフは満面の笑みを浮かべながら物騒な言葉を口走った。それに呼応するように

「……やつとですか。かれこれ一週間も大地母神教の召喚に応じず……罪人としての自覚があるのでしうか。それにアルマニアの王家も、我らの召喚に対し要求をするなどなんたる傲慢！……やつらがこちらに来た暁にはギツタンギツタンのポッコポッコにしてやるんだからあああ!!」

盲人のエルフの隣に座っていた藤色の髪色のエルフは、初めの方は宗教家らしいもったいぶった語りをしていたが、途中でボロが剥がれたのか感情を抑えられなくなつたのか不明だが口調が崩れ地が露出する。怒り心頭で顔を真っ赤にして怒る少女を宥めるように三人目のエルフが肩にそつと手を置いた。

「落ち着け、パスト。口調が崩れているぞ。少し深く息を吸え……アルマニアの王家の要求は正当なものだ。大地が枯れた所為でアルマニアは上も下も相当混乱している。この混乱を收拾するのは容易では無い。むしろ、一週間という期間では足りないくらいなのに、本当に一週間で諸々の問題を解決したアルマニア王家に驚嘆すべきだろう」

「なんですって!?! もしや、プレゼントは罪人を擁護するつもりなの!?!」

プレゼントという名のエルフが静かにパストというエルフの少女を嗜めるが、その言葉に宗教批判とでも受け取ったのか、パストは半ば激昂したような口ぶりでプレゼントに詰め寄る。激昂による極度の興奮状態に何を言っても無駄だと悟つたプレゼントはパストの口からマシンガンのように連射される罵詈雑言を聞き流す。やかましい騒言はパストの気が済めば止むのだと慣れているプレゼントは口を挟まず無言で時が過ぎ

るのを待つ。

そして、息も絶え絶えになってから、ようやくパストの高速連射トークは終了する。聞き流していたとはいえ、耳に響く大声をしばらく聞いていたプレゼントも僅かだが疲労してぐったりと近くにあったソファアに座った。そんな二人の様子を見ていた金髪盲人のエルフは、疲れ果てた両者にお茶を淹れる。

「すまない、イエット。助かる」

疲労ゆえに疲れた声でプレゼントは簡単な感謝をして、出された茶を口にする。

「お茶の一杯で大げさですよ。……プレゼント、此度の裁判の風向きは如何なるとお思いか？」

「予想は君もついているのだろうか？それでも敢えて答えるなら……荒れるだろうさ。此度の裁判はアルマニアの斬撃皇帝と大地母神教だけのものではない。気に食わんがアレ（斬撃皇帝）の力は圧倒的だ。もしも、SSS級のブレイドが出現した際には間違い

なく犠牲者は出さずに撃退できる。しかし、その代償として大地に取り返しのつかないダメージを与える、あんなものまで使って生き残ったとしても……」

「大地に害なすツルギ、それを我々は必ず裁かなければならない。だが、それは容易くないでしょう。一番の難敵は……やはり剣神教ですかね」

「いくら、強力とはいえ斬撃皇帝は人が操れる力ではない。あれは悪魔の力だ」

プレゼントは苦い顔で私見を零す。イエットとプレゼントの会話を聞いたパストは、目を吊り上げて渋面をつくる。苦々しい顔で呪詛交じりの愚痴を吐き捨てる。

「……剣神教、傷つけることしか出来ぬ異端者どもが。私たち大地母神教を舐めているんですか!? 巫山戯るのも大概にしろってんですよ!」

またもや、極度の怒りによる興奮状態に陥ったパスト。そんなパストを落ち着かせようとプレゼントは、イエットの淹れたお茶を差し出した。いきなり眼前に現れたお茶に二の句が継げなくなったパストは一瞬でも早く訴えを言うために、お茶をグイッと一気

飲みして……………

「あつツウうう!!」

盛大に火傷した。

「猫舌なのに、そんな一気に飲み干そうとするから。そろそろ、落ち着け。後な、口調をいい加減に正さないか」

「パストも、もう少し冷静さが有れば一皮剥けるのですが……こればかりは経験を積まなくてはいいけません。学んだだけでは、身につきませんからねえ」

パストは、自らの醜態を仲間の二人に見られたことで顔を赤くして黙り込む。プレゼント、イエツトはこれ以上追い詰めると彼女が暴発しかねないと視線を交わして、終了と互いに合図を出す。パストが落ち着いてきたところで、この場のリーダー格であるイエツトは、パンパンと手を叩いた。この行動の意図は、場の空気を転換させるためか、

視線を向けさせるためかのどちらか、あるいは両方を狙っていたのか。

「それでは二人とも、これより始まる裁判は熾烈を極めるものとなるでしょう。剣神教や連合国、アルマニア。様々な勢力と謀略を尽くすことになるのは分かりきっています。ですが、ここで我らが退いてはなりません。断固たる意思を持って斬撃皇帝に裁きを齎すのです。我ら大地母神教、特務信仰機関マザーの名に懸けて!!」

「マザーの名に懸けて!!!」

ここに、リーフ連邦が誇る大地母神教の女性のみで構成された特務信仰機関マザーを取り仕切る三人の戦乙女が、己の信仰を貫き守るために謀略の風吹き荒ぶ裁判に挑む。

鞘当て、もしくはは小手調べ

S i d e アルマニア

照り輝いている朝日の差し込んだ大型都市、アルマニア。アルマニア王国の首都である、この都市は復興作業を進めている真っ最中。その都市の中央には、周囲の街にある建物と一線を画する建造物がそびえている。その建造物こそ、アルマニア王国を統べる王族が暮らす王宮。現在、王宮は大きな損害を被っていたが、騎士という常識外れの者が尽力した成果により外観はどうか保たれていた。先日の決闘祭の只中に現れた斬撃皇帝の発動により、首都アルマニアは一時期ではあるが混乱状態に陥りかけた。だが、王族であるリリーシャ、アリスタの緊急対応によって、なんとか混乱は鎮静しアルマニアは平時の落ち着きを取り戻した。斬撃皇帝の被害により、被害を受けたアルマニア国立学園付近の市街地、王宮の一部は数人の騎士たちの手によって持ち直しつつある。

斬撃皇帝の発動した土地は元の栄養を宿した土地には戻らない、ならば土地を再生するのではなく柔らかない土地の上に新しい地盤を載せるといふ案が出された。

その案の結果は、現状では成功と言える。最初に柔らかな地盤の中に幾つかの杭や柱

を入れ、次に地盤の上へ創造系の騎士たちが鉄や岩などの物体を生成。沈下した地盤の上から強固な土台を創り下から柱や杭が台を根元から支えられているようだ。

斬撃皇帝の被害を受けた土地にいた住民たちは、商売や酪農、宿屋など様々な仕事をしていた。家に住めなくなり仕事が無くなった彼らは悲観はしても、その眼に絶望の色は見えなかった。元々、この世界において仕事や家を失うことは、特別なことではない。ブレイドという強力にして危険生物が跋扈する世界では、命の危機に陥ることが多く、市街地や首都だろうとブレイドが出現する可能性を秘めている。そのため、家を捨てたり仕事が無くなることは、比較的よくあることなのだ。だが、アリスト、リリーシャは土地の影響を受けない仕事、剣結晶を用いた機械工業の仕事を供給、即座に次の仕事を手配したことで喜んでいる人々がいたくらいである。

しかし、人々の意見は好意的なものばかりではなかった。今回の事件はブレイドという異生物の起こした災害ではなく、アド・エDEMという個人が起こした人災。責めようのない超常の理不尽ならば諦めがついたが、人が起こした責められる理不尽だ。人々がアド・エDEMという個人に対するバッシングを強めたのは無理からぬことだった。以前まではSSS級ブレイドという最大最強の災いを迎え撃った英雄と呼ばれていた者が、

災いをもたらす厄病神へ早変わり。英雄は怪物を倒せても民衆には勝てないという縮図をまざまざと表していた。

——アルマニア王宮内——

「それでは、アリストタ。しばらく、留守をお願いするわ」

普段は使われることのない王宮の裏門、その門は開かれ馬に乗った多くの騎士たち、そして侍女ら。あと大型の馬車とそれに引かれる車両があった。一般的な騎士という存在は馬車や馬を使うより徒歩、または自身が走った方が大抵、早く目的地へたどり着く。しかし、騎士は面目を重要視する者ばかり。ゆえに高位の騎士や王族は手間と時間の無駄だが、敢えて馬車などを利用しなくてはならないのだ。当然のことながら、アルマニア王族の現代表であるリリーシャも、その例を逃れない。

今回のアド・エデム護送に同行するのは、アルマニア王族代表として赴くリリーシャ。リリーシャの専属メイドを務めているマキナ。そして、アド・エデムの拘束を任じられ

ている牢獄の番人、ジェイル、チエーン。他に護衛役という面目で数十人ほどの騎士とお世話役を任じられた侍女ら。最後に事の発端というより元凶。斬撃皇帝、アド・エデム。

「……………」

「あの、アリスタ？……怒ってるかしら？」

リリーシヤの呼びかけにアリスタは無言で返す。しかし、無視をされた側のリリーシヤには、『仕方ない』と言いたげな表情が浮かんでいた。その表情の理由は極めて単純で、決闘祭に勝利したにも関わらずアド・エデムは裁判の召喚のためリーフ連邦に出席してしまう。せつかく、アドのいる牢獄に入る許可を得たのにアドがいなくなるのでは意味がない。加えて、自分は王宮で政務を行わねばならないのだ。これは、まさに踏んだり蹴ったりというもの。

アリスタが多少、ふて腐れるのも無理はない。だが、下手な身分の者に行かせることは裁判における発言力に不安を残す。リーフ連邦という宗教国家が主導するアド・エデムの処刑を阻止するには同じく国家元首クラスの権力者の同行が必須となるのだ。そ

のクラスの権力者などアルマニアにはリリーシャを置いて他にいない。国の最高権力者が赴くことは問題だが、アルマニア王家にはリリーシャの後を任せられる傑物がいた。稀代の頭脳を持つ王家の少女、アリストタである。アリストタは王族であるにも関わらず臣下たちに軽視されている存在。そんな彼女の発言力や蔑視の目を消し去るのに現状は最も適していたのだ。アリストタの優れた知能を持つてすれば、復興政務はリリーシャが行うより迅速に終わるだろう。そうすれば臣下たちのアリストタを見る目は変化するし、アリストタを利用しようとする者と現れる者を炙り出すことも出来る。アリストタの頭脳は凡百のそれを凌駕する、例えば政治的な頭脳戦が起きてもアリストタは政敵を逆に返り討つかも出来ない。そして、アリストタは一人ではなく、側に頼りになる友人たちがいる。だからこそ、リリーシャは安心してアリストタに留守を任せられるのだ。

「……………」

留守を任されるのが、どれだけ信頼されているかを物語っている。アリストタは聡明な子だ、これくらいのは容易に察せる。だが、自らの想い人であるアド・エデムと一緒に旅立つことに多かれ少なかれの羨ましさを感じてしまうことは、どうしようもないことか。アリストタは仲の良い姉に対しジト〜とした視線を送る。若干拗ねている妹

の目線に苦笑いをこぼしつつ、リリーシャは馬車に乗り込んだ。

「アリストタ様、もしも、何かあつた際には剣結晶も用いた通信でご連絡ください。残していくメイドは私が育てた信用出来る娘たち。ご安心して身の回りのお世話を任せてあげてもらえれば。それと政務はあまり、こんを詰めすぎないで、きちんと休息を取ってくださいね」

マキナはまるで母親のような気遣いを思う存分、發揮する。アリストタもマキナの言うことを熱心に聞いて無言でコクコクと頷いた。アリストタにとってマキナとは姉の従者である前に、母親のような存在と認識しているのかもしれない。

「では、まもなく出立の時刻ですが。……：ジェイル、チェーン、準備はよろしいですね？」
「いいよー」

帰つてきた声は、好意的に見るなら気負いのない実にリラックスしたものの、悪い面では言えば緊張感が欠片として無かつた。この双子、先日はアドを拘束するためにマキナと

敵対する一步手前にまでなったのに、それを忘れたかのように……いや実際、忘れていくのかもしれない。ジェイルもチェーンもその執着と関心が向くのは、万物を斬り裂くツルギの持ち主、アド・エデムくらいだろう。

「わーい、アドと一緒に出かけよう」

「ふふ、チェーン。お出かけじゃないでしょ。私たちは、これからリーフ連邦へアドの裁判に行くのよ。しつかり、お勤めを頑張らなきゃ」

「あく、そっかあ。うん、そうだね。ちゃんとお仕事しなきゃね。それにしても楽しみだなあ。今度の裁判でアドの刑期どれだけ伸びるんだろう？伸びた分だけ一緒にいられる時間が長くなるのになあ。ねえ、アドもそう思うでしょ？」

「がっ、かはっ……………」

「もう、リーフ連邦はアドを死刑にするつもりなのよ。私たちのアドを、私たちが管理する者を、私たちだけの罪人を」

「あつ、ごめんねえ。忘れちゃってたよ。そうだね、本当に困っちゃう。私たちのアドを死刑にするなんて、そうしたらアドを縛れなくなっちゃうもんね。アドの呼吸も体も心も意思も生命活動も、管理できなくなっちゃうのは、ヤダよね〜」

「嫌よね〜、リーフ連邦の人たちがアドを死刑にしようとするのは嫌だから。もしも、アドが死刑の判決を受けたら、リーフ連邦の人たちに”代わって”もらいましょう?」

「うふふ、本当に良いアイデアだね、ジェル。そうよ、”代わって”もらえばいいよねえ〜」

「フフフフフフフ……………」

何やら後ろの車両にいるジェルとチェーンが物騒極まりない話をしている。マキナはジェル、チェーンとアドの乗った車両に半眼の視線を送る。物凄く危険そうな気配が漂ってくるが己の主人は何も言おうとしない。

「失礼ながら、リリーシャ様。ジェイルたちは、このままでよろしいのですか」

「……今はいいわ。下手に刺激したらジェイルもチェーンも怒るでしょ。怒った彼女たちを止めることはできても、代わりにアドを拘束する者がいなくなる。そうすれば、リーフ連邦を刺激して元々ないに等しい交渉の機会が完全に消えてしまう。そんなこと、ゴメンだわ」

そう、現在、拘束や捕縛に特化し最も優秀なのはジェイルとチェーンの二人を置いて他にいない。執着心が強すぎるくらいもあるが、そこに目を瞑れば非常に優れた人材。とにかく、今はリーフ連邦へ向かわねばならない。リーフ連邦で行われる裁判に、公平性はないだろう。あるのは、斬撃皇帝と呼ばれる青年アド・エテムを処刑するための悪辣な罠のみ。しかし、黙って罠に嵌まるような馬鹿な話は存在しない。リリーシャはアドに返しきれない借りがある。妹、アリスタとの仲を取り持ってくれたことや、牢獄に幽閉されることを承知でSSS級のブレイドを倒したこと。王族としての責務に押しつぶされそうな時、支えてくれたこと。そして、最近では脱走という罪の上塗りをしてまで、アリスタを助けに行ってくれた。ならば、今度こそ自分がアドを助ける時……

ひどい男だ、アドは自分のことを大事にしていない。いつも、誰かを助けるために、待っている者がどれほど心配しているのかも知らず、力を振るい帰ってくる。誰かのために戦い、誰よりも人を救うことに邁進した彼が今では罪人と呼ばれ、多くの人に疎まれている。彼を罪人にして家族や友人から引き離れたのは、私の決断。王としての合理的な考え。でも、ひよつとすると私が彼を罪人として幽閉したのは、一人の女性として自分の側にいて欲しかったからではないのか？

……アド・エデム。……彼との思い出は数えるほどしかない。でも、彼を思い出させるものは数え切れないほどある。そして、何より彼の笑顔が忘れられない。遅いのかな、今頃になって言うのは……私、リリーシャ・アルマニア・ブリエスタは、アドのことが好きなんだって。いくら、言葉を重ねても伝えきれなくらいに好きなんだと。

馬に乗った騎士たちが門から出て先導を始める、それを追うように御者席に乗ったマキナは馬の手綱を締めて出発の意思を伝えた。アルマニアの女王リリーシャを乗せた馬車とアド・エデム護送用の車両はリーフ連邦へ向かって進み出す。彼らの目的は処刑の危機に瀕しているアド・エデムを救うこと。明確な指標をもって今、リリーシャたち

を乗せて馬車は行く。

目指す先は、大地母神教が待ち受けるリーフ連邦。

S i d e アド・エデム

俺は自分の選択を後悔していない。ただ、現状に対する反省がある。うん、いくらピ
ンチだからって街中で俺のツルギを使うのはやっちゃダメだよね！どこかの銀髪の侍
が言ってたように、一時のテンションに身を任せる奴は身を滅ぼすつてことを身に染み
て理解したよ。おかげで俺は牢獄に逆戻り、しかも別の場所で裁判が行われるとか下手
すれば詰んでない？

それに加えて、ジェイル、チエーンの鎖の締め付ける強さが以前より遥かに上がつて
いて絞首刑が常に実行されているようなもん。

オデノ、カラダハボドボドダ！

って思わずネタに走ってしまいうくらい、大変かつ深刻っぽい状況になっている。
せつかく、三人の後輩が時々面会に来てくれるようになったと思えば、すぐに他所へ
連行されるって鬼の所業じゃない？

……いや、それよりも。……首がヤバい、呑気に別の話題で気を紛らわせよ
うとしてたけど、やっぱムリ。ジェルたちに鎖の締め付けを緩めるように頼もうとし
ても、すっかり極まっているせいで声が出せないでいる。このままじゃ、連行される先
に着く前に逝ってしまうがな。呼吸も満足に出来ないような大ピンチ、っていうか今ま
でに出会った敵より身内の方が命の危険を感じるって色々と問題でないか？

……意識が飛びそ……

『諦めたら、そこで試合終了ですよ』

……安西先生。俺……………生きていたいです。

嗚呼、ついに幻聴が聞こえてくる始末。これは今日が俺の命日ということなのかな。どっかのタイムスリップした医者は「神は乗り越えられる試練しか与えない」とか言ってたけど、俺の試練だけ難易度がルナティックになってやしませんか。意識がトンデモない方向に向かってしていると、馬車に同乗しているジェイルとチェーンが楽しげに話していた。

『わーい、アドと一緒に出かけー』

『ふふ、チェーン。お出かけじゃ■■■■しよ。私たちは、これから■■■■ヘアドの■■■■に行くのよ。しつかり、お勤めを頑張らなきや』

「あー、そっかあ。うん、そうだね。ちゃんとお仕事しなきやね。それにしても楽しみななあ。今度の■■■■どれだけ伸びるんだろう？伸びた分だけ■■■■

れど、これ以上意識を保つのが限界っぽかったため諦めて気絶することにする。

ーやっぱり、鎖には勝てなかったよー

S i d e マキナ

城から出て早くも二日が経過した。この二日間、野生のブレイドによる数回程度の遭遇戦があったが、そのどれも護衛役の騎士たちで処理できるレベルだったため順調にリーフ連邦への道のりは進んでいる。リリーシャの側仕えにして王族の護衛を任されたマキナが出張るような状況が無いため、比較的に安全な移動と言って差し支えないだろう。目下の問題はジェイルたちに拘束されているアド・エデムだが、彼はなんだかなだ言っても最終的に上手くやる子。何も心配ないかと肩を竦める。

(それにしても移動速度をもう少し上げられないものでしょうか、馬を使った移動など効率を考えればまったく意味を成さないというに。騎士の健脚を以つてすればリーフ連邦まで一日とかからないのに。王族の権威を示すためとはいえ、わざわざ時間のかかる移動手段を用いらざるを得ないとは)

のんびり長く馬車に乗っていたせいとか、どうにも気が緩んで仕方ない。護衛として常に気を張っていないなければならぬ身として、それは歓迎できないこと。リーフ連邦まで順調に進んでおり、このペースなら明日の夕暮れ刻には到着する。向こうにつけばブレイドより知恵の回る敵手が現れ、戦闘よりも複雑な謀略戦が始まるはずだ。

それまでリーシャ様には十分な休息をとっていたただかなくては。

しかと己の役目を再認識し、強く手綱を握り気合を入れ直す。だが、手綱を強く握ったことで馬が何事かと、驚いたのか足取りを止めてしまった。王族の乗る馬車が急に止まってしまったことで周囲の騎士たちも停止する。やってしまった、周囲の騎士たちに何でもないと手を振り、手綱を引き直そうとした。

そこに、マキナや周囲の騎士たちの鋭敏な五感が、急接近するナニカの存在を確認した。通常の生物ではあり得ない速度で未確認の物体が接近する。そのような速度が出せる存在は、この世界において“たった二種しか”いない。すなわち、人知に縛られない“騎士”と、全人類に敵対する“ブレイド”のみ。未だ姿を現さないアンノウンの敵に備えマキナ含めた騎士たちは己がツルギを具現化する。御者台から降りたマキナは、両足を大きく広げ臨戦態勢の姿勢をとった。

会敵まであと十五秒

ツルギを構え、未確認の敵への警戒に全神経を注ぐ。

足音に変化が感じられる。こちらが戦闘態勢に入ったことを相手も察知したようだ。この時点で敵はAA級以上のブレイド、もしくはどこかの国の騎士に間違いない。草むらの中から、三つの黒い影が飛び出した。その黒影たちは黒いもやを吹き出しながら二本の足で疾走している。黒い霞に覆われているため、敵の容姿について情報が掴めない

が確信できるのは、敵は何処ぞの騎士であるということ。謎の黒影群は真つ直ぐにリーシャを乗せた馬車に突貫してきた。周囲の騎士が無防備に飛び込んできた外敵を倒すべく、数人の騎士たちのほぼ同時に振られた刃が三つの黒煙を断ち切る。

両断された黒煙は、両断された途端に霧のごとく空気に解け消えた。刃で切り裂いた者が存在せず、まるで幻覚でも見せられたような異常に騎士たちは動揺の声を洩らしてしまう。動揺が収まりだすと何も無い空間に黒煙が発生し、謎の敵が出現した。この国外公務ではアリスタを補佐、護衛するためリーシャは騎士団の団長や副団長といった幹部クラスは城に残してきている。ここにいるのは、長年騎士団に所属していた信頼のおける者たち。今回の公務で最も重視したのは力量より信用に足るか否か。まさか、敵対する何らかの勢力がこんな直接的な行動に出るなど、予想すらしていなかった。

「アポイント無しにこの無礼。貴方達、いったい何者です。こちらにいらつしやるお方をアルマニア国、王女リーシャ・アルマニア・ブリエスタ様と知つての狼藉か！」

黒影に向かいマキナは威嚇も兼ねて、己が主の名を高らかに謳う。敵影は僅かに圧されたように一瞬、体を揺らす。だが、すぐに怯えを払ったのか短刀を逆手に持ったまま、

戦闘態勢を取り続けている。

「その馬車に乗っているのはアルマニアの王女か……………」

「?…………リリーシャ様が狙いでは無いのか。ならば…………まさか!」

「…………斬撃皇帝は後方の馬車だ。行くぞ」

三つの黒影がリリーシャの乗った馬車付近から姿を消し、高速でアド・エデムが拘束されている馬車に飛びかかる。護送用の馬車付近は護衛の騎士がいない、三影は好機と見て取り加速を続け馬車に張り付いた。周囲の騎士たちは罪人であるアド・エデムの警護より護衛対象であるリリーシャの馬車から離れないことを優先した。方やマキナはというと、馬車に張り付いた三影を哀れそうに眺めて静観しているのではないか。これはアドの身を案じていないわけではない、単純に”アド・エデムの側にいる危険人物”の力量と、近づけば見境なく攻撃されるという信用から無言で、”見”に徹しているのだ。

その歪な信用は裏切られることなく爆音と共に証明された。仮にも囚人となった騎士を連行するための特殊な馬車、腕利きの騎士がいくら攻撃しようと傷一つつかないはずの馬車は、飛びついた三人の襲撃者ごと轟音を出して爆発四散する。この破壊を為したものの正体、それは空中にたなびく二本の鎖。天を駆ける龍が如く、双つの鎖は宙に浮いたまま、敵対者の反応を観察する。吹き飛んだ馬車から登場するのは、拘束に特化した双子の騎士。彼女たちは吹っ飛ばされた三人を、さながら実験動物でも観察するような酷薄な眼に映す。

「……………こはっ……………なっ……………何故、ここまでの実力者が、混ざり者ばかりのアルマニア風情に肩入れする!? その力を正しきに用いず、雑種の手先として振るうことに屈辱を感じないのか!」

「クソっ! 雑種国家の犬畜生め。我々の大義の邪魔立てをするなど」

「……………よせ、斬撃皇帝との接触は失敗と見なす……………退け……………」

「そんな、我らが失敗など」「ほんの少しの時を頂けば、このような者たちに遅れを取る

ことは」

『退けと言った……』 命令だ』

明らかに仲間に向けるレベルではない殺気を放ち、首魁級の影は音なく撤収する。上官らしき男が消えたことで、残った双影も舌打ちを叩き無音にて去っていった。警戒を解かず周囲を伺うが、少なくとも敵対者たちは近辺にはいないようだ。ジエイル、チエーンの二人は、鎖の具現化を解きアドの両隣に座り直した。一方、アドはというと、呑気に眠りこけている。こんな状況下で眠っていられる精神力の強さを讃えるべきか、警戒心の無さを怒るべきか。

「おい、斬撃皇帝のヤロウ、呑気に眠っているぞ。こつちが必死で戦っているなかで」

「おいおい、本当か。まったく、罪人としての自覚があるのか？」

「何で、あんなヤツまで警護しなくては……」

警護の騎士たちの考えていることはもつともだ。アド・エデムは罪人、他人に害を為す”斬撃皇帝”。しかし、彼は人を傷つけるだけでは無く助けることもしたのだ。アド・エデムの斬撃皇帝が振るわれる時は、決して私欲によつては振るわれない。そんな彼を信じているのだ。彼の気高い覚悟と誇りを万人に知ってもらおうとは考えてはいない。だが、彼には多くの貸しがある、それを返すまでアド・エデムは守ってみせる。

「貴方たち！無駄話はやめて、すぐに再出発し直しますよ」

騎士たちはマキナの発言で、我に返つて再び周辺の警戒を始めた。騎士たちが完全に元の配置に戻ったあたりでリリーシャの馬車の窓が開けられた。マキナはそれを見て、すぐに窓の近くに立つ。

「マキナ、先ほどの襲撃者がどこに所属しているのか。何らかの特徴はあつた？」

「……………いえ、敵は何か黒い煙のような者で身を覆つていて顔すら確認出来ませんでした。しかし、襲撃者たちは我々を”雑種国家”と呼んでいました」

「そう、もしかするとブラフの可能性も無くはないけど、国外の者か」

アルマニアは種族の自由を標榜する国家で、人間、獣人、エルフ、魔人など多くの種族が住み暮らす国だ。そのことから、周辺国家では「雑種国家」などの蔑称が用いられているほどだ。この蔑称は国内では使われることはまず無い。先入観を持つのは悪手だが、今回の襲撃はおそらく国外の何らかの者の仕業。問題は、それがリーフ連邦か、連合国かということだ。裁判は始まってすらいなのにアド・エデムを狙う輩が出てきた。リリーシャは、今回の一件が容易く決着しないということを再確認し、窓を閉めた。窓が閉まるとマキナは馬車内のリリーシャへ礼をして御者台に行き、そつと静かに馬を走らせる。中にいるリリーシャが万全の休息を取れるように。

リリーシャは眼を閉じ、思考を回転させながらも休息を取る。十全のコンディションで敵地（リーフ連邦）に到着できるようにするため。これはまだ、単なる小手調べ。本番の幕を開く前の、くだらない茶番。斯くして、最初の鞘当ては大事になること無く終わった。しかし、これより始まるのは頭脳と策謀に覆われた戦場。

果たして、最後に勝つのは誰なのか。そして斬撃皇帝に対する勘違いは、いつ消える

のか。

――序章は片がつき、演目は開ける。その先にあるものとは――

まともではない人間の相手をまともにするのではない

S i d e リリーシャ・アルマニア・ブリエスタ

四日弱の旅路を越えて、ようやく、アルマニア一行はリーフ連邦に到着した。もつとも、今回の裁判ではアルマニアは、リーフ連邦からすれば悪役も同然。他国の王族に対して、石を投げたり通行の妨害をする輩は、流星に現れなかつたが歓迎されているという雰囲気でもなかつた。その様子を見て、リリーシャは、先日自分たちを襲撃した者が何処の国に属しているのかと考え出した。現状では証拠に繋がるものや手がかりは欠片としてない。ゆえに、襲撃者の正体に頭を悩ますなど時間の無駄、徒労にしかならんだろう。だが、裁判を行う大地母神教の神殿に着くまで、あまりにも時間が空いているために、どうしても思考が思い通りとはいかないのである。

(あからさまなまでに、アルマニアを敵視しているわねえ……リーフ連邦からすれば、アドの斬撃皇帝は大地に害を及ぼす危険物。早くも処刑したいというのが本音かしら。となると、襲撃者たちの行動に違和感がある。あの者たちはアドの命ではなく身柄を狙っていたようだった。となると、襲撃者たちの雇い主は連合国か、剣神教? いや、リー

フ連邦の中にも強力なブレイド対策として、アドを欲している一派が?)

確証も手がかりも無い。これは思考の無駄、リリーシャは頭を振るって先ほどまでの思考をリセットする。そんなことをしていると、リリーシャを乗せた馬車が止まる。”やつとか”と内心で溜め息を吐き、馬車を降りる。馬車から一步、足を踏み出せば思考と体は外行き用のモノとなり、完璧な姿勢と完璧な笑顔でリリーシャは登場した。馬車から降り立ち邂逅するのは、リーフ連邦の重鎮にして大地母神教のトップクラスの面々。大地母神教の全てを統括する特務信仰機関マザーの三名だ。向かつて藤色の髪を持つ左の女性は、こちらに対して感情を隠すことなく憎々しげに睨んでいる。それに対し向かつて右の褐色肌の女性はというと、無表情でこの場に立っていた。その表情からは好意も悪意も感じられない。ただ、アド・エテムが収容されているであろう馬車を、無表情のままで見つめている。最後に真ん中の女性だが、リリーシャに満面の笑みを向けている。その笑顔には好意を引き出し、警戒心を解きほぐすような穏やかなオーラを漂わせていた。

リリーシャは、その笑顔にシンパシーを抱いた。相手の警戒を解きほぐすための効率

的で薄ら寒い笑顔。さも、自分はあるあなたの敵では無いと言わんばかりに振りまく温厚そうに偽った雰囲気。コイツは自分の同類だ。相手もおそらく、自分の仮面の下を見抜いているはず。アドの処遇を定める裁判で、この女性は最大の障害として立ち塞がる予想が脳裏によぎった。

「初めまして、リリーシャ殿下。私、大地母神教、特務信仰機関マザーに属するイエット・ツークムと申します。お噂はかねがね、お忙しい中にこちらへいらっしやって頂けたこと、大変感謝いたします」

「ええ、イエット殿。そちらも、お忙しい中の手厚い歓迎に心から感謝します」

二人の会話は、一見すると当たり障りが無いように思われるが、どちらも相手に対して痛烈な皮肉をぶつけ合っている。まず、イエット・ツークムはリリーシャへ”忙しい中”と口にした、それは斬撃皇帝の被害を受けたことに対しての皮肉だ。リリーシャもイエットへ”忙しい中”というフレーズを使用しているが、そちらの裁判で仕込みや不正の準備は出来たのかと暗に仄めかしている。どちらもニコニコと笑いあっているが、その背景には真つ黒な暗雲と雷が幻視できた。

「まず、リリーシャ殿下たちが、リーフ連邦に滞在するための場は我々が設けさせていただきます。リリーシャ殿下とその護衛の方々は、そちらへお泊りください」

「はい、その御心遣い、ありがとうございますね」

「いえいえ、お気になさらず。……あの、ところで件の者は何処にいますでしょうか？」

「件の？……フフ、そのように言葉を濁さずとも良いですよ」

イエットとリリーシャはそれぞれ、互いの言動に注意しているために、じれったい会話をジワジワと続けている。

「無駄な会話は結構だから、さっさと罪人の引き渡しをしてくださりませんか？」

向かって左の女性は、そんな二人のまどろっこしい会話にヒクヒクと顔を引きつらせ、リリーシャへ丁寧かつ遠回しな催促を叩きつけた。おそらく、怒りや不満を隠して

いるつもりなのだろうが、今の彼女の表情の引きつりと声のトーンからしてリリーシャでなくとも彼女の心情は把握できる。

「こらっ、パスト!? 貴様は礼儀をわきまえんか! ここで、そんな無礼をすれば」

「……………プレゼントってば、うるさい、うるさい!!! こいつらは罪人を連行してきたんでしょ。だったら、早急かつ迅速に引き渡すつてのが常識じゃないの!」

……………ここまで自分に正直であると、怒りよりも先に爽快感が来る。リリーシャは『出会いが異なれば、このパストという子とは親しい関係になれたかもしれない』と脳内でどうでもいい考えを動かしていた。イエットという相手は自分に近い何かを感じるため同族嫌悪らしきものを感じ、どうあつても好きになれない。プレゼントという女性は、こちらと接触する気は無いようで、こちらもそんな相手には興味すら無い。だが、パストという女性は、リリーシャの個人的な琴線にどうも引つかかる。権謀術数渦巻く政治という戦場で過ごしてきたリリーシャからすれば、ここまで素直で愚直な人物は実に好ましい部類に入る。まあ、もつとも相手からすれば、こちらは敵という認識なんだろうが。

パストと呼ばれる女性が、より攻撃的なセリフを吐こうとしたものの、纏め役らしきイエツトが無言で放った腹部への拳によって、強制的に口を塞がれる。その拳、不意とはいえ実力のある騎士のリリーシャの目ですら、追うことがやつとだった。風の噂に聴いた“盲目の鉄拳”の名は飾りでは無いのだと認識する。そして、リリーシャは強敵となるであろう相手へ見惚れるほど美麗で柔らかな表情で微笑んだ。

S i d e イエツト・ツークム

イエツト・ツークムは、自分の同僚であるパストを連れてきたことは早計だったかと、肩を落としていた。アルマニア王国から来訪した要人たちを牽制するために、特務信仰機関マザーの三人のメンバー総出で出迎えたわけだが、パストの礼を失した暴言と無礼。これは、リーフ連邦ひいては大地母神教の品格に疑念を持たれることになるだろう。暴言を続けざまに吐こうとした彼女を拳で気絶させ、これ以上の失態を抑えたはいが、リリーシャ殿下の対応は如何なるものか？

「大変申し訳ありません、リリーシャ殿下。どうにも、斬撃皇帝の悪評を聞いているためか、この子はどうにも冷静ではいられなかつたようです。彼女の失態と、彼女を連れてくる選択をした私。どうか、ご容赦いただきたく存じます」

「ええ、まだまだ年端もいかぬ者は礼儀や所作に問題があるものです。私も幼少の頃は似たようなものでした。ですので、そこまで深くお気になさらずとも良いですよ。これは一つ、そちらの顔を立てましょう。困った時はお互いさまですもの」

やられた、パストの無礼について追求しない代わりに、こちらへ貸しを作るとは。リリーシャ殿下、どうにもやり難いと思えば、まさか自分の同類だったなんて。それに長寿で知られるエルフを相手に”年端もいかぬ”という言葉を使うなど、痛烈すぎる冗談だ。イェットは内心では怒りに震えていても、外面だけは笑顔の状態で固定しておく。今回のファーストコンタクトの目的は、アルマニアの滞在先をこちらで設定したことを告げることと、罪人である斬撃皇帝の身柄を手にすることだ。片方の目的は果たした、後はもう一つの方だけだ。

「リリーシャ殿下、……………先ほどの今で恐縮ですが、斬撃皇帝の身柄を預かりたいと」

実はというと、この話題を振ることは自分の頭を大変悩ませていたことだった。図らずもパストの暴走によってこの話題を振るのは難儀しなかった。もつとも、代償として支払ったものは小さく無いのだが。仕方ない、斬撃皇帝の身柄をこちらが手に入れられるということには変えられない。

「……………はい。それでは、アド・エデムの身柄を一時お預けします」

以外だ。斬撃皇帝の身柄について、なんだかんだと誤魔化しや時間稼ぎなどを想定していたのだが、あっさり引き渡しを了承したではないか。案外、聞き分けはいい。イエツトとプレゼントは、アルマニア勢の評価を多少ではあるが引き上げた。後方の馬車に入っていた者らが、外の声を聞きつけリーフ連邦に降り立つ。現れたのは、銀髪をポニーテールで纏め翡翠色の瞳を輝かせている双子の女性たち。彼女らの手には、罪人を拘束する封印のアームが握られている。チャラチャラと軽やかに音を立てている鎖は、傍目から見れば細く頼りなさげにさえ見えてしまう。だが、ツルギよりもアームに重きをおく大地母神教の二人には、双子の鎖は尋常ならざる執念と意思が込められた凄まじ

い強度の鎖であることを見抜く。そして、鎖のアームに繋がれた平々凡々そんな外見の男こそ、大地に災いを齎すツルギの騎士。” 斬撃皇帝アド・エテム”

強力なアームを持つ騎士が最強のツルギを持つ斬撃皇帝を拘束している事実、イエットとプレゼントは心の中でツルギよりもアームの方が強いという優越感を味わう。斬撃皇帝を束縛している騎士がアルマニア勢に在るといのが、若干気になるが瑣末なことだ。機会があるなら、是非とも大地母神教への改宗を勧めてみよう。そして、彼女らの鎖に縛られ、馬車から外へ連れてこられた黒髪黒目の凡庸そうな男。黒髪黒目の人は東方へ行けば幾らでもいる。だが、斬撃皇帝という事実だけで凡庸な見た目から悪印象しか抱けない。例えば、万象を呑み込まんとする地獄の闇のような髪。月や星のない無明の夜天のごとき瞳。覇気のない立ち姿は、こちらを侮り虚仮にしているようだ。そう、相手の姿、態度の全てが何かと癩にさわる。斬撃皇帝、アド・エテム。彼を牢獄に入れる前に、皮肉でも言つてやろうかとイエットたちは考えていたが、自制心を保つために斬撃皇帝との接触は最小限にしておくことにした。

「それでは、斬撃皇帝を収監する牢獄までの案内役を呼びましょう」

「……その前に、ジエイル、チェーンの二人も斬撃皇帝と共に行くのですか？」

「ええ、こちらとしては大変、心苦しいのですが。鎖の騎士のお二人には斬撃皇帝の拘束を行なっていたただかなくてはなりません。そのため、牢獄までご同行する形となつてしまいます。無論、お二人には然るべき環境とおもてなしをするよう現場の者に言いつけておきます」

「……そうですか、わかりましたわ（ジエイルたちだけ扱いがご丁寧なこと）」

「さて、ご同意がいただけたところで……クリス、クリス・ホーリーナイト！」

イエツトが凜と張り上げた声に反応し、上空から人影が降下してくる。器用なことに張り巡らされた木々の枝を足場として、こちらへ降りてきた。その身のこなし、野生の獣が自然に溶け込む狩人のよう、如何にもサバイバルに長けていることを否応なしに悟らせる。

シャン！

軽やかに男性のエルフは、アルマニア勢と大地母神教勢力の中間地点へ着地した。そ

の男、金髪碧眼、整った顔立ちと甘いマスク。人が一般的に想像するエルフ像を、そのまま現実に持ち出したような印象だ。しかし、大地母神教が案内役だけとはいえ、斬撃皇帝を任せた人物。当然、顔が良いだけの優男であるはずはない。

「はっ！大地母神教、特務罪人捕縛官。クリス・ホーリーナイト。ここに参上いたしました！」

「クリス・ホーリーナイト。貴方はこれより斬撃皇帝を牢獄まで護送する役に任じます。くれぐれも失態なきようお願いしますよ。……それと鎖の騎士の二人には、迷惑と無礼をかけぬことを肝に銘じなさい」

「ハッ!!」

罪人である斬撃皇帝と、斬撃皇帝を拘束している鎖の騎士たちは、クリスと呼ばれる騎士に連れられて、この場から退場していった。アルマニア勢は顔見せが終了したことで、専用の宿泊施設へと移動していく。そして、イエットたちは他国の来賓の出迎えと歓迎、それに裁判のための根回しをするために一旦、大地母神教の神殿に戻ることにし

た。

「あの黒い男が”斬撃皇帝アド・エデム”ですか。見た目は凡庸、けれど底知れぬ邪悪さと禍々しい何かを感じます。牢獄での監視には、特に注意が必要ですね」

「ああ、一目見ただけで直感した。あれはダメだ。あれだけは許せん。ツルギとか、アームであるからではない。あれは単純に危険すぎるのだ。斬撃皇帝、大地を枯らし水を干上がらせる。果ては大気すら根こそぎ喰らい尽くす恐ろしき怪物。イエット、もう裁判などと悠長なことは言っていられない。いつそ、獄中で何とか殺せないのか？ 獄中死というのは、他国の者たちに不審を抱かせるかもしれないが、あの騎士を仕留められるならお釣りがくる。何なら、私が直接でも暗殺に……」

「プレゼント、落ち着きなさいな」

「……だが、しかし……」

「裁判に参加する者たちの目的は斬撃皇帝の身柄にあります。SSS級ブレイドの撃破

が可能な怪物騎士、その能力はブレイドとの戦闘のみならず、他国への軍事的な脅威にもなり得る。下手なことをすれば、リーフ連邦周辺の国々が全て敵になることも予想できるでしょう。ですが、この裁判の果てに、何処かの国が斬撃皇帝の身柄を正式に手に入れてしまえば……戦争がおきますよ。史上最大、それこそ人類の存亡に関わる戦争がブレイドという外敵を相手にした戦争なら、まだ許容できます。しかし、人類同士が仲間割れ……いや我々は仲間というわけではありませんね。せいぜいが同種、共喰いと称した方がしつくりくる」

「共喰い……戦争……勝っても負けても、その先に次世代の可能性はないではないか！」

「はい、だからこそ。——だからこそ、今回の裁判にて斬撃皇帝へ鉄槌を下さねばなりません。この裁きの機会で、我々は己の真価を問われることでしょう。……未来を生きる若き命と、可能性たちのためにも斬撃皇帝の裁判は、大地母神教が制さなくては……」

「ああ、そうだな。多くの者たちが我らに牙を剥くだろう、しかし、為すべき正義のため。」

行わねばならない仁のため、万難辛苦の試練を乗り越えよう!!」

プレゼントは、イエットの『覚悟』を理解し、高らかに不撓不屈の『覚悟』を宣誓した。イエットは、戦友にして同胞のプレゼントの誓いの言葉を胸に刻む。例え、どのような試練が立ち塞がろうと決して諦めず折れることの無いようにするために。

「――グレートです、プレゼント。……………それにしても不思議な気分ですね。人類の存亡が賭けられた状況、こんな重大すぎる責任を背負う事態だというのに、私の心と行動には一点の曇りも無い。全てが正義だと感じる。――そう、私は今、『白』の中にいるのです。斬撃皇帝が『黒』！私たち大地母神教は『白』。『黒』と『白』が明確に分かれています。心を覆う不安も恐怖も、物ともせず、勇気が湧いてくる。――『正しいことの白』の中に私たちはいるのです!!」

大地母神教の敬虔なる信者、イエット、プレゼントに、もはや一片の迷いも無い。彼女たちは、真つ直ぐに大地母神教の最も巨大な神殿が建っている大樹へと向かう。斬撃皇帝と対峙した大地母神教、彼女らの覚悟はアド・エデムを裁けるのか。この裁判の結

果は、闇夜の荒野のごとく未だに未知数だ。どうか、願わくば彼女らの覚悟が光なき荒野を照らす輝きにならんことを……